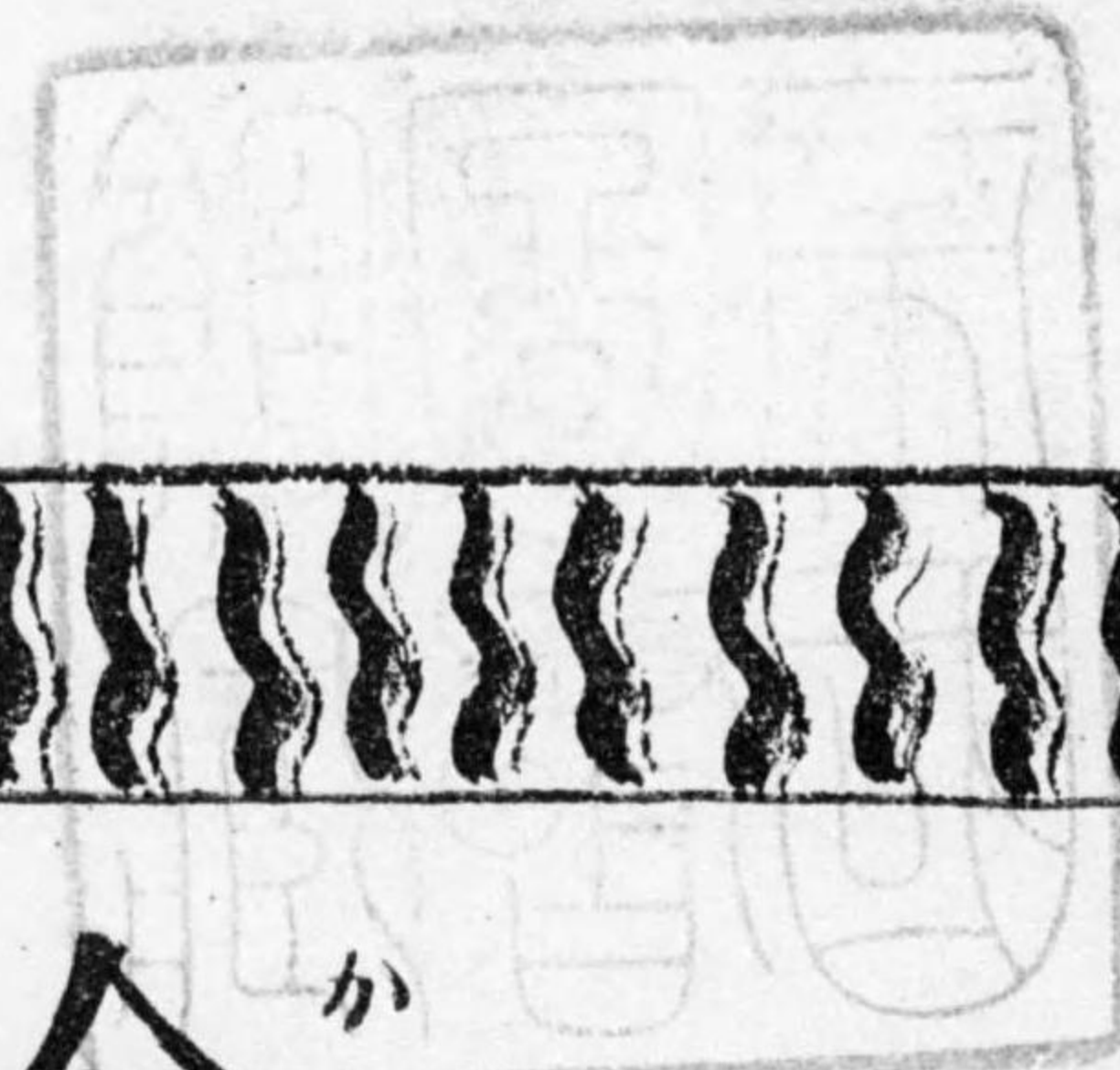


551
110

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 1 2 3 4

始





金 か
わ

著夫資鴻宮

天正
15. 5. 14
内交



一九二〇年のことである。四月の末の朝の光が、株式取引所の構内にも明々と漲つてゐた。讀者も記憶してをられるだらうが、その頃は、世界大戦後の好景氣と云ふ聲が、日本の津々浦々の隅々まで行き渡つてゐた。歐羅巴のあの長い戦ひが終つたのだ。平和の光は再び輝き始めて來た。戦地にあつた人々は、皆な彼等の故郷に歸つて行く。そこで莫大な賞與や手當が、民間に落て行く。然しイギリスでもフランスでも、ベルギーでもドイツでもイタリアでも、戦時品の製作に忙がしかつたその土地では、日用品や贅澤品の生産は、急場の間には合はなくなつた。然し戦場から無事に歸つた人々は、凡ゆるものを要求する。その要求に應ずるには、戦争の影響を深く蒙ら

ない、アメリカか日本の手に俟つよりほかに途はないのだ。歐羅巴の民間に落た巨額の金、それはやがて我等の國に落ち込んで来るものだ。大戦後の好景氣に恵まれた好機會、それは將に日本の浴すべきものである。眞の好景氣、それこそこれから来るべきものだ。

かうした考へは、日本中に行き渡つた。さうして、その反映は、金融上の中樞神經である株式取引所の相場の上に明かに現はれた。昨日も高かつた。今日も高い。明日も恐らく高いに違ひない。東株は千圓になる。郵船も、鐘紡も、株券を持つ者の資産は無限に膨脹して行くのだ。華やかな夢が、いや夢ではない現實だ。夢などと思ふ者は時勢を知らないのだ。株を買へ、株を、黄金の天國は、株を持つ者にいち早く下つて来る——。それはその當時の人々を一番強く支配した心理であつた。相場は果して高かつた。一昨日も昨日も、さうして恐らく今日もまた。——

四月の末の晴れやかな朝の光が廣い構内に一杯に漲つてゐた。水をまいた三和土の上にも、場臺の上にも、建札の並んだ上の欄干にも、その繁榮を祝福するように明々と輝いてゐる。參觀席にも、勝利を期した人々の顔がもう一杯に並んでゐた。

口笛を吹きながら、愉快らしく駆け廻る小僧、相場の高下をその双手の中から湧き出させる、

自信を持つた場立の入場、立會前の取引所は力の満ちた活氣をだん／＼に呈して來た。凄じい闘争は、これから將に演ぜられる。上か下か、巨万の富を得るのも失ふのも、あの建札に記される、金高によるのである。

立會を告げる鈴は鳴つた。朝の大氣を振はせて、勇ましく鈴は鳴る。戦闘の開始を告げる金屬の響きである。店主、場立、手合取は慌たゞしく然も闘牛士でもあるかのように、勇ましく續々と入場して、場の中は一杯になつてしまつた。場臺の上には、書記、市場監督の顔が並んだ。時計は無心に九時を打つた。

『とうかぶうつ』市場監督の開市の聲が場の中に凜と響いた。十圓高か、二十圓高か、今日もまた高いであらう。參觀席も場の中も、嵐の前のようにひつそりした。

『三百八十圓買だつ』花房商店の場立は、昨日よりも五圓方高く手を振り始めた。それは萬人一致した豫定通りの事である。

『八十五圓買つ』他店の場立がそれに續いた。その時、市場の片隅から、

『よし、賣らう賣らう。千枚よし、もつと賣らうもつと賣らう、三百二十圓やりだ。三百圓だ。』

ようしよし、二百八十圓やりだ』と猛烈に賣り始めたものがあつた。嗚呼、晴天の霹靂である。今まで空は明々と晴れ渡つてゐたのである。どんな旋風も、突風も、恐らく斯うまで急劇に出現はして来まい。大地がにはかに搖ぎ始めたのか、並みゐる家が倒潰する大地震にも似た混亂が市場の中に湧き立ち始めた。混亂の動機、萬人の豫想を裏きつて、平地に波瀾を巻き起した、あの場立は、どこの店に屬する男なのか、この急激の混亂に驚いて、立會場の周圍に群つた地場の店員を初めとして、參觀席に並みゐる人も、皆な一齊にたゞ一人で荒れ狂ふ、その男の上に眼をそゝいだ。

立會場の中は店主、場立、手合取で一杯になつてゐた。手を振り聲を囁らして、場臺の下に打寄せ打返す。人波は浪立ち、揉み返し、物凄い渦を巻いてゐる。その渦巻の中心に突つ立つて、むらがる周圍の敵をたゞ一手に引き受けて、

『ようしつ、賣らう賣らう。いくらでも賣つてやる。二百五十圓だつ。四十圓やりだ、ようしつよし』

と滅茶滅茶に兩手き叩き、聲を囁らして叫びながら、猛烈に賣手を振つてゐるのは、まだ二十八丸の洋服を着た、色白の若い男である。彼の持つてゐる賣玉はどの位あるのだらうか。

『ようしよしよし、いくらでも賣る、いくらでも』渦巻の中心に巻き込まれた木片のように身體をぐる／＼廻しながら、必死となつて突撃する。

『ようし賣らう、賣つてやらう、いくらでも賣つてやる』

突如として現はれた、この逆襲者の手によつて、相場は見る見る中に崩れ始めた。僅か數分間以前まで、大戦後の好景氣を夢みつゝ、今日もまた高いであらう、と驚喜に満ちた豫想を抱いてこゝに集まつた人々の期待を見事に裏切つて、刻々に惨落して行く。恐怖に満ちた動搖は、廣い構内を震駭させ、やがてこの町全體の人々を脅かすべく響いて行つた。

『山八だ、山八の賣物だ』場内にある人々の口から口へ、この破壊者の店の名前が、不思議らしく傳はつて行つた。

『何？ 山八、何だあの曲り屋が』聞く者は更に不審さうに眉をひそめた。

山八！ それはつい昨日まで、この好景氣の暴騰相場を逆に賣つて、損失を續けて来た店である。そしてその損失も今は極端に達したらしい。氣息奄々として、僅に店の名を保つてゐたが、

いつ看板をはずすだらうか、彼れが閉店の悲鳴を上るのはいつであらうか、それも遠い先の事ではない。あんな店と引するな、信用をおくな、勝つ者は正しく、敗れた者は正しくない、と云ふ此町の特有の原理から、警戒と輕蔑の的となつてゐたその山八が、突如として輕蔑を嘲笑し警戒を蹂躪して、猛然と奮ひ起つて來たのである。人々は驚き、呆れ、そして最後に度を失つた。然し場の中では若い場立が、尙も猛烈に狂つてゐる。人々の驚愕も混亂も、彼の眼には映らないものゝようだ。彼れが手を振り叫びを上げる度毎に堅岩のようにいかめしかつた敵壘は見るも憐れに粉碎されて行く、若い力の限りなき放出が、彼れをすつかり酔はせてしまつたようである。爆弾を擲つように、拳を開いて賣玉を浴びせかける。相場は崩れる。追撃する。彼れは歡喜の頂上に登つてゐた。

場立は全く酔つてゐた。昨日まで、曲り屋（損つゞきの事）の店員として、日蔭者のように場の片隅でいちぢけてゐたその彼れが、今は王者のような威嚴を有つて、敵陣に對してゐる。憤恨の爆發、復讐の歡喜、彼れはすつかり酔つてゐたのだ。が然し、それはたゞこの若者の無邪氣な歡喜に過ぎなかつた。彼れはたゞ自分の若き力を思ふがままにほとばしらせ、敵軍の算を亂して潰走する

姿を眺めて、喜んでゐるだけにしかすぎないのだ。要するに彼れはたゞ一個の傀儡だ。

然し、場内の隅の方で、柵に背を凭らせて場立の一舉一動をじつと眺めてゐる男がある。鮮かな手品師の手の中から、噴水が迸り色紙が繰出されてくるように、場立の双手がしなやかに叩かれる時賣玉は痛快に擲られる。敵軍は潰走する。相場は崩れる。けれどもそれは、單にその鮮かな戦ひぶり許りに酔つてはゐられないのだ。場臺に記帳される出來高の總數、どんな敵が彼の前に現はれたか、一切を冷やかに認めて進んで行かなければならない。その男は、柵によつて、場内の形勢、敵軍の状態、株の出來高、崩落の程度——それこそ敵に再擧の餘地を與へないまでにやらなければならぬ、一番大切なことである——を冷靜に觀察してゐた。夫があの若い血に燃え、戦ひに陶醉してゐる、一個傀儡の操り人だ。それが山八商店の主人磯部庄五郎なのである。もう六十に近い彼は、さすがに若い場立のように、勝利の歡喜には酔はなかつたが、平素から蒼味を帯びた彼の顔にも、隠し切れない昂奮の赤味が射し、固く結んだ唇のあたりには、深く決した信念と、今や近づきつゝある決定的な運命に對する喜びが、冷かな笑ひになつて現はれてゐた。濃い眉毛の下からは、爛々と光る眼が、場立の手振の上に隙間なく注がれてゐる。敵軍の力が優

つて、相場が盛り返されさうになると、彼の手から傳票が發せられる。場立はそれに勢ひを得て突撃する。當限、中限、先限、勢頭の取引所株は物凄く惨落した。

どんな突發的な大事件が起つたのか、漸く克復した平和がまた破れたのか。大銀行が破綻したのか、世界の金の大部分が、一時に姿でも消したのか。戦後の好況は、將にこれから來ようとしてゐる時に、株式の前途は春の海のように洋々として多幸であるべきこの時に、嗚呼どんな大事變が起つたのか。參觀席はどよみ渡つた。圓やかな幸多き夢は破れた。朝日の輝くのどかな野邊は俄に暗澹とした雲に蔽はれて、底知れぬ深淵が、大きな口をばくりと明けた。没落、破産、挫折絶望、凡ゆる不吉なものが、その深淵から、兇惡な姿を現はし始めた。

然し、場臺に立つた市場監督も仲買も、參觀席に居並ぶ客人も、まだ絶望はしなかつた。今崩落したのは、取引所株である。それは單に、投機の對象物としてばかり値打のあるものである。次に來る郵船は、財産は豊富であり、營業は確實だ。況して、船舶不足のこの戦後に海運界を支配する、海上の王者である。山八が如何に暴力を振はうとも、合理の上に築かれた、この株券の價格を落すことは不可能だ。それは全く、天に唾する者にも等しい。取引所株は惨落しても、こ

の次の郵船こそ——と、市場にある人々は、たゞそれだけを期待した。

『ゆうせいん。當限だ』市場監督は場臺の上から叫びながら、場内を一瞥した。彼の眼にも今度こそ、無謀な亂手を振らせるものか——と云ふ決意が閃いた。參觀席はまたどよめいた。誰もが期待するのはこの一戦である。何人が如何に市場を攪亂しようとしても、洋々たる多幸な經濟界、豊富な資産、未曾有の潤利、それが彼等の頼む堅壘の内容だつた。そして、それに逆らう者は、自ら滅亡の深淵に身を投ずる者である。それが彼等の僅かに抱いた信念だつた。

撃析は殺氣を帯びて響き渡つた、郵船は立會を開始された。山八は又も猛然と突撃した。無限の資金と確固とした材料、ひるみなき信念、それがなければかうまでも、勇敢に突進する事は出来ない筈だ。昨日までのあのひくひくした山八が、どうして俄に斯うまで勇敢になれたのか、そこには何か、さうだ、必ず何かの原因がなければならぬ。

『何事か起つたのだ』市場の人氣はもう完全に恐怖心に支配された。恐怖は恐怖を呼んで倍加する。今はもう山八の手に向ふものもなく相場は思ふが儘に惨落した。買方は旗を卷いて潰走する崩れる。追撃する。市場の中は名狀し難き混亂に陥つた。小僧は電話の鈴を碎けよと呼び鳴らす

店員は足を空にして馳せ廻る。場臺に立つた市場監督は、

『駄目だ、駄目だ、亂手を振つてはいかん』

と首を振つて制止する。然し、山上の大石は轉落の歩を踏み出した。凄じく落ちて行く。監督が制止しても、買方が防戦しても、それは頽勢を防ぐには、何の効果も示さなかつた。唯一の頼みであつた郵船も既に敗れた。ベルが鳴る。人が走る。蒼ざめた顔、血走つた眼！ 混亂の極に達した。

『ちりゝゝん』と場臺の上でベルが鳴つた。揉み合ひ、押し返し、突き飛ばし、賣る、投げる。もう誰れが幾らで何枚賣るのか、誰れがどうしてどこから買ふのか、恐らく誰にも判らなくなつてしまつた時に、

『立會停止、立會停止だ』監督は大きく手を振つて宣言した。騷擾は漸く鎮まつた。昂奮し切つた場立や店主は、呆然として蒼ざめた顔を見合せた。彼等はもう、何をして好いのだか、これから何をしなければならぬか、全く度を失つて、たゞ呆然と顔を見合せて、突つ立つてゐたのである。

參觀席の混亂は、更に一層烈しかつた。――彼等が胸に描いてゐた、富貴も榮華も、歡樂も希望もこの一瞬に泡くのように消え失せてしまつたのだ。別荘も美人も待合も劇場も、土地も家屋も、世界滅亡の日のように、雜倒されて姿を消した。眞暗な深淵が、足下に口を開いた。望みを失つた人々の顔は物凄いまで蒼ざめて、こみ上げる苦痛を堪へるために唇をじつと噛んだ。血走つた眼を光らせて、嵐のあのような、立會場を眺めてゐる。恐らく彼等はそこにはかない幻想をでも描いて自分を慰めてゐたのであらう。さうしてまた、もしも周圍に人がゐなかつたら、へとくと地に倒れて、聲を放つて嘆いたかも知れなかつた。物凄沈黙が一樣に彼等の上を支配してゐる、平素は勇敢に意見を述べる男まで、涙をためて首垂れてゐた。

『一體何が原因でせう』ある男が力なく訊ねた。

『さあ、どうも判りません』力なくそこに立ち盡すもの、すごくと場外に立ち去るもの、それはまるで、地獄の亡者のような姿だつた。

然し、彼等の喪神や昂奮も、大して長くは續かなかつた。明かな理智を恢復する事が出来ないまでも、暗い絶望の底に沈んだ身體をどこかに横たへて休まなければならぬ。參觀席に幾千と

群がつてゐた人々も、力ない足取りで、ぼつ／＼とそとに流れ出した。仲買は、第一にこの暴落に對する應急の處理を講じなければならぬ。客筋に對する報告、追證據金の追徴、彼等は眼の廻るように多忙である。

『それにしても、何が原因で暴落したのか、微々たる山八商店の賣物で、かうまでも崩れるにはそこに何かの原因がなければならぬ。幾萬の人々を、失敗と混惑の底に陥れ、金融機關の中樞である取引所を閉鎖せしめたその原因はどこにあるのか』人々はそれに迷つた。測り知れない疑惑の中に藏しながら、彼等はいま／＼しげに構内から溢れ出した。

四月の空は依然として美しく晴れてゐる、仲買店の磨き込んだ眞鍮の窓の棒にも、銅の腰板にも石を敷きつめた町の上にも、ほつかりとした長閑な日射しが、柔かに輝いてゐるのである、が然し、この町を走る人々は——蒼白な顔、血走つた眼、狩り立てられた獸のように、慌たゞしく馳せ違ふ。蒼空も、太陽も、大地のぬくみも一切が失はれた。自轉車が走る、俥が飛ぶ、自動車はうめく、その間を喪神した人々が、ぐつたりと首垂れて、踰躑として力なく歩いて行く。明々となごやかに輝く太陽の光の下で、それは餘りにみじめにも滑稽な姿であるが。——

かうして混亂と騷擾の限りを盡した取引所の構内も、怒濤の引いたあとのやうに、人氣のなからんとした、靜かな空虚があとに残つた。が然し、そこにはまだ、眼に見えない死屍が累々と算を亂して横たはつてゐるやうな凄慘な鬼氣が残つてゐる、破れたものはこゝではまだ肉體的の死は示さなかつた。けれども、没落と絶望のあとに續いて來るものは、精神的の自滅か自殺の道が残るだけだ。文明の名の下に行はれる、經濟上の平和らしい闘争でも、破れたものは矢張り亡びる。そしてそれは武器を執つて闘ふ戦争より、更に悲痛でみじめな姿を示すものだ。

山八の主人磯部庄五郎は、人氣のなくなつた場の中を横切つて、悠々と自分の店に歸つて行つた。あの混亂の極度に達した時、宣言された立會停止、それに續いて起つた絶望的な騷擾、嵐のあつたやうな無氣味な喪神、さうした事が巻き起つてゐる暇に彼はどこかに姿を消した。惻巧な彼は場内の形勢の險惡なのを見て取ると、重役室に姿を消して、そこで冷靜な態度をもつて、預納金や何かの事に就て語つてゐた。そして、これ程の變動で、立會停止になつた事は客筋に對して、自分が申譯がない始末だ、と反對に苦情まで持ち出して時を過ごした。

そしてもう人氣のなくなつた、場の中に再び姿を現したのだ。彼は建札のかゝつてゐる、欄干

の上を仰いだ。東條、郵船それだけが、僅に建値が書かれてゐるだけで、残部はすべて空虛である。それは明かに、敵軍の空しい潰走を物語つてゐるのである、押へ切れない勝利の喜びが、固く結んだ唇のあたりにちらりと上つた。硝子張りの天井には、明るい光が輝いて、どこかで羽虫の飛ぶ音がかすかに聞える。彼はまた、凱旋將軍のような態度をもつて、場内をぐるりと見廻した。

二

山八の店の中も、どここの店とも同じように喧騒を極めてゐた。客筋に報告する、電話のベルは絶間なくけたましく鳴り渡る。外交員は慌しく出入する。證據金の追徴、取引所への納入期限、何をどうして好いのであるか、彼等も全く度を失つてしまつてゐた。丁度そこへ、主人の磯部が着味を帯びた、冷かな顔をして、悠然と歸つて來た。店の隅で、額をあつめて、何か凝議してゐた外交員の連中は磯部の姿を見ると、思はず一齊に立ち上つて『お歸りなさい』と禮をした

が、その中から山田と云ふ男が進み出て、

『如何でございましたか場の方は、どうもひどい相場になりましたな』と探りを入れるように、頭をぐつとき上げながら云ひ出した。

『は、全く皆な好い氣になつて、逆上せ上つて買つたからな』磯部はどこまでも冷かに煙草の煙をぶつと吐いた。

『へ、いやそれは全く大將の御意見の通りでございます。それで、先刻からもみんなと相談をしてをりましたのですが、買持の客筋には、どの位追證を請求しましたらよろしいか、どうもまるで見當がつきませんので』山田はするさうな眼をぱちりとさせて、また一つ頭を下げた。

『は、それだからいかんだよ、大體こんな工合にして、立會停止になつた以上、追證據金位を入れて、解決のつく見込はなくなつたと見なければならぬぢやないか。そこで君達にもよく話しておくが』と磯部はそこに居並ぶ外交員連をずらりと見廻してから、『買持の客筋には、株券を引取つて貰ふ事を腹にしておいて交渉するのが第一、然し、さう云つて自暴的な態度に出るような、人達には、それ相當に臨機の處置も取らなければならないが、そこは君方の眼と腕を働

かせるところだから、その考へで努力を開始してお貰ひしたい。何しろ今まで、猫も杓子も株さへ買へば、金が儲かる氣になつて浮かれ切つた反動が來たのだから、謂はゞ一種の猛烈な恐慌状態だ。あは、この調子では銀行も警戒して、株券に金を貸すものなんかなくなるだらう、浮かれ上つた世間の馬鹿が少しづつ儲けた金を一時に吐き出す時が來たのだ。磯部は如何にも愉快で堪らないらしく悪魔的な顔をして、皮肉に笑つた。

『それで、わしはまた緊急な用件が山のように湧き出したから、これからすぐにわきに出かける君方は客筋を歩いたら、その結果をすぐに忤に報告をして貰ひたい』
とつけ足してから、帳場の方を振り向いて、『茂、茂』と聲をかけた。

薄暗い金庫の前に腰を下してゐた、彼の息子は、

『何ですか』と云ひながら、不承不精に立ち上つて、皆の前に歩いて來た。年はまだ二十三四位である。眉毛の濃いあたりは、どこか父親に似てゐる所もあるけれど、うるんだ眼や、細く高い鼻のあたりには、父の持つてゐる冷酷な色の代りに、優しい神経が現はれてゐた。

茂はこの烈しい株式の變動も、取引所の混亂も、店員の多忙なものも、まるで興味を惹かない、

どこか他界の出來事でももあるように父とは反對の冷たい無關心な態度でそこに立つた。

『お前によく頼んでおくが、今日のこの暴落でわしは馬鹿に用事が殖えた。これからすぐに出かけなければならぬから、この人達の報告をよく聞いて、わしの方に通知をして貰ひたい。平素の事と違ふからな、熱心にやつてくれないと、とんでもない事になるかも知れんで、本當によく頼んだぞ』と磯部は語尾を強めて言ひ渡した。

『さうですか、それでは僕はそれを一々聞き取つて、あなたに報告さへすれば好いんですね』
依然として何の興味もない態度で茂は父に答へた。

『ふ、それだからわしは困る。今日はどんな事が起つたのか、この暴落がうちの店にどんな影響をもたらすか、お前にはちつとも判らんのか、わしが報告を聞くと云つたら、お前は進んでこの人達に全力を盡して働いて貰ふようにせなけりやならぬのに、その不熱心な顔はなんだ。わしの今日までの苦心』と磯部は思はず云ひかけたが、前に立つてゐる山田の顔を見ると彼はごくりと唾をのんで『まあ好いわ、ともかく報告をよく聞いて間違ひのないように一々わしに知らしてくれ、あとの事はわしが一々その時に直接に云ふ』彼はまた外交員の方に振り返つて、

『それでは、君方はすぐに出かけて貰ひたい。何しろこの變動で、客筋もとやこや言ふに違ひないが、取引はあくまで確實にして貰はなければ困るから』と云ひ捨て、奥へ入らうとした時に、

『お父さん』と茂が呼びとめた。

『あの先刻から方々の新聞社の人が賣物の出所と、あなたの意見を聞きたいつて尋ねてくるんですけれど』と云ひかけると、

『馬鹿つ』と磯部は一喝した。『お前は何年この帳場に來て坐いてゐるのだ。賣物、ふゝ、どこの國に、營業の秘密をべら／＼喋舌り立てる奴がある？ またこの忙しい最中に、呑氣な意見なんか述べ立てゝゐる閑があるか。俺の店が、損失のしつどけで、虫の息のような状態に陥つてゐた時分には、鼻も引つかけなかつた人間に、そんな事を話す間拔があるものか。こんど來たら、父は非常に多忙でもお會ひする暇がないと云つて斷つとけ』と聲を慄ばせて茂を睨んだ。あゝ然し、彼が今日になつて俄に輕蔑の語氣を洩らすそれ等の人人に、昨日まではどんな態度で接してゐたか、茂もそこに居並ぶ店員も、悉くそれを知つてゐた。

『さうですか、僕は馬鹿です』茂はぶつきら棒に答へると、ぐるりと踵をめぐらして薄暗い金庫の前へ引つ込んで行つてしまつた。

『ふゝ、馬鹿な奴だ。幾歳になつても餓鬼みたいな』磯部は後姿を見送つて苦笑したが、『まあ好い』とまた外交員の方に振り向いて、

『では君等には、くれぐ／＼もよく頼んでおく、何しろかう云ふ際だから全力を盡してな』と云ひ捨て、奥の方に入つて行つた。やがて彼は、何か小さな包みをかゝへて、自動車も呼ばずに、そゝくさと店を出て行つてしまつた。

磯部の姿が見えなくなると、外交員達はきよとんとした顔を見合せて、げつそりと腰を下した。

『はゝ、一體どうすりや好いつて云ふんだ』

先に口を切つた山田がまた云ひ出した。

『ふゝ、仕方がねえさ、だれだつて、買った株を平氣で引取るだけの金を持つて、相場をするつて約束したんぢやありやしねえ。それが爲に、倍も三倍もの證據金をちやんと取つてゐるぢやね

えか、俺のお客なんか、そんな氣の利いた間拔は一人もゐねえや』と云つてから〜と快活に笑ひ出した男があつた。

それは彼等の仲間で、悪黨の保阪と云ふ綽名を取つた男である。ふた言目には、『信州路へつつかけて、それから越後路へのつつけて、など、講談口調で悪がつた事を云ふのが好きである、小柄な身體つきではあるけれど、どつか利かない氣の溢れた、如何にも兜町もらしい様子の中に、變な圖太さをも示す男だ。保阪がさう云ひかけたとき、

『そりや何さ、お前なんかはそれで好いかも知れないさ、間誤つきやまた、信州路へでも甲州路へでもつつかけりや好いんだからな、お太陽様と米の飯と、酒と女が喰付いて歩いてゐる男だもの、その代り時々臭い飯が喰付いても、平氣でゐられる人間だから』年の若い鳥居と云ふ客引が茶々を入れた。

『え、手前まで呑氣らしい事を云ふな。これで證據金でも入らなくつて、相場も建たなければ、お客もなくなつた日にや、俺達は飯の喰ひ上げだ。全く弱つた事になつた』言葉つきはぞんざいだが、見たところは一廉の紳士のような洋服に金鎖まで巻きつけた、中年輩の齋藤は、金口の

煙をやけにぶか〜吹かしながら、思ひ餘つたような溜息を、煙とともにふつと吹いた。

『は、上るのも相場なら、下るのも相場ぢやねえか、そんな事で一々くよくよする位なら、こんなところへ來ねえが好いんだ。は、くよくよしやんす——な—だ』と鼻歌まじりで話しながら、呑氣らしく保阪は立ち上ると、『さ、皆な出掛けよう、かうやつて店に塊まつて考へ込んでゐたつて、誰れも金を持つて來る人なんかありやしない。くしや〜するだけつまらねえ。好いか悪いが、歩いて見てぶつかるだけだ。さ出掛けよう』とこ〜笑ひながら、まだ考へ込んでゐる一同を見廻して、彼は最初に外套を着て、

『では、茂さん、行つて來ます』

と威勢よく聲をかけて、さつさと店を出てしまつた。残つてゐた外交員の連中も、それからしばらく何かくど〜と相談をしてゐたが、やがて揃つてぞろ〜と店を出た。

狭い町を往來する車や人の姿は少し減つたが、それでもまだ帳面をかへた小僧が走る、蒼ざめた顔をした人々が、方々の店に出入する。喪の家のような沈んだざわめきが、この町一帯を占領してしまつてゐた。

丁度その時分に、磯部は濱町の奥の方の、桐の家と云ふ待合の静かな一室に座り込んで、ほつと安堵の吐息をついてゐた。可笑な事には、一足店のそとに出るともう彼の身体からは、さつき場の中で傲然と肩を聳やかした、凱旋將軍のような態度は消えて、追ひ込まれた人のように、こそく〜と電車に乗つた事だつた。彼は自分の姿が、人目につくのを恐れてゐた。行先の知れるのも恐れたので、乗りつけの自動車にも乗らなかつた。暖かいこの春の日に帽子を至つて目深に被つて、外套の襟まで立て、四邊に心をくばりながら、ひそかにこの家迄逃げ込んで来た。そしてこの部屋に通された時、彼は初めて、漸く自分に返つたように、ほつと一つ深い溜息をついたのである。

長い間、頭の中で固まつてゐた、堅い何かと一時に溶けて流れ出したような、だるさと疲労を彼はしみじみと感じてゐた。今日の一戦、敵軍を猛烈に粉碎したこの一戦、それだけを彼は望んでゐた。さうして遂にその時が来た。彼の望みは達せられた。さうして今は――。

磯部は何を思つて好いのかも判らないほど、全く疲れ切つてしまつてゐた。長い間の疲れである。それが一時に出て来たように、彼はぐつたりと力なく、床柱に背をもたせて、眼を瞑つた。

空虚になつた頭の中に、時々堪へ難い歡喜の光が電光のようにちらりとひらめく。思ふ存分、聲を張り上げて、笑ひ盡したいような發作である。彼はそれをじつと堪へた。

『とう〜時がやつて来たのだ』

今朝の立會の初めから、幾度か心に叫んだその言葉が断片的にまた浮んだ。

『随分長い苦勞だつた』彼はそんな事も考へた、別荘も本宅も人手に渡りかけてしまつてゐた。最後に店の権利まで人知れず擔保に入れた。断崖の絶端まで追ひつめられてしまつてゐたのだ。一步をはづせば、裸一貫の哀れな昔の状態に轉落する。昔は可なり時めいた人々が、尾羽打枯したさうした姿は、彼の眼にもいくらも映つた。断崖の絶端で、足をふるはせておびえてゐた昨日までの暗黒な状態が、再びまざ〜と描かれた。

『然し、もう大丈夫だ。俺は立直つた。見事に敵をやつつけた』暗い想ひを打消すように、心で強く叫んだとき、彼は再び、聲をあげて想ふ存分快活に一人で笑ひたいような發作におそはれた。

丁度その時、襖をそつと開ける音がしたので、彼は思はずはつとして、ぐたりとした身體を直

した。

『ほ、御免遊ばせ、折角お静かになすつていらつしやる所を』と年増の女中は、愛嬌を眼に湛へて、笑ひながら入つて来た。そして磯部のそばに坐ると、

『いまね、栗田さんからお電話でしたの、それでね、あなたがおゐでなら、すぐ行くからお話してくれと云ふことですから、そのまゝお受けしておきましたが、よろしいでしょ』

と彼に訊ねた。

『あゝ好いとも』と磯部は鷹揚にうなづいて、

『いや、今はと云ふ今日は、全くわしもひどく疲れてしまつたので』と今までの自分の想ひをはにかむように、顔をつるりとなで廻した。

『ほ、いつもお強いあなたがねえ、きつとよく〜お疲れなすつたのでしょ』と女中はまた笑つたが『ただどあなた今日は株式は随分大變だつたんださうでござんすね。あの立會が停止になつたつて云ふぢやありませんか、そんな事になつて、これからさきどうなるんでせう』と懸念らしく訊ね直した。

『さあどうなるか、わしにもまるで見當がつかないで』磯部は冷然として他人ごとのようにそれに答へた。

『まあ、そんなことを、それでもあなたのお店には、格別おさわりもございませんでして』

『さわりどころか、わしの店だつて、これからどうなるか、まるで見當がつかん始末さ』

と云つて、磯部はさつきからこらへてゐた嬉しさを、大きな笑ひに爆發させた。

『ごせうだんを』と女中は睨む真似をしたが、

『決して何かおねだり申すような真似は致しませんから、どうぞ御安心を』と云つて、袂を口に

あてゝまた笑つた。

『いやお禮の催促は痛み入る』と彼もまた愉快に笑つた。そのとき襖が静かに開いて、

『栗田さんが、お見えになりました』と若い女中が彼等に告げた。

『いやあお若、晝間つから磯部さんを口説くなどは怪しからんぞ』と錆た太い聲で怒鳴りながら入つて来たのは栗田だつた。背の高い赫ら顔の肥満した彼の身體と、底力のある錆た聲が、浮沈の多いあの場所で、鍊え上げた人間である事を物語つてゐるようである。

『やあこれは、さあどうぞ』と磯部も笑ひながら、すぐに彼を上座に招じた。

『ほんとにいつも御元氣で結構ですこと』とお若もまた笑つたが『おや、御挨拶も忘れてゐて』と改めて『いらつしやいまし』と禮をしてから『何かお誂へものでも』と磯部を顧みた。

『いや、まだ何にも要らないから、一寸あちらへ行つてくれ、用があつたらベルを鳴らす』

『それではどうか、御ゆつくりお話を』お若はすぐにそこを立つた。一人きりになつてしまふと

『いや、今日はどうも、大變お骨折で』と栗田が先づ口を切つた。

『どうしまして、お禮は私から申上げなければならぬ始末で、然し、見事に崩れましたな、私も、これほどに行くとは思つてゐませんでした』と磯部は如何にも、感謝と満足の意を表すようにそれに答へた。

『は、何しろ相場が熟し切つてゐた所ですから、それに、どことなく例の事が、ちつとは何つてゐたような點もあるのです』

『なるほど、それで、あれは愈事實となりませうかな』と磯部は探るような眼付をした。

『かうなれば無論なるに違ひござせんわ、何しろ、安達の手筋の賣物は、私の店を通したばかり

でも、今までに十萬の上を越してをりますでな、擔保品も、手持の株も、全部賣つないだと云ふ噂でござす。して見ると、例の噂の通り、あの銀行が擔保品に手を締めたと思なければならぬでござしよ。關西には大した勢力もないかも知れんが、關東、東北に地盤を張つとるあの銀行に手を締められたら、何も彼もばつたりと止まつてしまふ。まるで足をくゝられて、駈け足をしろと云ふようなもんぢやござせんか。私の考へでは、今日よりもまだまだ、これからがひどい事になるだらうと思はれるのでござすがな』栗田はいやに改まつて、太い聲を低くして、彼の意見を述べ立てた。

『なる、なるほどな、して見ると安達さんの今度の儲けは、大したもんでございませうな』

『左様さ、まあ勘くも千萬は下りますまい。いや、兜町で誰が成金だとか、誰が當つたとか云つて見ても、大きなものにはかなひませんわ、夫も僅か、一と月か二月の中に一時にどさつとさつて行くのでござすからな』と栗田は我事のような誇らしげな顔をした。

『いや全く、全くその通りで、しかし、私の店なども、お蔭で漸く息を吹き返すことが出来ました。何しろこの三四年曲りつゞけで、もう全く蟲の息でをりましたので場の者からも、取引所か

らも、すつかりなめられてゐた所を、ちやんと豫納金を納めて、あの賣物を出したので、いや皆
なあの狼狽した有様は全く、それだけでも、私はすつかり喜んでゐる所で、先刻もこゝへ来て、
まるで夢でも見るように、茫然と考へ込んでをりました所へお電話で『磯部は感激に堪へぬ態度
で云つた。』

『いや、それを伺ふと私も本當に満足でな。何しろ可なり長く苦しんでおゐるのでやうなのは知つ
てゐながら、私一つの手ではどうも出来ないので、色々考へてをつたところ、丁度かう云ふ事が起
つたので、早速お願ひしてまづまあお互に』と栗田も殷勤に頭を下げた。損つゞきの磯部の店が
場の者からも取引所からも輕蔑と警戒的にされてゐるのをよく知り切つて、その弱點を栗田が
利用した事は磯部にもよく判つてゐた。有力な栗田の店から賣物を發すれば、その背後が窺はれ
る。弱小な磯部の店はそれに代るには、何よりも適當だつた。それ等の事情もお互にはよく判つ
てゐる。然し若し、栗田が利用してくれなかつたら、それを考へると心の上の好意よりも、事實
の方の利得が磯部には、遙かに感謝に値した。』

『本當に厚くお禮を申し上げます。これで私の店もまあ、昔の一本立に返れた次第で、今日もあ

の重役連中に、色々意見を述べてやりましたが、ひどく恐縮したような顔をしてをりました』
磯部は話の度毎に感謝の情を表す事を忘れなかつた。

『はゝあそれです。人間が偉いも偉くないもあつたものぢやござせん。當つた者が偉くつて巾を
利かせて、曲つたものはどんな好い理窟を持つとつても、挺でも通る場所ではござせんからな、
何よりも當るだけが大切な事で』と云ひかけたが、『然し何ですな、私がかう申しては何だか變だ
が、あなたの身體は、この際餘程注意をなさらんと、馬鹿もをる世の中ですからな』と、初めて
氣づいたように栗田は親切らしく注意した。

『いやごもつともで、私もそれを考へましたもので、あゝして立會に夢中になつてをる中は格別
立會停止となつてからは、山八が停止をさせた、あれが張本だ、なぞと、馬鹿者の恨みを受けて
はつまらん事と考へましたので重役室に少時入り込んでをつたような次第でしたが、都合によつ
ては、これから少時旅行した事にでもしておかうかと考へてもをつたところございしましたが、
あなたの方の御都合は如何なもので』磯部はどこまでも、栗田の意見を尊重する態度を示した。
『それはどうか御隨意に、それにこの模様では、當分場の開く見込もござせん。これがまた明日

になつて、愈銀行が金を貸さんと云ふのが知れ渡つたら、一層騒ぎは擴まるに相違ごわせん。それで、あんたはどこか、旅行にお出かけの心あたりでもおありですか」

『いえ、その邊まではまだ定つてをりませんが、何れ明日にも決定しましたら、早速お知らせを致します。それで、今日までの賣建の玉高は、心覚えだけこゝに記載してありますので、一應お手元まで差上げておきたいと存じまして』磯部は抱えて来た包みの中から、小さな紙片をとぎたものを栗田に渡した。そして『如何です、折角お出でを願つたのですから、ひと口お濡らしになつて見たら』と彼は後にあつた釦を押した。

『いや今日は』と栗田は慌しく押し止めて『何しろ之れから、店の方の用事もありますし、委員會の模様を、安達さんまで報告しなければなりませんから、今日はこれで』と起ち上つて『場の方の目鼻がついたら、その節は一夕、あなたと二人で呑氣に骨休みでもやりますかな』と磯部を顧みてにやりと笑つた。

『あらもう旦那お歸りですの』襖のそとで出會つたお若は、歸り支度をしてゐる栗田の姿を見てさも驚いたらしい聲を上げた。

『ふゝん』と栗田は錆た聲で笑つてから、『口八釜しい人間が歸ると思つて、嬉しさうな顔をしてゐるな』と笑ひながら云ひ捨て、さつさと廊下を歩いて行つた。磯部はそのあとに従つて、玄關口まで出て行つた。そしてそこでまた改めて、

『どうもわざわざ御足勞をかけまして、誠に相済みませんでした。何れ近日』と叮嚀に頭を下げた。

『いや』と栗田は鷹揚に禮を返して出て行つた。その姿が玄關口から消えてしまふと、磯部はまたほつと大きな息をついた。栗田だけには、報告をしなければならぬ事務もこれで終つた。あとに残る仕事はまだ山ほどあつても、それは今日明日に解決のつく問題ではないのである、それ等の事を考へるより、彼は今日の喜びを、思ふ存分、喜びたい氣持に心を満たされてゐた。永い間、池の面には厚い氷がとざしてゐた。それがいま一朝にして、暖かい光りに照されて、溶けて溢れ出て来たのである。どうしたらば、この喜びを満足させることが出来るのか、彼はそれに戸惑つてゐた。

鏡のように光るほど拭き込んだ、廣い廊下を歩きながら、磯部はお若を顧みて、思はず『はゝ』

と快活に笑つた。そして、『わしは今日(けふ)はひどく疲れた。これからゆつくり休みたいが、もう風呂は沸いてるか』と訊ねて見た。然し、その聲には彼が自分で云ふように、疲れた響きが伴はなかつた。事實(じじつ)彼はもう、先刻(さうご)のような疲れも忘れてゐた。長い間、人の物か、自分の物か、けぢめさへつかなくなつてゐた、あの別荘(べつしやう)も本宅(ほんたく)も、凡て(みな)が自分の手に戻つて來た。嘲笑(てうせう)と輕侮(けいご)の的になつてゐた、店の名譽(めいよ)も今は完全に恢復(くわいふく)されたのだ。今度(こんど)再び場に立つときは——それを思ふと彼の心は躍り上つた。

『ふい、栗田(くりた)が何だ』と彼は自分の心に叫んで見た。今日の立會(たちあひ)では、自分が身命(しんめい)を賭して戦つたのだ。米屋町(こめやまち)では亂手(らんて)を振つて、腹(はら)を刺された男もあれば、七首(ななびし)で追ひ廻された男もあるのだ。今度(こんど)の戦(たたか)ひは、最後の決戦(けつせん)は俺(おれ)がつけた。栗田(くりた)はたゞ自分の店の弱(よわ)り目(め)を利用(りよう)したゞけの事(こと)である。今度(こんど)場に立つ時は、俺(おれ)こそ、唯一(ゆい)の勝利者(しょうりしや)になつて見せる。それにしてもあの安達(あんだ)の翁(おきな)は、一擧(いっく)にして千萬圓(せんまんえん)か。——それを考(かんが)へると彼は堪(た)まらない焦燥(せうそう)と羨望(せんぼう)の想(おも)ひに心を衝(つ)かれた。がすぐとまた、

『なあに、俺(おれ)もやる、俺(おれ)も必ずやつて見せる。俺(おれ)が手腕(しゅけん)を振(ふる)ふのは、これからの世(よ)の中(なか)だ』

と彼はまた強(ひ)て自分を勵(げ)ました。昨日(きのう)までは没落(ぼつらく)の深淵(しんえん)の上に立つて、斷崖(だんがい)の絶端(ぜつたん)で身體(しんたい)をわなゝかせてゐた彼(かれ)であつたが、今は限りなき欲求(よくきう)と、押え難(がた)い羨望(せんぼう)とに彼の心(こころ)は再び囚(とら)はれてしまつてゐた。

『あなた、誰(だれ)かお呼びしますか』お膳(ぜん)の上に銚子(ぢょうし)をのせてお若(わか)の來(き)たのも心づかずに、燃(も)えるやうな物思(ものおも)ひに耽(か)つてゐた磯部(いそべ)の膝(ひざ)を一寸(いちゆづ)ついて、お若(わか)はにこりと笑(わら)ひながら訊(たず)ねた。

磯部(いそべ)ははつと我(われ)に返(かへ)つた。

『あゝ疲(つか)れた。一寸(いちゆづ)落付(おちつ)くと、すぐにとゞとしてしまふ、え、何を、あゝさうか、それなら常次(つねじ)を一人(ひとり)だけ呼(よ)んで貰(もら)はうか、それなら、今日(けふ)はこゝにわしがゐると云(い)ふ事は、絶對(ぜつたい)に秘密(ひみつ)にしておいてもらはないと困(こま)るから、そのつもりで頼(たの)む』彼は漸(だんだん)く、前(まへ)にあつた盃(さかづ)に手を觸(ふ)れた。慌(あわ)たゞしく送(おく)つた一日(いちにち)、考(かんが)へればまだ晝飯(ひるめし)も咽喉(のど)に通(とほ)してはゐなかつた。思(おも)ひ出したやうに空腹(くうぷく)が、俄(は)に烈(はげ)しく感(かん)じられた。

『若い時分(ときぶん)であつたらば』磯部(いそべ)はまだ若い頃(ころ)初めて株(かぶ)で儲(もう)けた日の事(こと)を思(おも)ひ出した——その時は柳橋(やなぎはし)の深川亭(ふかがわてい)で、藝妓(げいぎ)や半玉(はんぎよく)を二三十人(にさんじゅうにん)も呼(よ)び集(あつ)めて、勝利(しょうり)の喜(よろこ)びに酔(よ)つてゐた。

『然し今は、もうそんな馬鹿げた事をして喜びに耽る氣も起らない。俺も矢つ張り年を老つた』
淡い哀愁が、ちらりと起つた。それに續いて、茂の事が、彼の心に浮んで來た。

『俺がこれほど、苦闘に苦闘を重ねてゐるのに、彼奴のあの變な冷淡な、あの態度は』それを思ふと、彼は忘れてゐた、大きな物足りなさを心に感じた。磯部は立ち上つて、電話室に出かけて行つて自分の店に電話をかけた。茂はすぐに電話口に現はれた。そして、外交員は、保阪のほかは、まだ誰れも歸つて來ない事を報告した。保阪は、何れ大將にお目にかゝつてよく話す、と云つただけで、まだ店にゐる、と云つた。

『保阪だけ、さうか、保阪なら、いま逢つたつて仕方がない、どうせ彼奴の事だから、勝手な事を云ふだけだ。わしは今夜は歸らんからな、用があつたら、こゝへ電話をかけてくれ、但し、誰れにもわしのをる所を知らしてはいけないよ』と彼は不機嫌らしく電話を切つた。客筋の買注文それは皆な自分が賣向つて、その證據金を利用して、場では逆に賣つてゐる。客筋から蒙る損失は寸毫もないようにはなつてゐるが、然し取るべきものはどれだけでも、取らなければならぬのだ。保阪はそれを知つてゐて、また何か一理窟こね廻すのではないかと思ふと、彼は何となく

不愉快な感じがして、

『あいつは苦手だ』と思はず心につぶやいた。

磯部がもとの座敷に歸つて來た時には、もう、常次が、そこに坐つてゐた。茶がよつた小紋の着物を着た襟足がいつ見てもくつきりと浮くように美しい。切れの長い眼に笑を含んで、

『あら、今日は』一疊に一寸手をついて、

『今日は大變にお早いね』と愛想よく彼を迎へた。本當の年は三十二だと云ふけれど、まだ二十八九にしか見えないその豊潤な肉體が、見る度毎に、妻のない彼の心をえぐるように引きつける。

『お前も大層早かつたな』と云つた聲は、さつき外交員に命令したり、栗田と交渉を重ねたり、茂に電話をかけたしたりした、磯部の聲とはまるで變つたものであつた。いつも冷酷に引締つた彼の顔にも、ゆるんだやはらぎが漂つて、

『どうだ、相變らず忙しいか』と判り切つた事を訊ねて見た。

『ほゝお蔭さまで』と常次は一寸頭を下げたが、

『だけど何ですつてね、今日は場の方は大變でしたつてね、どんなでしたの、また不景氣になるんぢやないでせうか』と氣遣はしさうな顔をした。

『は、また場の話か、俺はもう澤山だ。相場が崩れようと、場が立つまいと、皆は時節だ。損をするものは損をするし、儲けるものは儲けるしいつも決つた事ぢやないか』磯部は心に溢れる喜びを強て隠して『それよりもどうだ、場が休んでゐる中に、二人で温泉にでも出掛けるか』と強てよそ事のように云つて見た。

『結構ですわ、いつでもお件をさせて頂いてよ。だけどあなたお店の方は』常次の眼にも探るよ
うな色があつた。

『店は店だ。件もゐるし、用事と云つても急にらちの明くような事はないから安心だ』

『本當ねえ、好い御息さんがいらつしやるから、あなたは本當に御安心だわ、それにしても、御息さんがお固くつて、お父さんがこの御始末では、あなた何んだか——』と云ひかけて、常次は『おほ』とハンケチを口に當てた。

『あは、お前も餘計な事を心配する女だな、わしにはあの件の變に固いところが面白くないの

だ。わしを眞似て遊びでもする様だとわしもちつとは安心が出来るのだが、商賣は不熱心で、金儲けは少しも氣がなくて、あるのはぼろ書生の友達と、道樂は役にも立たんばかり讀む事だ。

それがどうも一番いかん。今度お前に頼むから好い相手でも探してやつて少し道樂でも覺えるようにして見てくれないか、さうしたら追々慾も出るだらうし、ちつとは商賣に身を入れるようになるかも知れん』と云つて、磯部は淋しさうに『は』と笑つた。その調子が冗談にしては餘り沈んで眞劍なので、常次も一寸冷笑しかねたが、

『ほ、旦那まあ、大變なお父さまね、それはまるであべこべですわ。だけど、お望みならお宅の若旦那は本當にお優しさうですから、何ならわたしが手を取つて』と強て冗談にまぎらして、笑ひこけた。

『ふ、馬鹿な、馬鹿な奴だ、お前なんかは相談相手にならないから、また好い先生を見つける事にしよう。今日はわしもひどく疲れてゐる。さあ愉快に酒でも飲んでゆつくり休まう』と磯部は盃を突き出した。

春の日ももう暮れかけて、やがて夏には蛙が鳴くのが名物の、庭の池の向ふの電燈にも、うる

んだような灯がともつた。今日一日に十年振りもの仕事をしたような多忙な長い日が暮れて行くのを、磯部は心に感じながら、静かな庭をじつと眺めてゐた。

三

山八の店ではその時分、茂が金庫の前につまらなさに座つてゐた。彼は今日、自分の周囲に起つた嵐のやうな混乱にも、そのあとの戦ひのような騒ぎにも、まるで何の興味もなく、無關心な態度で過して来た。帳場の者が客筋への報告書を一々原簿と照し合せて、認めを押すのに忙殺されて暮したのが、彼にはむしろ不満足な退屈な事であつた。どれを見ても同じ事が書いてある。郵船何十株、金額代金××圓内證據金××圓入、差引××圓。鐘紡何十株、金額代金××圓、どれもこれも同じ事だ。それからまた、客筋への報告書の文面だ。それがまた單調を極めてゐる。——今朝立會前までは、氣配、昨後場と變化なく、強硬の状態を示し居り候處、定期立會に移るや、如何なる動機にや俄然一變して崩落し——と拙劣な文章で、如何にも客筋へ親切らしく、自

分の店がこの相場の激變には、何の關係もないやうな事が書いてあるのだ。

茂は商賣には不熱心であつたけれど、今日の相場の崩落の動機が自分の店の賣物にあつた事はよく知つてゐた。それにいつも彼の父親が、

『茂、今度こそ、きつと仕返しをして見せるぞ、長い間みんなして曲り屋、曲り屋と云つてけちをつけた。なあに俺の腕はまだそれほど鈍つてはゐないのだ。今度こそ一べんに、きつと取り返して見せてやる。お前ももつとしつかりしろ、何だ若いくせに若い顔をして萎び返つてゐて何になる』父の失敗を憂へてる茂を勵ますやうによく云つた。そして父親は、破竹の勢ひで昂つて行く相場に敢然として賣向つた。客の證據金も逆用した。それからまた、何處から持つて來るのであるか、豫納金を納めては諸株によく賣向つた。大膽な自信のあるらしい父親の行動の背後には何か有力な材料と策略のある事も察してゐた。

さうして今日の暴落が來たのである。然も客筋に對しては、白ばつてくれ、如何なる動機にやとか、俄然一變とか、まるで興り知らなかつた顔をして、證據金を追徴してゐる。——これが商機と云ふものかも知れない。が然し、彼の若い純な感情には、それは餘りに濁つた不潔なものと

してしか映らなかつた。

父親が損つゞきで、店が左前になつて来て、周囲のものが冷たい眼で彼等を眺めた時には、茂は父を憐んだ。どうかして、もつと順調にせめて自分の邸宅だけでも取り戻して、早くこのいやな島から身を退く事を父の爲めに望んでゐた。然し今は、形勢が逆轉した。今朝の立會一つでもつて、敗者の父は見事に周囲を粉砕して、市場の注目の的となつた。そして客筋に對しては、尙も親切らしい言葉をもつて、利得の追加をせまつてゐる。

『これが一國の金融機關の中樞とよばれるものゝ真相か』忙しい事務の合間々に、彼はそれを考へると、頭が暗くなつて來た。父が一舉に得た巨萬の富、それは譎詐と權變の所得であり、集まつたものは、血と涙のにじみ込んだ阿賭物の堆積だ。これからの自分の生涯は、それによつて養はれ、それによつて育てられる。何か汚れたものが待ち受けてゐるような、豫感に彼は惱まされた。

報告書は夕方までに出し終つた。がその合間には、仲間の店主や、新聞記者が、父親に面會を求めて來る。彼自身も知らない父の行先を、知らないと答へるのも、彼には一つの苦痛だつた。

夕方になつて保阪が一人歸つて來た。保阪はどこを歩いて來たのか、いつものように元氣だつた。彼は店に入つて來ると、茂の前にやつて來て、

『茂さん、大將は』と拇指を突き出して茂に訊ねた。

『まだ歸つて來ないよ』と茂が答へると、

『さうでせう、今日らあこゝいらを間誤々々してたら本當に危ねえからな、あつしだつて何でさ自分が買持で、首でもくらなきやならねえつてえなら、何をするか判りませんからね』と云つて、保阪は意味ありげにやりと笑つて、

『何しろ店は大當りだ、賣げつが三萬近くあるつて云ふぢやありませんか、あつしやちつとも知らなかつたね。場の奴も間拔ぢやねえか、もう大丈夫だ。大したもんだ。心配する事ありませんせよ。茂さんなんか、もうぢきなんだ、洋行でもするんだね、それともお嫁さんでも貰つて、新婚旅行でもやりますかね』と一人して、愉快らしく笑ひ立てた。子供の時から馴染である、保阪の無遠慮な話を聞いていると、茂の心も明るくなつて、思はずくすりと笑つたが、

『だけど君、お客の方の報告は』と尋ねたとき、

『えお客、ちやんと歩いて来たから大丈夫です。大將に逢つて話をしますつてね、聞かれたら云つて下さい』保阪は飽まで、平然とした顔をしてゐた。

茂のところ、電話がかゝつて来たのは、それから間もないことだつた。茂が父の居所を聞いて安心して、電話口から歸つて来ると、

『電話はなんでしょ、レコからでせう』保阪はすかさず、また拇指を出して見せた。茂はいやな顔をしてうなづいた。

『へゝさうだらうと思つた。大抵筋はわかつてゐるさあ、外交の報告はどうしたつて云ふんでしょ、だけど、待つてゐたつて駄目ですよ、ちやんと歸つて来るなあ、あつし位なもんでさ。ねえ誰だつてお前さん、籤から棒に、株券全體の金なんて、そんな事を云はれたつて、おいそれつて金を出す奴があるもんですか、どうせこの相場は二日や三日で建ちやしない。委員會でこね返して、取引所とごたつて銀行がぶつゝ云つて、大藏省へ持ち出して、とてもお前さん今日明日にどうなるつて云ふもんぢやありませんよ。何しろ店は大當りなんだから、お前さんが遊びをする tonight あたり、皆して繰出すんだが』保阪は景氣よく笑つたが、

『どうです、茂さん一緒に歸りませうや、ねえ、店の用はもうないんでしょ。君達やみんな、今度はどうんと賞與が貰へるから、まあ一生懸命に稼ぎ給へ』帳場の中で、事務を執つてゐる事務員を嬉しがらせて『こちとはお小言頂戴だ、つまらねえ、つまらねえ』と云つて立ち上つた。そして、

『それぢや明日の朝また来ます』と云ひおいて、保阪はまたさつさと店から歸つて行つてしまつた。

『いつでも景氣の好い男だ』と場立の吉田が羨ましさうにつぶやいた。

『何しろ恐い者知らずつて云ふんだからな』

帳場の服部が、それに應じた。店の者はみんな聲を合せて笑ひ出した。

それから二三時間待つてゐたが、保阪の云つた通り、ほかの外交員はとうゝ歸つて来なかつた。帳簿の整理も報告書の發送も略かたはついてゐた。残る所は、取引所との問題であるが、それは茂や店員のあづかり知つた事ではない。茂は急に姿を隠した父親の胸の中に、何か考へがひそんでゐるのだと推測した。

十時近くなつて彼は店を出た。いつもはそれほど遅くまで電燈のついてゐない、兩側のどの店にもまだ窓硝子が明るく輝いてゐた。慌しさうな足取をした人々が、ちらりと町を歩いて、それ等の店に入入してゐた。町全體が霧につままれたような、陰氣な慌しさがまだこゝに残つてゐる。いやこの町よりも、今日の暴落の打撃を受けた人々の深い憂ひが、いまこゝに集まつて、この暗い濃い影で、町の上を蔽つてゐるのだ。今夜は恐らく、悲嘆と絶望の底に沈んで、腸をかきむしる苦痛になやんでゐる人が、幾十萬とゐるであらう。茂はその時、いつか濱口老人が、彼に話した事をふと思ひ浮べた。老人はかう云つた。

『取引所はなあ、あゝして賑やかな陽氣な場所のやうだけれど、夜中にあすこの窓口へ行つて、そつと耳をすませてゐると、眞暗な立會場でな、わー、わーつと云ふ聲がするのが聞へて来る。それは皆あすこで損をした人間の妄念が、夜になると集まつて来て騒ぐのぢや、一寸見たら陽氣なようであればほど陰氣な場所はほかにないが』その時は何か怪談じみた荒唐無稽な話だと思つただけだつたが、今考へると、それもあながち、一笑に附すことは出来ないように思はれて、ふと取引所の方を振り返つた。

春の夜の薄明るい空の中に、大きな建物の高い屋根が、黒く突き出て聳えてゐる。入口の鐵の扉はいまは固くとざされて、四邊に人氣は絶えてゐた。茂は濱口老人の言葉を思ひ出して、今夜それを實驗して見ようかとも考へた。が、その時彼の心に映つたのは、今朝のあの混亂が終つたあとで、店の前を踰越としてよろめきながら歩いて行つた人々の顔である。その顔は蒼ざめて、魂を失つた人のように、うつろになつた凄さがあつた。眼は血ばしつて、唇は色があせてゐた。時々彼等は、山八の店をじつと睨めた。

『こゝが山八か』聞へよがしにつぶやいた者があつた。

茂はその姿を思ひ出すと、慄然として足をかへした。取引所の中に耳をすすままでもないのである。亡靈はそこにもこゝにも、軒下にも町の蔭にも到る所にさまよつてゐる。彼は急いで、電車の通る鐵橋の通りの方へ駆け出した。

電車に乗つてからも、茂は暗い想念と、目に見えない亡靈になやまされた。『投機、投機がいけないのだ。金融機關の中樞、そんな美名の下に行はれるあの投機、投機さへなかつたら——』と茂はいつものように考へた。然しそれだけではその問題は完全に解決はされ

なかつた。けれども彼の心には、失敗當時の父親の、荒み切つた生活と、日に日に冷酷になつて行つたあの顔がまぎ／＼と浮んで來た。父親は幸ひに、頹勢を挽回した。矢面に立つて勝利を博した。がその日には、父は怨嗟の的となつた。今夜、寝る目も寝ずに苦しんでゐる人々、勝つた父も、賃けたその人々も、凡てが投機の犠牲である。

「俺はあんな商賣は斷じていやだ。早く親父に頼んで、何かほかの事がしたい」そんな事も彼は考へた。然しそれは、たゞ父親の罪業を免れようとするに過ぎない卑怯な事にも思はれた。——投機がいけない。どうかしてあの投機を——彼はどうして好いか解らない問題にぶつかつて、たゞ身をもがくばかりであつた。

本村町の廣い邸宅も、この頃は無人になつて、灯りをつけない部屋が多くなつたので、いやにひっそりと静まつてゐる。取り分け、父親のゐない晩は、まるで空家のような淋しさである。茂が家に歸つて來たときには、もう十一時を過ぎてゐた。表門から玄關まで、見馴れた植込のある前庭に入つたとき、彼は何故か、云ひ知れない淋しさを身に感じた。

この土地も、この家も、明かに再び父の手に返つた。父は母を失つたこの家に、可なりに深い

執着を持つてゐた。二番三番、抵當の度が、木輪のようにかさんで行く度に、苦痛の色は深刻の度を増した。然しいまはもう完全に父の手に返つたのだ。それは何よりも喜ぶべき事である。それなのに、茂の心は暗い植込の本蔭を一寸眺めたときにも、脅かされたような淋しさを感じたのであつた。

玄關の格子を明けたとき、房子はすぐに飛んで來た。もう十八と云ふ年であるのに少女のような無邪氣さを失はない、彼女一人がこの家での、たゞ一つの光りを放つ星であつた。

「兄さん、随分お遅かつたのね、餘り遅いから電話をかけようかと思つてゐたのよ、どつかほかへ寄つていらつしたの、さうしてお父さまは」まだ靴をぬぎかけてゐる茂に、甘える聲ですぐに訊ねた。

茂はそれには別に何にも答へずに黙つて靴を脱いで上にあがつた。彼の頭は、恐ろしく變てこな、チレンマで一杯になつてゐた。

「何か變な事でもあつたの、え、兄さん。何だか少し、顔色がお悪いわ」少女のような房子の胸にも悲運であつた家の暗い影は、いつの間にか、射し込んでゐたのである。からみつくようにし

てあとを追ふ房子を顧みて茂はその時はじめて口を切つた。

『安心おしよ、お父さんは大當りだ。家も別荘も、皆なお父さんの手に返る』

『え、本當、あら嬉しいわ、あゝ嬉しい、あたしどうしよう、お父さんが、そんなにお儲けなすつたの、え、兄さん』房子はもう、すぐに有頂天になつてしまつて『ねえしまや、本當にあたし嬉しいわ。だつて、あの變な銀行だか何だかの人が來ては、家の中を調べて歩くことなんかもう無いんでしょ、それだけだつて、どんなに嬉しいか知れないわ』とわきについてゐる女中を顧み

た。

『ほんとにさうでございますとも、あの大きな顔をしてね』おしまもすぐにそれに應じた。

『ねえ兄さん、お父さまは、本當にそんなに一ぺんにお儲けなすつたの、え、ほんと』房子はなほもまつわりついた。

『ほんとだよ、嘘なんかつくもんか、だから安心して早くお寝よ。僕も今日は、店が忙しかつたもんだから、疲れちやつたからすぐに寝るから』茂は自分の居間に入ると、どつかりと腰を下して、そこに立つてる妹を眼で追ひやつた。

『兄さんはほんとに變ね、お父さまがそんなにお儲けなすつたのに、變な顔をしてゐるのよ、それでお父さまは、今夜は歸つていらつしやらない？』

『忙しくつて歸れないのさ、だから門を閉めて、皆なも、寝てしまへ』洋服を脱いで、やつと身體のくつろいだ茂は、布団の上にごろりと仰向けになつてしまつた。

『本當に兄さんは變人よ、もつと色んな事を話して下すつたつて好いちやありませんか、あたし新聞を見ても、相場のとこなんかちつとも判らないんですもの、好いわ、明日になれば誰にでも聞けるから、ねえしまや、あつちへ行つて、あたし達は皆でもつと面白い話をしてそれから寝ませう。あたし嬉しくてたまらない。ほゝ、おやすみなさい』

房子は廊下を跳ねるように、きやつくと笑ひながら、女中部屋の方へ行つてしまつた。

茂は恐ろしく疲れてゐたので、すぐに蒲團の中に潜り込んだ。けれども變な昂奮が、彼の頭を混亂させて、眼はますます涙で濡れて行つた。止め度なく、あとからあとからと湧き上つてくる、もや／＼した想念に堪へ切れなくなつてくると彼は眼を開いて部屋の中を見廻した。壁の一方に据えつけた、大きな書棚の中に、背皮の金文字の光る書物が一杯につまつてゐる。彼はその一つ一

つを、闇の中でも引き出せるほど、深い記憶を持つてゐた。いかめしい老人の嚴肅な顔が頭に浮んだ。

『全く投機は罪惡だ』彼はまた心に叫んだ。

房子がさつき現した、喜びに堪へない顔がまさぐりと描かれる。彼女が歡喜の頂點に達してゐる時よそでは悲嘆の涙にくれてゐる人々が、どの位あるだらうか。それを思ふと、茂の心はまたつき刺されるように痛んで來た。

四

翌日になつて、兜町の形勢は一層險惡になつて來た。それは安達の系統の銀行が、株券擔保を公然と拒絶した事が、一般に知れ渡つたからであつた。それにつれて一般の銀行も極度の警戒を宣言した。受渡しを十日許りの先に控えてゐる買方は、途方に暮れた。彼等は全く、闇夜に不意打を喰つたような状態にある。金融は杜絶された。株券を引取れと迫られる。どうかして投げ出

したいとあせつても、立會は停止されてゐる。彼等の苦境は、何と云つて好いのであらうか、追つめられた獸でもなほ反噬の自由がある。然し彼等にはそれもなかつた。

取引所の開かれない狭い町には昨日のような人出はなかつた。然し、どこの店の中も凄惨な氣が漲つてゐた。町を行く人の顔は、昨日よりも一層深刻な、苦痛と絶望の色を示してゐる。諧謔好きなこの町の人々も、笑ふ餘裕すら失つてゐた。町の隅、現物店の店同志で行はれる、闇相場は、凄じい慘落の値を告げる。相場ばかりを、命の綱とする人々には、恐らく世界の終りが來たとも思はれた事であらう。

茂は睡眠不足の蒼ざめた顔をして、その日も終日金庫の前に座つてゐた。外交員は彼の前に、客筋の不誠實を訴へる。仲買委員からの使らしい男は、一時間おき位に、父親の行衛を訊ねに來る。その合間々々には、

『大將はお宅ですか』と他店の外交員らしい男が、憐みを乞ふような眼つきをして、入れ代り尋ねて來る。どれもこれも、彼には不愉快な事ばかりであつた。保阪ばかりは、その間にも元氣らしい顔をして、

『なあに、茂さん心配する事ありませんよ。がたく騒いだつて、どの道場は建てなけりやならねえんだ。損をする奴は損をするし、得をする奴は得をする。どれもお前さん成行だ。さういつまでも、逆上てゐられやしませんよ』と茂に元氣をつけてゐた。茂は彼の無遠慮な口吻に出會すと、時々弱らされる事はあつても、保阪ばかりを頼りにした。

父親からは、二度ばかり電話がかゝつて來た。その度毎に茂は、

『早く歸つてくれませんか』と嘆願するやうな調子で云つた。

『馬鹿を云へ、いまおれが歸つたら、折角隠れたのが何にもならん、歸る時には催促されずとも進んで歸る。お前は周囲の事に氣をつけて、よく報告をする事と、金に間違ひがないようにすれば好い』父の聲は冷たかつた。

茂のためには不愉快な日が続いた。その翌日も、場は立たなかつたが、新聞は筆を揃へて、天下の金融機關を閉鎖した非を鳴らしはじめた。そして取引所を中心に巻き起した渦巻の烈しい力も、少しづつ鎮まつて行くように思はれた。打挫かれた人々も再起の力のあるものは、勇氣を奮つて挽回の策を講ずべく奔走をはじめ、全く力を失つた人々は、どことも知れない闇の中へ姿

を消した、冷酷な淘汰の車輪が少しづつ廻つて行く。時の經つに従つて、人々は冷靜に、そして少しづつ勇氣を恢復しはじめた。

四日目の晝過ぎに、茂のところに父親から今夜は本宅へ歸ると云ふ知らせがあつた。茂はやつと安堵の息をついた。彼は一時も早くこの重たい責任の鎖を解いて、自由にほつと快活な空氣を思ふ存分吸ひたい要求に憧れてゐたのであつた。

茂はその日珍しく、早くから店を出た。電車の窓には、薄明るい夕日が射して、車の中はぼつかりと暖かだつた。向ふ側に腰を下した人々も、この平和な春の夕を楽しむように長閑な睡さうな顔をしてゐた。車體のがたくと揺れる響きも、おつとりとした大氣の中に溶け込むか、いつものように彼の神經を烈しく咬りはしなかつた。彼の隣に腰を下した若い夫婦は、間においた一人の子供を夢中になつてあやしてゐた。淺草へ行つたのか、人形町をぶらついたのか、子供の手には可愛らしい玩具があつた。

『ねえ坊や、嬉ちいでちよ、嬉ちいでちよ、母ちゃんにそれ頂戴な』若い細君は他愛なく子供の前に首をかしげた。

『いやあ、いやあ』子供は眞面目らしく首を振つた。二人は心から樂しげに笑ひ出した。車の中にゐた人々も、思はず釣り込まれて微笑んだ。茂はそれを眺めてゐる中に、彼の心もいつか伸びやかにゆるんで行くのを明かに感じた。

あの物凄い混亂も、世界の終りが来たような騒動も、たゞあの狭い町を中心につたゞけの事である。世間はもつと廣くつて、伸びやかに暮せる場所がいくらかもあるのだ。彼はそれを考へると、朝から晩まで、金の爲に血眼になつて暮さなければならぬあの町に、尙一層憎惡の念を持つ事を禁じる事が出来なかつた。

『親父でもさうだ』と彼は思つた。

『これを機會に今度こそ引退させるのだ。さうしてもつと、靜かな世界に住はせる。そこには金よりも、もつと大切な、考へなければならぬ仕事は澤山ある。今度は親父も、きつと肯いてくれるだらう』彼の前には、何か樂しい、平和な世界が展かれて行くような、喜びが迫つて來た。電車を下りても、まだ空は明るかつた。だら／＼とした屋敷町の坂を登つて行く時に、左手の土塀の上から枝を突き出した八重櫻がもう満開に咲き誇つてゐるのを、彼は初めて發見した。

『もうおき春もしまひなのだ』茂は思はず心でつぶやいた。そして、空も花も、晝の充りも、何も見ずに暮して來たこの僅な日數が、恐ろしく長かつたように彼には思はれた。

『眞實の樂しみは、あんな狭い世界にはありはしない。朝から晩まで、上つた下つたと云ふ單調な動搖にばかり心を惹かれてゐるような、あんな場所に何がある。もつと廣い世界に出て見ろ、俺は斷じて親父にさう忠告する』夕の光りが空に輝いてゐる。おつとりとした大氣が氣持よく四邊を包んでゐる。茂は、口笛でも吹きたいような、輕々とした氣持になつて彼の家に歸つて行つた。

家に歸ると、いつもの通り房子はすぐに飛び出して茂を迎へた。そして

『今日は大變早かつたのね、丁度好かつたのよ、先刻からね、鈴子さんが來て待つていらつしやるの、何か兄さんにお話したい事があるんですつて』と彼に告げた。

『鈴子さんが』茂はすこしどきまぎしながら不思議さうに尋ねた。

『えゝさうよ、嬉しいでしよ、あら兄さん顔を赤くして可笑しいわ』房子は四邊に構はず大聲をあげて笑つた。

『馬鹿、馬鹿』茂は房子を睨めつけた。『俺は一週間も湯に入らないから、一寸湯に入ってくる』と云ひ捨て、彼は風呂場の方へ馳け出した。

風呂から出ると、彼は一層伸々とした氣になつた。一週間ばかりこの方と云ふものは、頭の中にも身體にも、黒い塊まりがこびりついて、離れないような想ひに悩まされて通して來た。筋のちびんだ節々は、ぎごちなく固まつた、心の通りにいぢけてゐたが、いまはもう、若い血がゆるやかにめぐり始めた。心にも何か希望が燃えはじめた。

『世界はもつと廣いのだ』と彼はまたつぶやいた。『が然し、鈴子さんは何の用事で來たのだらう。改まつて用事と云ふのは』これから行つて、その人から、直接に話を聞くと云ふことが、彼には何となく、嬉しくもあれば、恐ろしいようにも思はれた。鏡の前に立つて、彼はしみる／＼と自分の身體を眺めてゐた。肉づきの好い若い肉體がそこに映つてゐる、四肢に力を入れて振つて見た。そして

『俺はまだ若いのだ、親父の仕事の爲に、俺の心までいぢけさせてしまつてどうなるのだ』やがて彼は、湯上りの血色の好い顔色をして自分の部屋に歸つて來た。久々で、椅子の上に腰

を下して、デスクに眩をつきながら、見馴れた庭を眺めてゐると、漸く自分の家に歸つた落付きが、彼の心にも起つて來た。

『お風呂はもうお済みなの』と房子はまたそこに入つて來た。『ねえ兄さん、鈴子さんがね、今日は是非聞いて頂きたい事があるつて、先刻から來ていらつしやるのよ、どんな御用か、伺つて見ようと思つたけれど、何だか私には判らないの。それで兄さんが歸つていらつしやつたら、こちらから伺ひませうかつて云つてゐたんですけど、すぐ逢つて上げて下さる』

房子は子供らしく首をかしげた。

『あゝ好いとも、すぐお逢ひしよう。然し、鈴子さんはお前の部屋か』と茂は訊ねた。

『えゝさうよ、だけど、あたしの部屋では、何だか御用のお話をするのは變だわ、客間では改まるし、矢つ張りこゝへお連れませう、ね好いでせう』

『あゝ好いとも、然し、椅子のそばで座るのも何だか變だな、まあ好いや、今日はじめてと云ふわけぢやないから』房子が出て行くと、茂は机の上の鏡を取つて、一寸自分の顔を見た。それから彼は立ち上つて、座布團をそこへ投げ出して、部屋の中をうろ／＼歩き廻つた。

『いゝえ構ひませんの、さあどうぞ』と案内する房子の聲に導かれて鈴子はその部屋に入つて来た。彼女は房子には一つ年長の十九であるが、二人並んで立つたところを見ると遙かに姉と妹の感じがする。それは、肉體の年の差ではなく、心の相違を明かに現してゐた。つぶらかな房子の眼、ふくよかな顚、あどけない口元、それはまだ、心の悩みを知らない、少女ばかりが持つ無邪氣さを、多分にそこに残してゐた。然し鈴子は、細そりとした、彈力のある身體つきにも、はきくした眼元にも、引き締つた口元にも、もう大人らしい分別と、鋭い理智を現してゐた。

『お疲れのところをお邪魔しまして』とはつきりした言葉つきで云ひながら、靜かに頭を下げられたとき、茂はむしろどきまぎして、

『いえ、どうしまして、さあどうか、お座り下さい』と心持顔を赤くしながら、漸く、褥を鈴子にすゝめた。

『随分しばらくお目にかゝりませんでしたがお宅でも皆さんお變りもありませんか』鈴子の事と云へば、何一つ聞き洩らすまいとするように、房子から絶えず噂を聞きたがる茂は、漸くそれだけの挨拶をしてから房子の方をちらりと顧みた。いたづららしい眼がそこで笑つてゐる。彼は

はつとして自分の顔の赤くなるのを押える事が出来なかつた。然し鈴子はそんな事にも氣づかないように、

『本當にしばらくでございましたのね。お店の方へお出でになるようになってからは、ちつともお目にかゝれませんでしたがお随分お忙しくつていらつしやるのでせう』とはきくした調子で云つた。二人の間には、世間並な話しがしばらく交されてゐたが、やがて鈴子は

『あの、實は今日はね』と用件らしい事を切り出した。

『はあ、何か御用だと云ふ事でしたが』と茂が答へると、

『え』と云つて、鈴子は火鉢にかざした手をぐつとそらして、何か云ひ出しかけてまた黙つてしまつた。少時するとまた

『あのう』と云ひかけたが、再びぐつとつまつたように、じつと黙つて、反した手先ばかりを眺めつめた。茂も無碍に言葉をかけかねて、テレたように、鈴子の指先とその身體を等分に眺めながら、彼自身もぢ／＼として息のつまるような苦しさを感じてゐたが、やがて思ひ切つて、

『あの何です、御用の事は、どうか構はずお話し下さい。僕で御役に立つ事なら、きつと何でも

しますから』とやつと云つた。

『え、實は』と云ひかけて、鈴子は伸した腕の間に、顔をぐつと押し伏せたが、漸く決意のついたやうに、眞直に身體を起した。透き徹るやうな白い頬に、赤味が射して張りの好い澄んだ眼には、恥らひと、それに打勝たうとする努力の色が現れてゐた。

『あのう實は、私ほんとうに勝手な事をお願ひに出ましたの』と言葉を切つて、それから彼女は淀みなく話をした——それは鈴子の父親が、その家屋敷を抵當に置いて、株券を買つてゐたのだ。それが今月限となつてゐるのに、今度の變動を受けた爲に、仲買からは引取つてくれるか、それではなければ勝手に處分をするからと、毎日矢のような督促が來るのである。鈴子の父親は、もうどこへ頼みに行く的もなく、毎日部屋に閉籠つて、考へ込んでゐるばかりなので、心配に堪へかねて、母親と相談して、今日はじめて、父の意中を訊ねて見た。最初の中は、

『俺の家ももう没落だ』と涙を溜めて言つた切りで何も答へようとしながつたが、鈴子が幾度か懇請したので、五萬圓の金があれば株券も引取れる事と、全く見込みのないものでない事を漸く打明けたのであつた。

『お耻かしい話ですけれど、父も何しろあゝして、長年病身で閉ぢ籠つてをりますし、今度の事も、母と二人で、どれだけ留めたか知れませんでした。一生の思ひ出だからやらせてくれ、俺の見込みは断じて違はん、これが外れれば、俺はもう、何も彼も諦める、と申すものですから私達もつひその氣になつて、邸まで抵當に置いてしまひましたのでございます。けれども今こゝで、そんな事になりましたら、父もきつと、變な事も仕兼ねないと存じますし、全く見込みのないものでないならば、どんなものかと、御相談に出ましたのでございますが』こみ上げる涙を押へく、胸をわなゝかせて、鈴子は漸くそれだけを語り終つた。

五

鈴子の話しは、茂に取つて思ひがけない打撃たつた。彼は今度の崩落が、かう云ふ悲劇を數知れず生み出したことを豫想した。眼に見えない亡靈に惱まされた。不眠の中に苦しんだ幾夜さ、此僅かな日敷の中に、酌み乾した苦い盃、それは自分の身體から若い血汐を奪つてしまひ、心か

ら青春の力を奪ひ去つてしまつたかと思はれるほど、鋭く苦しいものであつた。それを今日の夕方、それは僅か一時間ほど前の事だ。長閑な春の夕暮の大氣にふれて、かすかに力を恢復しかけたとき、思ひがけなくも暗い豫感が、現實となつて眼の前に現れた。こゝにもまたあつたのだ。しかもその悲劇の中の人が鈴子である。茂はまだ、自分の心に明かに意識はしてゐなかつたが、どこか胸の片隅で、鈴子を戀してゐることを自分でも好く知つてゐた。接近する機會の多いの心に祈れば祈るほど、その機會を強て取り逃がすことが多かつた。その鈴子が、いま彼の前に現れた。彼は隠し切れない喜びを、胸に押へて彼女のいふき、身のこなしに心を引かれてゐる時に鈴子の口から洩れたのはこの話である。茂はその話しを聞いてゐる中に、顔色が蒼ざめて、わな／＼と慄ふ唇をじつと噛みしめた。

『本當に突然こんな我儘なことをお願ひに出来て、わたくしほんとに』と云ひかけて、鈴子の言葉が途切れたとき、茂も黙つてうつむいた。

茂の心は、嵐のやうにかき亂れた。若い彼は、出来ることなら、自分の父が、尠くも暴落の動機を作つた先鋒に立つた事、それからの店の状態、自分の感じた事の數々を鈴子の前に打明けて

心の悩みを幾分かでも軽くしたい冀におそはれてゐた。けれども今の彼にはそれは出来ない事だつた。いたづらな房子も、鈴子の話しに打たれたのか、黙つてそばにうなだれてゐる。

『お話しはよく判りました』少時たつてから、茂はやつと口を切つた。『僕は御承知の通り、たゞ店へ行つてゐると云ふだけで、場の方のことはよく知りません。けれども親父に話したら、その位のことにはきつと背いてくれると思ひます。要するに、一時御融通さへすれば、あとはどうにかなる事ですから、今夜きつと親父に話します。さうして、明日場から歸つて來次第に、お宅へ御返事に出ますから、どうかそれまでお待ち下さい』彼は自分の心を敷く苦痛を堪へながら、やつとそれだけのことを云つた。

茂の思ひ迫つた態度には、鈴子も驚いてゐるやうであつた。

『ほんとうにわたくし、こんな事をお願ひに出て、厚顔しい女だと思召すでせうが、全くどこにも、お願ひに出るところがないので、あなたにこんなに御心配までかけまして』鈴子は疊に兩手を ついて頭を下げた。その時初めて、はらはらと眞珠のような涙が光つて疊に落ちたのを、茂は見逃しはしなかつた。

『いや、そんなになすつては僕が困ります。親父が歸つて來次第に、きつとすぐに話をしますから、あなたもそんなに御心配なされない方が好いですよ、相場なんて、運賦天賦の水物ですから現に僕の家だつて』いやに大人ぶつた口吻で云ひかけたが、彼はそれつきりはたとつまつて『いや大丈夫です。きつとまた好い事がやつて來ます』と苦しうに言葉を紛らせた。三人は再び快活な話に歸る事が出來なかつた。ともすれば部屋の中が、しめつぽい沈黙に陥りかけてしまつた。

『若旦那さま、あの杉中さんが見えになりました』と女中のおしまが、敷居越しに知らせに來たとき、彼等は各自に、救はれたような氣持になつた。

『鈴子さん、またあたしの部屋へ行つて、何かお話しませうよ』と房子は最初に重たい空氣の中から立ち上つた。

『ではわたくしもうお暇しますわ』と鈴子も續いて立ち上つたのを、

『好いからもう少し遊んでいらつしやいよ、御商賣の話なんて面白くないわ、何かもつと面白いお話でもして』房子は強て引とめた。

『おい、お前ばかり勝手なことを云つて、鈴子さんは、色々御用があるんぢやないか』と苦笑しながら云ふ茂と顔を見合せて、鈴子も思はず『ほゝ』と苦笑したが、

『それではあちらで、もう少し御邪魔させて頂きますわ、ではどうか、何分よろしく願ひ致します』と茂に挨拶をし直して、鈴子は向ふの部屋へ行つてしまつた。

茂が部屋の中にぼんやりと立つてゐる所へ、

『おい磯部』と怒鳴りながら、杉中が入つて來た。二十六七のすらりとした、身體の引締つた青年である。背廣の服を着て、頭を角刈にしてゐるところは、會社員のようにも見えるけれど、その精悍な顔つきや、語尾の烈しい言葉つきには、まだ書生らしいあとが抜けてゐなかつた。

『どうしたおい、ひどい相場になつたなあ、君の店は大した當り方だと云ふぢやないか、親父さんは上機嫌だらう』と快活に笑ひながら、どかりとそこに腰を下した。

『いつも元氣で好いなあ君は』と茂もやつと座りながら、『それで君は、今度も矢つ張りやつてゐたのか』

『やつてたさ、やつてゐて、すつかりやられた。遺憾なくやつつけられた。完膚なしだ。はゝ、はゝ

然し、安達と云ふ奴は、實に辛辣な事をやるな、あゝまでやられれば憾みなしだ。然し俺はまだ
きつとやつて見せる』杉中は肩をゆすぶつた。

『全くだ。随分慘澹たるものだつたね、僕の親父なんか、その矢面に立つてやつただけ、僕は随
分苦しんだよ、あの崩落の餘波と云ふものは、どの邊まで行つてゐるのか、僕には殆ど見當がつか
ないのだ。渦巻の渦中に巻き込まれてゐる人達の間には、無論深刻な悲劇が起つてゐるに違ひ
ないが、それがどの邊まで擴がつてゐるものか、僕は、それを考へると全くいやになつて来る。
さうして君、その嵐の中心は、僕の親父と見なされてゐるのだから』茂の苦しさを顔を見る
と、杉中は、

『あはゝ』と愉快らしく笑つた。

『はゝ、また君の弱小なる人道主義か、それを一名センチメンタリズムとも云ふんだ。君の親父
さん、失禮な事を云ふようだが、君の親父さんがあれが何だ。たゞ一個の傀儡、それも極めて微
力な傀儡に過ぎないのだ。すつかり機運の熟した時に、彼等は君のフアーザーを手先につかつて
相場を崩させた。さうでなければ、たかゞ山八商店の賣物が五千や一萬出て来たところで、あれ

ほど崩れる相場ぢやないのだ。だから、君の親父さんを怨む奴は、判決を下した裁判官を怨まな
いで、仕方がなしに太刀を振る首切役人を怨むようなものだ。そんな愚劣な奴には怨むだけ怨ま
しとけ、それを君がまた氣に病むなんて』と杉中はまた快活に哄笑した。

『いやさうぢやないのだ、僕は君』茂は慌てゝそれを遮つた。『僕は無論、僕の父一人が、あの相
場を崩せるような力量のある人間でない事は知つてゐる。現につい一週間ばかり前までは、この
家も別荘も、それから君あの店まで、人手に渡りさうな状態だつた。父はそれが爲に苦しんだ。
その時は僕は父にどうかして儲けさせたいと心で祈つた。さうして幸ひに父は當つた。けれども
その當り方がいけなかつた。あれほど多くの犠牲者を出さなくとも外に金の儲け方はいくらもあ
ると僕は思ふのだ。僕はあの日、蒼ざめた顔をして、店の前をひよろ／＼歩いて行く人の姿を見
た時に、つく／＼と心にさう感じたのだ。今度の事は無論親父一人が悪いのではないのは判つてゐ
る。けれども君、あゝして一方が儲ける時に一方が傷つく、と云ふような事がなくとも、お互に
みんな儲ける事が出来てもよさうなものぢやないか、だから僕は投機と云ふ事はつく／＼とい
やになつて来た』

『お互にか、お互に愉快にか、はゝそりや好い、さう云ふ事が出来たらそりや好いだらう。然しそんな世界がどこにある。一方の國が勝てば、一方の國が負けるんだ。君は投機はいけないと云ふが、あれが商業の精髓だ。競争の象徴的表現だ。勝つか負けるか、たゞそれだけだ。ほかの世界では、それが緩漫に行はれてゐる奴を、あそこでは手つ取り早くやるだけだ。だから見給へ今度の相場でも百人が百人損をしてゐるんぢやない。賣つてる者は誰でも儲けてゐる。それは僕も承認する。が然し安達が自分の系統の銀行に擔保を拒絶させたあの陰險な手段だけは、僕はどうしても許せない』杉中の眼はきらりと光つた。

『だから君、だから僕はそれを苦しむんだ』

『違ふ』と杉中は斷乎として云ひ切つた。『君は君の親父さんが、その策略を知りつゝ參加したのがいけないとか、何故天下の爲に早くそれを曝露しなかつたかとか、退いて身を善所におかなかつたか、とか云ふんだらうが、君の親父さんなんか、齒牙にかけられる問題ぢやない。君の親父さんがどうしたつて彼はやるのだ。同じことだ。そんな事はどうでも好い。僕はたゞ彼奴に勝ちたいと思つて株をやつて今度も見事にやられてしまつた。ねえ君、君も知つてゐる通り、僕の親父も彼

にやられた。だから僕は、どうにかして彼をやるべく、金が欲しいと思つて相場をしたんだ。さうしてまたやられてしまつた。然し僕は飽までやる。金でいけなければ腕力だ。腕力でいけなければ言論でも思想でも、それでいけなければ命でもやる』

『だから君、君だけの才能があるのだから、何でもほかの事をやれば好いぢやないか、相場なんて君、本當に君つまらんよ』茂は昂奮した杉中をなだめるような口調で云つた。

『はゝ、僕に才能、それは滑稽だ。田舎の小銀行の頭取の息子に生れて、薄ぼんやりと育つて、親父が没落して金がなくなると、相場以外に何にも出来ない人間に何の才能があるものか、兜町なんて、みんなそんな人間が集まつてゐる所だよ。才能は何にもないが、志ばかり大きくつてね所謂志大にして才疎なるものばかりだ。さうして皆な揃ひも揃つて大きな夢ばかり見てゐる。成金になつて、一流の實業家になつて、代議士で政治家で、はゝ、僕も追々その口になりさうになつて来た』と杉中はまた天井を仰いで大きく笑つた。

『さうぢやないよ。さうぢやない。君はたしかにある才能と天分を持つてゐる。それを君は、自分で自分をいじめてゐるんだ』

『は、有難い感謝する。さう云つてくれるのは君だけだ』と杉中が云つたとき、

『あの御飯は如何致しませう』とおしまがまた訊ねに來た。

『あゝ、こゝへ持つて來て貰はう。あつちはまだお客さまだらう』と茂が尋ねた。

『はい、池田さんのお嬢さまがあらで』とおしまが答へると、

『ぢやこゝへ持つて來て貰はう。ねえ君、君も一緒に喰べるだらう』茂は杉中を顧みた。

『やあ、鈴子さんか、とんだ御邪魔をしたな、然しまあ仕方がない、僕もこゝで御馳走になる事としやう。來る早々いつも議論ばかりやつて、よく君のところを騒がせるね』杉中は一寸頭を掻いた。

おしまは間もなくそこへ高膳を運んで來た。そして、お給仕をとお盆を杉中の前に出した時、

『君、少して好いが酒はないか』杉中は間の悪さうにやりと笑つた。

『あるだらう、あるよ、ねえおしま、杉中君にお酒を持つて來て』と茂が云ふと、

『いやその冷で好いんだ。夕方になると僕は飲みたくなる、少しやれば好いのだが。君の所で銚子なんか並べてゐたら大變だ。コップへ一杯、それで好いんだ』おしまを顧みて彼はまたにやり

と笑つた、おしまが持つて來たコップの酒を、杉中は息もつかずにぐつと飲んだ。

『君が酒を飲むと好いんだが、どうも因循でいかんよ、が然し、そこがまた好い所だ。君のところに来るとどこか氣が靜かになる。だから僕は、氣がいら〜すると、君のところによつて來るんだ』

『はゝ、ほめられたのか、くさゝれたんだか判らないね』茂が苦笑した。

『人間てみんなそんなものさ。どこからどこまで好い人間なんてありやしない。どつか好いところが一つあればそれで好いのさ』と杉中も笑つたが、然し君、兜町と云ふ所は、面白い人間のゐる所だね。どうした、君のこの保阪君は、あの悪黨がりが、少し金を儲けると、自分の家に歸る途中で、橋の袂にゐる車屋が、旦那如何ですつて聲をかけると、よし皆なついて來いつて、自分は車に乗らないで三丁か四丁のところを、ぞろ〜車をつかせて歩いて五十錢一圓づゝやつたつて云ふぢやないか。僕はあの話を思ひ出すと、いつでも一人で笑ひ出すのだ』

『はゝゝ、まだ君、風呂屋で流しを二つ取つたと云ふ人間もゐるからね』茂がそれにこたへると二人は聲を揃へて笑ひ出した。

食事が終ると、障子を明け放つた庭に向つて、二人はごろりと横になつた。前栽の木々の蔭の暗いあたりには、小さな電燈が、かすかな光を放つてゐた。大氣はうるんで、春の夜らしいしめやかさがたゞよつてゐた。

『静かで好いなあ』と杉中は思はず呟いた。『僕は時々、どこでも好いから静かな所へもぐり込んで、坊主のような生活をしたと思ふことがある』

『僕のことをセンチメンタルだつてさつき笑つたが、君の方がかへつてセンチメンタルぢやないか』と茂が笑つた。

『さうぢやない。たゞふだん、餘り自分の生活がいら／＼するのでつひそんな事を考へるのだ』杉中がそれに答へた。二人はまた黙つて、ほの暗い庭を眺めた。

遠くの方から自動車の走る響きがかすかに聞えて來た。

『親父かも知れないぞ』と寝轉んでゐた茂がつと身を起した。

『御親父の御歸館か、僕も歸る事としよう』と杉中も立ち上つた。

『この頃は忙しいのだ。その中にひまになつたらまたゆつくりやつて來給へ』茂も無理にとめな

かつた。

『いやよく判つてゐる。店の方へ行くのは、何か商賣用で來たと思はれるのがいやだからいづれこつちへやつて來るよ』と杉中は歸りかけた。玄關口まで送り出した時、自動車が門でとまつた。

『お歸り』と云ふ聲と共に、房子がさきに、おしまやほかの女中達が飛び出して、玄關にすらりと並んだ。

『では失敬』わきから出た杉中は、無雜作に挨拶をしてさつさとそとに出て行つた。門の所で、

『やあ』と云ふ聲が聞へると、すぐに磯部の姿が近づいて來た。その時茂は、

『鈴子さんは』とそつと房子に訊ねて見た。

『もうさつき』と房子がうなづいた。磯部はバカに機嫌よく、

『やあみんな、ご苦勞、ご苦勞』とうなづきながら、奥の部屋へ入りかけて、

『茂も房子も一寸お出で』と聲をかけた。房子はすぐに

『なあにお父さん』と甘えながら父のあとについて行つたが、茂は自分の部屋に入つて、しばらく氣を鎮める様にじつと考へてから、やがて思ひ切つたように立ち上つた。

茂が父の部屋に入つて行くと、

『やお前にも、今度は随分苦勞をかけたな、今日になつて、漸くどうやら片がつきさうになつて来た。磯部の家も、これでやつと、昔に返る事が出来さうになつて来たのだ。長い間みんなして苦勞して来たが、この家もまあ人手に渡らずに漸くすんだ。かうして歸つて来て見ると、自分の家が一番好い。なあ房子、お前もこれで安心したらう』女中の運んで来た盃を口にしながら、座敷の中をなつかしさうに見廻した。そこにはあの場の中で見た冷酷で物凄しい山八の面影はなくなつて、全くの好々爺らしい優しさが漂つてゐた。

『ぢやお父さん、先からのお約束の温泉へこんどはきつと連れてつて頂戴よ』房子は少女のように父に甘えた。

『あゝ好いとも、然しわしはまだ當分忙しいから、場の方が片づいたら、茂と一緒に行くが好い。茂もゆつくり静養して、これからだ、磯部の家を、もう一たて、盛り立てゝ貰はなければ、のう』茂は父の言葉に何んと言つて挨拶をして好いか、鈴子の事をどう切り出して好いのかに迷つてゐた。父の機嫌が好いを見ると、彼はもう、これならば大丈夫と云ふ氣になつて、

『あのう、實はさつき、池田の鈴子さんが見えたのですが、それで少し』と云ひかけると、

『はゝあ、あの房子の友達のか』と父親はうなづいた。それから茂は、鈴子の話した事柄を、飾り氣もなく、そのままに父に語つた。そして『實際事情を聞くとお氣の毒ですから、その株券を一時引取つて上げて頂きたいと思ふのですが』と云ひかけた時だつた、

『バカツ、下らん事を云ふな』父親はたまりかねたやうに一喝した。

『お前は今日まで、わしがどの位、苦勞に苦勞を重ねて来たかを知らないのか、現にこの家も、あの店も、すでに他人の手に渡りかけた。それはみんな、わしが強情を張つてこの三年間、賣り通して来た爲だ。その時に誰がわしの爲に代つて證據金一つでも納めてくれると云つたものがある』

『家を失ひさうになつたのも、店をしまつて才取屋か客引にでも落ぶれさうになつたのも、わしが強情に賣り通して来たからだ。もし今度のあの崩落がなかつたら、買屋は儲けたに違ひない。さうしてわしは、はじめな有様でこの家から放り出されてしまはなければならなかつた。それをよく考へて見る。ふだんとは違ふ。今の買方は、わしに取つてはみんな敵だ。夫に茂、お前も知

つてゐるだらうが、場の方だつてもまだ解決はついてゐない。いま買方を助けるのは自分の手で自分の首をしめるようなものだ。それをお前は知らないのか。その買方が潰れようが、死にかけようが、そんな事をわしを知るか。そんな事はわしは聞かん』さつきまで、全く邪氣のなくなつた、好々爺らしい顔になつてゐた磯部の顔には、物凄しい憤怒の色が漲つて、火を吐くような語氣で叫んだ。

茂は父の心もよく判つた。けれども彼はそれよりも、どうにかして鈴子を救ひたい慾念にすつかり囚はれてしまつてゐた。

『然し、一人位助けたつて、別に全般に影響するわけでもないぢやありませんか。それにあの人は、房子とはすつと前から學校の友達だし、兩方の家へも行つたり來たりしてゐるんですから、あの一人を助けたつて、ねえ房子』と彼は救ひを求めようとして房子を顧みた。

『えゝさうよ、ねえお父さん、鈴子さんを助けてあげると思つてさうして下さいよ』房子はまた甘え聲で父に頼んだ。大抵の事であると、房子の言葉はすぐに父親の心を動かす事が出来たのであつたが、

『いやいかんよ、お前には解るまいか、父さんがあんなに苦しんだのも、ひよつとしたらお前達にも意外な嘆きをかけなければならぬかと思つて夜も眠れないほどがいたのも、その鈴子さんのお父さんのような人が澤山ゐたからだ。今わしはその苦しみから漸くもがいて抜け出した時そんな事をしてゐたら、またぢきにもつとにならなければならぬのだ。それだけは、何と云はれてもわしには聞かれない。そのかはり外のことなら、なんでもわしが聞いてやる』と磯部は靜かに房子をなだめた。

『だからその、ほかの事を聞いたと思つてして下さつたら好いでせう、それをしたからつて、必ずしもお父さんの御迷惑になると云ふわけでもなし、ともかく、ある一族を救済する事が出来るのです。さう自分の事ばかり考へないで——』と茂が再び言ひかけたとき、

『うるさいつ』と磯部はまた一喝した。『それから先は、お前のまた屁理窟だらう。そんな屁理窟や何かでもつて、何うして金儲けが出来るのだ、大體お前はわしがいくら何と云つて聞かせても下らん本ばかり讀んで見たり、ぼろ書生と交際をしたりばかりして、一體それが何になるのだ。いくら理窟が達者でも、現に兜町で曲つたら誰も相手にする者はないぢやないか。それがお前

には判らんのか』

茂は一切が無駄だと悟つた。彼は黙つて立ち上つた。そして首垂れながら自分の部屋の方へ歸つて行つた。向ふの座敷では、父親がまだ房子を相手に、何か自分を罵つてゐる聲が聞へた。けれども彼にはそんな事はもうどうでもよかつた。それよりも、自分一人の返事を待つてゐる、鈴子に對して、どう云つて答へたら好いのであらうか、彼女の家も、自分の返事一つで失はれようとしてゐるのだ。それは昧日まで自分達が、なめて來た苦痛である。いや夫よりも、思ひつめた鈴子の父は——さうしてもしそんな事があつたら、あの鈴子は——彼は机の上に突つ伏して、救ひのない苦悶に憫んだ。

六

座敷の方で、房子を相手に茂を罵る父の聲も、いつかだん／＼に低くなつて、やがて寢室に入る氣勢がしたかと思ふと、房子がそつと茂の部屋に入つて來た。

『困つたわねえ兄さん、どうしたの、泣いていらつしやるの』突伏してゐる茂の側にすり寄つて子供らしい無邪氣な眼に、當惑の色を浮べて、房子はほつと息をついた。

『随分判らないお父さんだ、池田さんの家を一軒助けたつて、お父さんが俄に損をするわけでもあるまいに、ねえ房さん、むかしは謙信が信玄に鹽を送つてやつたつてさへ云ふぢやないか、それなのに何だ、あのお父さんのけちな態度は』

『だつて仕方がないことよ、お父さんだつてこの間ぢうは、本當に夜もろく／＼眠れないほど苦勞をなすつたんですもの、だから今はまだきつと随分昂奮していらつしやるのよ、もう少しだつて、機嫌の好い時にお話すれば、さうすればきつとどうにかなると思ふわ』

『それだからお前にはまだ何にも判らないのだよ、池田さんのところでは今日明日の中にお金が必要なのだ。お父さんの機嫌なんかいつになつたらなほるのか判りやしない。そんな呑氣なことを云つてられる時ぢやないのだ、それも何んだ。池田さんのところばかりぢやない。世間にはまだ、あゝして苦しんでゐる人がどの位あるか知れやしない。だから僕は、相場なんかほんといやだつていつでも云ふんだ』

『それはほんとにさうねえ。お父さんも、早くこんなことをやめて下さると好いのだけれど、鈴子さんのところでも、今夜はきつとどんなに心配していらつしやるか判らないわ。ほんとにどうしたら好いのでしょうか』大抵の事ならば、何事も簡単に單純にかたをつけて平氣でゐられる、樂天的な房子にも、今夜のことばかりは、どうにも納まりをつけることが出来なかつた。子供らしい顔にも、限らない憂ひが浮んでゐる。

『仕方がないよ、明日になつたら兄さんが何とかして見るから、お前はあつちへ行つて早くおやすみ』茂は房子をいたはる調子で云つたが『損をした家にばかり悲劇が起るわけぢやない、親父が金儲けをして子供が苦しむなんて馬鹿げたことだ』彼は思はず、吐き出すように呟いた。

床の中に入つて眼を瞑つても、茂はなかく眠れなかつた。どうしたら鈴子の家を救ふことが出来るのか。その方法を發見することも出来ないのだ。暗い想念が頭の中に一杯につまつてゐる。その合間々々に涙に濡れた鈴子の顔が浮んでは消えて行つた。年老ひて、病にやつれた鈴子の父親、憂ひの底に沈んでゐる母親の寂しい姿、耻を忍んで、金のことを頼みに來た鈴子の心、凡てが彼には息苦しい想ひの種である。彼の心は痛みに痛んだ。そして遂には、かうまでも自分

の心に苦痛を與える、父の勝利が呪はしくさへなつて來た。次ではそれに對する自分の無力が――苦しい溜息を吐く度毎に頭の中で漠然とした暗い想念が、執念深く回轉した。茂はとうとう眠れなかつた。

明方になつて漸く、薄白い眠りにうつくと落入つたかと思ふと、父の部屋の方から何か烈しく云ひ争ふような人聲が響いて來て、息苦しい茂の眠りは破られた。

『何人か來たのか』昨夜は父を呪つた彼も、どこかにひそむ不安の豫感に脅かされて起上つた。そして風呂場の方へ顔を洗ひに出て行つた。

『だれか來てゐるようだね』洗面の支度をしてゐるおしまに彼が訊ねた時、

『え、保阪さんです、今朝早くお見えになつて、旦那さまのお目覺を待つていらつしやいました』

『あゝ保阪か』茂はそれで少し心が落着いて、顔を洗つて茶の間へ引返して來た時に、座敷の方から、

『そりやいけませんや大將、そりやあなた少し無理でさ』傍若無人の大聲で怒鳴り立てる保阪の

聲が響いて来た。茂は何となくそれに興味を引かれたので、椽先に出て行つて、朝方の庭先を眺めるようなふりをしてそこにかゝんだ。

『そんなことを云つたつて、そりや野暮でさ』保阪の聲はまだ續いた『だからあつしは、ちやんと保証金を三倍も四倍も取つてあなたの方に入れてあるんです。つまり店の規則に従つて、出来るだけの要心はしてあつたんでさ。それを何でさ、あなたがその證據金を逆に使つて、客には賣向つておまけに場でも賣つてるつてことまでちやんと知つてるんでさ、いえ、なあにかう云つたからつて、何もあなたが好いとか悪いとかつて云ふんぢやありませんぜ、だけでもたゞ何でさ、これでもし相場があなたの云ふことを背かないで、客の思つた通り暴騰した時には、あつしや矢つぱり客の方へお辭儀をしなければならなくなるんです。そりや何です、相場のことだから、どつちへ動くか神様でゝもなければ向ふ先は判らねえんだから、あつしはどうでも構ひません。けれども何でさ、それだけちやんとしてあつたんだから、いくら當限に廻つてゐるからつて、すぐに株券を引取れの何のつて云はれたつて、そんなことが出来るわけがないぢやありませんか。それも何でさ、あなたが本當に場でも買つてるなら苦しきまぎれに何て云はれたつて仕方がないと

思ひますけど、本當を云やあの證據金位、あつしにくれたつて好いと思つてゐる位でさ。さつきも云ふように、逆に相場が高かつたら、あつしが皆な引つかぶつて店の身代りになる位の了見は持つてゐたんですからね、それをあんだ』

『もう好い、よく判つたつて云ふのに』あはてゝ遮るらしい父親の聲が保阪の聲を途切らせた。

『判つた、よく判つたがお前みたいにそんなにぎやん／＼朝つばらから怒鳴らなくつてもよく判る。が然しわしが何だ、あの外交員達にお前の云ふようなことを云つてゐたら追證の一文だつて取れなくなる。いやそれ位のことぢやない。何かまた訴訟だとか、辯護士だとか、ウルサイことばかり多くなつて、この忙しい最中に、餘計な手間ひままでかけなければならなくなる。それにあれは何も特にお前一人に對して云つたわけではない。それをお前のように、無暗に怒鳴り立てられては、第一、家の者の手前にも困るぢやないか』

『なるほど、それならあつしにもよく判ります。あつしはまた店が大當りと來てゐるから賞與でも貰えることかと思つてゐたのに、當限は引取れの、先物の追證もすぐに入れるのつて云はれたんぢや、向ふへ行つたつて話のつけようがありませんや、第一それに、何うせ何でさ、この相場

はふたを開けさへすればまた崩落でさ。ねえ、あんただつて、その邊の呼吸を知つてゐるから、あんなことを云つたんだと思ふけど、それぢやこつちが立ち行きませんか、ほかの奴は何と云ふか知らねえけど、あつしはいやだ。あつしや何だそんな文句を云はれる位なら、證據金でもかつばらつて逃げ出した方がよつほど面白え』

「よく判つたよ、お前の悪黨ぶりも昨日や今日のことぢやないからよく判つた。こつちだつて何も備けつばなしに仕様つて云ふんぢやない。何れ何とかしようとは思つてゐるが、まだそこまでも何も彼も進んでゐないぢやないか」茂の父はもうこの我武者羅な、悪黨がりをもち餘したような調子で云つた。

「へ、さうですか、それならよく判りましたから、出来るだけ追證でも何でもうんと取つて来ます。なあと、こんな時でさ、腕によりをかけるのはね、だけど何ですぜ、さつきお願ひした、山キの方の分だけはどうか何とか一つお願ひします」磯部はそれには何にも答へなかつたが、二人の間には何か特殊の默契が取交されたらしいのを茂は悟つた。

「俺はバカだ」椽側からそつと立ち上りながら茂は自分の心に呟いた。——もつとよく考へて、

もつと巧な方法でも取つてゐたら、父をあんなんにも怒らせずに金を引出すことが出来たかも知れなかつたのだ。父はいつも、保阪は俺の苦手だと云つてゐる。然し、それにしてもあれほど頑固で強情な父をあれほどにへこませる保阪には、何か特別な手段があるに相違ない。でなければ、父の方に何か秘密な弱點でもあるのであらうか。何にしても保阪は自分の考へを遠慮なく主張して、而もそれを貫徹する。——それなのに自分は、あの父の現在の子でありながら、茂はそれを考へると、恐ろしく自分がバカで無力な意氣地なしとしか思へなかつた。自分の部屋に歸つて憂鬱な顔をして、つまらない物思ひに耽つてゐる所へ、

「どうです。まだ店へは行かないんですか」と聲をかけながら、障子を明けて保阪がぬつと首を突き出した。茂は黙つて寂しさうな笑で答へると、

「へ、また相變らず變てこな本と首つ引でもしてゐたんですか、バカに眼が赤いちやありませんか。店へ行くんなら一緒に出かけようぢやありませんか」と笑ひながらあごをしやくつた。

「僕はまだ朝飯も喰べないんだ」と茂が答へると、

「あつしだつてまだでさ。向ふで喰べりや好いちやありませんか、行きませうよ。え、一緒に行

さませう』とせき立てた。

茂も今朝は父と顔を合せるのが何となく氣まづかつた。それに昨夜の不眠で頭も少しぼんやりしてゐるので、朝の街でも少し歩かうと考へて、洋服に着かえると保阪と一緒に家を出た。

町には朝がたのさわやかな風が吹いて、どこにも晩春に近い若やいだ光りが満ちてゐた。

『あゝあ、そとへ出た時だけだ清々するのは』
茂は思はず呟いた。

『昨夜どうかしたんだつて云ふぢやありませんか』保阪は茂の顔をのぞくようにして訊ねた。

『え、どうして』茂が驚いた顔をする時、

『へ、そんなに驚かなくつてもよござんすよ、みんな知つてまさ。今朝お嬢さんからすつかり聞いたんです。だけど何だ、あんたあ、あのお鈴さんに惚れてるんでせう』保阪は今まで茂が口に出したこともないことを、何のこたはりもなくすばく／＼と云つてのけた。

『そんなことがあるものか、バカな、バカなことを、僕はたゞあの人の家がいま』自分でもよく判らない、心に隠してゐた急所を突かれた茂は、かつと上氣した自分の顔の赤くなるのを恥かし

がりながら、やつと答へかけたとき、

『好いぢやありませんか、お前さん何もそんなにびく／＼する事はありやしない。あんただつて兜町の若いもんぢやありませんか』と云ふと、保阪は快活に『あはゝ』と笑つた。

『ほんとうだよ、僕は別に、別に鈴子さんにつて云ふわけぢやないのだ。たゞあすこの家が氣の毒だから親父に話をしたんだよ』茂はなほも、自分の立場を説明しようとする時、

『よござんさ、それはまあそれとして、一體どうしたつて云ふんだか、あつしによく話してごらんなさい。場合によつたら、何かまた好い考へが浮んで来ないとも限りませんや』と保阪が眞面目な顔をしたので、茂もやつと力がついて、昨夜からの事を歩きながら、ぼつ／＼と話をした。

『なるほどね』聞き終ると保阪も一寸首を傾げた。『そりや何です、大將の怒るのも無理はありません。あの人にしてみれば株を買つてる人間はみんな仇に見えてゐたんですからね。理窟を云へば、買つてる奴があるから賣り屋も儲ける時があるつても云へますけど、相場なんてそんなもんぢやありません。あの人が今日まで曲り屋で、もう一息ですつからかんになるとこまで踏ん張つて来た揚句ですもの。買屋が憎いのも無理はありませんよ、それに何です。鈴子さんの方だつて

まあ脈はありませんね。何しろ、この相場を手一杯買ひ込んで、引取つたつてどうなるもんですか、金利だけだつて追倒されてしまひます。だから何です、そんな事は諦めさせて、あなたが何とかして、あの家の立ち行くような方法を考へてやつたら好いちやありませんか。それなら何とかなると思ひますがね。保阪の考へはどこまでも相場師らしく簡単に要領を得たものであつた。が茂には、それが餘り物質的すぎて、鈴子の家を侮蔑するようにも思はれた。

「然しそれではつまり僕が池田さんの家の面倒を見るつて云ふ事になるのだね」しばらくたつて茂が云ふと、

「えゝさうでさあ、あんなべラボウな株券を引取るの何のつて云ふよりも、差當つてさうでもした方が早くつて好いちやありませんか。その中には大將だつてまた何とか氣も變るでせうし、好い芽の吹いてくる事もあります、いまあゝしていきり立つてゐる所へ株券の何のつて云つたつてきゝつこはありませんよ。だからいま當座のところ、さうしてしのぎをつけておいたら好いちやありませんか」

「然しそれにしたつて、僕には金が出來ないんだ」茂が苦しませに云つたとき、

「何でもありませんや、小切手を書くんです」

保阪はまた極めて簡単にそれに答へた「ねえさうでせう、これが何でさ、三萬の五萬のつて云つたら、誤魔化しがつかないけれど、二千や三千なら何でさ、遊びに行つて使ひすぎたつて云つたつて云ひわけが立ちます。相場で損したなんて云つたらダメですよ。今度の相場で損をするのは、みんな大將の仇ですからね、遊びに行くなあ當り前でさ、好い若いもんですもの、それでも大將が怒るようなら、あつしがちゃんと話をします。大丈夫ですとも」保阪はまた、それにも如何にも自信があるらしく、にやりと笑つた。

「さうだなあ、實際さうでもするよりか」

茂は心に迷ひながら呟いた。茂にとつては父を欺いて小切手を書くこと、それも無論いままでにしたこともない恐ろしいことであつた。然し夫よりも、いま没落の淵に臨んでゐる鈴子の家を、先方の頼み通り救ふことの出來ないのが一層の苦痛であつた。いやそれよりも、それは結局、無力な自分が僅かのことを恩にきせて、鈴子の歡心をつながうとするように取られはしまいか。もしさうとられたら、それこそ自分の情念を殺す種になる。いやそれつまりは自分の利

己的な醜い精神から出て来た汚い考へか——彼はまた深い迷ひに陥つた。

『かまひませんよ、さうおしなさい』保阪は茂が考へ込んでゐる態度を見ると、勵ますように再び云つたが、茂は黙つて首垂れてゐた。そして芝園橋まで来たとき、思ひ出したやうに、

『電車に乗らう』と云ふと同時に、發車しかけた電車に飛び乗つた。保阪もすぐとそれに續いたが、二人はそれつきりその話にふれなかつた。

茂が店に來た時は、取引所の開かれない店の中はいやにだらけてゐた。丁度それは近火のあとか、葬式でもあつた時のやうに、店員は隅の方に集まつて、いつになつたら場が開くのか、買屋の中でも、どこそこの店が一番危い、と云ふような事を退屈らしく話してゐた。外交員は外交員で、

『全くこれではやり切れない』

『今月は玉割もふいだらう』

など、青息をつきながら、毎日繰返した泣言を並べてゐたが、茂と一緒に來た保阪の顔を見ると、

『どうだね保阪さん、君の方は追敷は大抵集まりましたかね』と一番若い鳥居が、からかふやうな調子で訊ねた。

『あたりめえよ、お前達たあ腕が違ふんだ、取れるものはみんな取つたさ』保阪があごをしやくつて見せると、

『取れねえものは取れねえんだらう』相變らず紳士のやうな恰好をした齋藤が横から口を出た。

『あは、違えねえ』保阪は大きく笑ひながら店の奥の方に姿を消した。

茂は薄暗い金庫の前に腰を下して、黙つて店の中を見廻してゐた。朝の光りが表の硝子窓から射し込んで、四邊はかつと明るかつたが、何となくおどんだ空氣の漂つてゐるのが、彼の心を一層憂鬱にした。茂はじつと物思ひに耽りながらも、自分の隣に座つてゐる、帳場係の服部の態度に絶えず眼を注いでゐた。

『今日はどうかしてこの男の眼を晦まして、小切手を一枚書かなければならないのだ』それを考へると茂の神経は異常に緊張した。茂は帳面を調べたり、報告の綴りを作つたりしながらも、絶えず同じ事を考へてゐたのであつたが、彼が店に着いて一時間とたない中に、市場閉鎖と同時に

に姿を隠した父の磯部が、はじめて自動車に乗つてやつて来た。

店先に自動車がピタリと止つて硝子戸の開いた所に、磯部の姿が現れると、店の者は期せずして、一同どつと立ち上つた。彼等に取つては、それは全く教主の出現だつた。外交員達は、多少成績不良の攻撃を受けるまでも、磯部のゐない店の中は、全く羅針盤を失つた船と同じように、心細いものだつた。

『お早うございます』外交員の山田が先第一に恭しく出迎えた。

『しばらくでございました』鳥居が叮嚀に頭を下げた。皆なが立ち上つてゐる中を、磯部は、

『やあみんな、ご苦勞をかけてすまなかつた』

悠々と云ひ捨ててそこを通り抜けたが、金庫の前に坐つてゐる、茂と顔が合つた時、唇のあたり一寸不愉快な色が浮んだ。磯部は黙つて一番奥の、彼のデスクの前に坐つた。

だらけた店の中は一時に活氣を帯びて来た。然し磯部はどこまでも冷靜に、不在中の帳簿を調べ、追敷の納入額、客先の態度の報告などを事務的に一々聞き取つてゐた。そして一應それが終つた時、外交員の齋藤はすぐに彼の前に出て、

『如何でせうな大將、場の方はもうぢき開く事になりますでせうか』と恭しい態度で訊ねた。

『さあそれは、私にもよく判らんね、取引所の方では、追證の納入ばかりでなく、多少は人心の安定を見据るつもりでゐるのだから』磯部は應揚にそれに答へた。

『なる、なるほど、それで銀行の方の様子は大概どんな風になつて居りますのでせうか』

『さあそれが、銀行の方も相場がこんな具合で、取引所も開かれなければ、株券の値段も判らな
いとなると、益警戒するよりほかに道はなくなるだらう。取引所の方では、銀行でどしどし融通
してくれば人心も安定すると考へてゐるだらうし、銀行の方では取引さへ完全に行はれればと
も考へるだらうし、かうなるとお互に恐怖心のいたちごつこさ』と云つて磯部は愉快らしく『は
ゝゝ』と大聲をあげて笑つた。

『然し何でしたな、大將なんか飽くまで大勢を逆に張り通してお出でになつただけに、今度は實
際御痛快な事で、へ』山口は素人の客先にでも行つたように、追従笑ひをして見せたが、

『いや、わしなんか駄目さ』磯部は急に、べもない顔をして、山口に乗ずる隙を與へなかつた。

『兎も角、客先の方はもう少し熱心に回収してくれなければ、こんな時には實際弱るね』

山口は恐縮して、磯部の前から退いた。

父が来たのは茂には思ひがけない打撃だった。

『親父に見張つてゐられたのでは』彼の心は焦り出した。『ひよつとしたら、俺が今日、昨夜云つただけの金を持ち出すでも思つてやつて来たのか知ら』彼はそんな風にも考へて、父の様子を金網越しにジロ／＼と眺めてゐた。

磯部に一通り報告すると、さつきまで退屈らしく店の隅で泣言を云つてゐた外交員も、忙しさをあたふたと店を出た。——その間にも茂は絶えず、鈴子のことや気がなつてゐた。彼は時々思ひ出したように、椅子からひよつと立ち上つたり、帳簿を無暗に繰り返したり、そは／＼としながら、時計の動きを見張つてゐた。午になつても磯部は依然として帳簿を調べたり、未納の客先に對する督促の方法を服部に云ひつけてゐた。茂はその落つた父の態度がだん／＼に呪はしくさへなつて来た。

『なあに構はない。親父がどんなに頑張つても俺はきつとやつて見せる』彼が心に叫んだとき、電話口に出た小僧が、

『山口さんからお電話です』と磯部の前に報告した。山口と云ふのは栗田の變名だった。磯部はすぐに立ち上つて電話口に出たが、引返して来ると茂に、

『わしはまた用事が出来たから、これからすぐに出かけて来る。店の方は絶えず激勵して、どし／＼追敷を取らなければ駄目だぞ。下らん事に引つかゝらないで、しつかりやつてくれなければ安心して出る事も出来やしない』

と云ひすて、急いで自動車に乗つてしまつた。

茂はほつと息をついた。そして今度は少し落つた氣持になつて、時計の進みに目もそゝいでゐた。

二時半になつた。それはいつも銀行へ金を振り込む時間である。茂はその日集まつた小切手や現金を残らず纏めて計算した。そして帳簿へ記載する前に、その中から三千圓の小切手をそつと抜き取つた。残額を帳簿に記して、小僧にそれを銀行に振り込ませた。それから彼は何氣ない風をして店を出て、直ぐ近くの第一銀行で、小切手を現金に引き換えた。第一の仕事はそれで終つた。彼はほつと安堵の息をついたが、それと同時に云ひ知れない不存と悔恨が湧き上つた。

『構ふものか、親父はもう何十萬と云ふ金を儲けてゐる。この位の金は何だつて云ふんだ』
捨鉢になつた調子で、彼は強ひて自分に勇氣をつけた。

五時になると彼はさつさと店を出た。阪本町の角まで来たとき、

『茂さん、茂さん』と呼ぶ聲が後に聞えたので振り向くと、そこには保阪が例の薄笑ひを浮かべながら立つてゐて、

『どうです、うまく行きましたか』といきなり訊ねた。

『あゝ、追證の中から一枚抜いた』茂は強ひて冷やかに答へた。

『さうですか、そいつは甘くやりましたね、あつしはまたどうしたかと思つて随分心配してゐたんです。大丈夫ですよ、そんなに急に判りやしません、早く行つてしつかりおやんなさい』と云つて『へへ』と笑ひながら、茂の背中をぼんと叩くと、さつさと後を向いて店の方へ歸つてしまつた。

七

その日の夕方、鈴子の家では、二階の病室に横になつてゐる、父の枕元に鈴子と母親とが集まつて心配に堪へないような顔をしてひそ／＼と話してゐた。父親は、藁布團の上に厚く重ねた布團の中に埋もれるようになって仰向けに横たはつてゐた。まだ六十にならないと云ふのに、その顔はひどく瘦せて、取分けこめかみのあたりが、がくりとへこんでゐるので、もう七十を越したと云つても好いようにさへ見られるのだつた。薄い搔卷の上から胸の上に両手を組んで、じつと眼を瞑つてゐた。部屋の中には病人の體臭と藥の匂が重苦しく漂つてゐた。

『如何ですのお父さん』鈴子が聲をかけたときに、病人はやつと、

『うむ』とうなづきながら、大儀らしく首をまげて眼を開いた。どんよりと光を失つた眼の色が鈴子の心を一層悲しくした。

『いや、もうだめだ。だめだが然し、磯部は今夜来てくれると云つたのだね』かすれるやうな聲

で鈴子に訊ねた。

『え、今朝もお話したように、房子さんのお父さんが御不在でしたから、歸り次第に相談して今夜御返事を下さると云ふ事でした』

『うむ、さうだつたね。さうだ。然し、もし今夜来てくれても、わしの要求を肯いてくれなければ、わしはもう絶對の破滅だ。だからわしは何だ、少しでも樂に話の出来る中に、その事をよくお前達に話しかうと思つて、こゝへ來てもらつたんだが』時々苦しうにせき込みながらも病人は懸命の努力をもつて話し始めた。

『今度と云ふ今度は、わしも全く徹底的にやつつけられた。もう再擧の希望も全くなつてしまつたよ』と云つて病人は寂しげに『ふ』と笑つたが、『今日までお前達には話さなかつたが、わしは本當に最後の方法として出来るだけの手段を講じてかゝつた事だつた。だからもし、磯部がわしの要求を肯いてくれなければ、わしは早晚、法律上の罪まで着なければならなくなるかも知れん』どんよりした病人の眼の中には、氣味の悪い光が少しづつ漂つて來た。

鈴子も母もはつと驚いた顔をしたが、

『そんなことをお父さん大丈夫ですよ』と強て打消さうとしたが、

『いやさうでない。どんなことをしてゐるか、いま委しく話す必要もないが、わしはそれが苦しいので、鈴子にあゝして頼ませてやつたのだ。大體わしから云へば、磯部はお前の友人の父親だからそんな事を頼ませるさへ心苦しい。殊にわしは、あの男が蟲が好かん。人間と云ふものは不思議なものでな、自分にひどく迷惑をかけた相手でも、仇同志のような立場に立たなければならなくなつた人間でも、どこか親しむことの出来るものがある。かと思ふと、その人間とは、何の恩怨もないくせに、その男の顔を一度見ると、一生憎み通したくなる奴があるものだ。わしには磯部がそれだつた』血の氣の失せた病人の顔にも赤味が射して來て、かすれた聲にも異様な熱を少しづつ帯びて來た。

『は、妙なことを云ふようだがな』と寂しく笑つたが、『これが反對の場合でもさう云ふことがあるものだ。鈴子の前で云つたら變かも知れんが、一眼見たら一生忘れられん好きな人も世の中にはあるものだ。のう、わしはあの磯部を一目見た時から、心の底から憎み通した。お前の友達のお父親でもあるし、以前兜町へ行つた時にも、二三度逢つて軽い挨拶だけをした事もあつた。然

磯部は、その度毎に冷たい傲然とした態度をして、世の中で仲買の主人ほどえらいものはないと云ふような顔をするのだ。いや、その位のことなら、どの社會でも傲慢で冷淡な人間は澤山ある。わしも多くの人間に交際して来たものだから、それ位のことだからかうまで憎む心にはならなかつたらうが、あの男だけは、最初に一目逢つた時から、この世の中からかき消してしまひたいほどの憎みを感じたのだ、不思議と云へば不思議だが、恐らく前世では仇同志であつたのかも知れん』病人はまた寂しく笑つたが、鈴子も母も、初めて聞く病人の奇怪な話に氣壓されたやうに息をこらして黙つてゐた。

『ところがその男がわしの家の近所にある。さうしてそれがお前の友達父親だ。わしは今日まで黙つて誰にも話さなかつたが、どうかしてあの男に打勝つてやりたいとそればかりを心にかけて来た。金を餘計に儲けたものが羨まなければ、世間にもつと羨んだり嫉妬しなければならぬ者が澤山ある。然しわしの心の対象はあの男から離れる事が出来なかつた。どうかして磯部に勝ちたい、そればかりを念頭に置いてゐたので、今度のような失敗もしたのかも知れないが、わしは飽くまでそれで通して来た。つひ先達まで、あれが失敗に失敗を重ねて、もう一息相場が騰

つたら、たしかに破滅をしたに違ひない。わしはもうすつかり愉快になつて来て、自分の最後の運命を賭けて見る氣になつて凡ゆる手段を盡して相場を買つて見た。さうしてそれが少しは云ふ事をきいたのだが、その中に今度の崩落が来た。然も崩落の動機を作り、その先頭にたつて切り崩したのがあの磯部だ。わしは新聞でそれを知つたとき、眼に見えない自分の運命が、たしかに彼の男の爲に、見事に叩きつけられたものだと思つた』

病人の顔には苦しげな色が漂つて、口を結ば熱い息をほつとついた。部屋の中はもう薄暗くなつてゐた。鈴子も母親も思はず重たい息をほつと吐いたのが、たがひの耳に氣味悪く響いて来た。

『然しわしは』少時たつて病人はまたその重たい沈黙を破つた。『今はもう全く破れた。遺憾なくやられたのだ。このまゝにしてわしが死んだら、この家は破産するよりほかに道はない。いやそれより』と云ひかけたとき、病人の顔には遣る瀬ない苦痛が浮んで、その眼には涙さへ浮んで来た。

『わしはもう死んで行く人間だ。不名譽も破産恥も、生きてゐる中に回復する道を失つてゐる。』

墓場の向ふまでそれを背負つて行くのも止むを得ない運命と諦めてゐる。然し、それをお前達の上に残して行くのは忍び得ない事だつた。そこでわしは、最後の手段として、今までわしが心から憎み通してゐた、あの磯部の前に兜を脱いで憐みを乞ふことに心をきめたのだ。のう鈴子、もう今日明日にも命の知れないわしに残された手段と云ふのはたゞそれだけだ。わしはこれで、自分の運命に對して誤算したあやまちと、その結果がお前達の上にかぶせた不幸の罪をこれでつぐのはせて貰ふ氣になつたのだ。それでお前に、磯部の所へ耻を忍んで行つて貰つたのだが、何にも知らないあの子供達はとにかく、血の氣の冷たいあの男が、殊に今は自分の勝利に誇り切つてゐる際に何と云ふか、わしにはそれが何よりも氣がよりで、今日も一日苦しみ抜いてゐた所だ。磯部の所から何と云ふて反事をよこすか何れにしてもわしの命はもう長くもあるまい。これだけが、わしの遺言でもあり懺悔とも思つてよう聞いておいて貰ひたいと思つて、お前達に来て貰つたわけだつた。今になれば皆な愚痴に過ぎないが、人間はつまらん事に苦しんだり怒つたり、嘆いたりするものだ。病人はさも自分を嘲るように、力のない聲で冷たく笑つた。

鈴子には何と云つて父に答へたら好いのか判らなかつた。父が人知れず磯部に對して抱いてゐ

た憎悪や嫉妬、夫から生れた痛ましい迄の苦しい氣持、夫は女にもない氣持ではなかつたが、鈴子は其根深い烈しさに驚いてゐた。父の洩らした法律上の罪と云ふ事と、池田の家の目前に差迫つた破産の悲運、彼女の心はもう千々に亂れて、涙も中々出ては來なかつた。母親はもう全く喪心した人の方になつてしまつて、蒼ざめた顔をして、天井をぼんやりと見つめてゐた。

『大丈夫ですわお父さま』鈴子は皆なを、さうしてまた自分をも勵ますような調子で云つた。

『わたくし女ですけれど必ず何とかしてお目にかけます』やつとそれだけ云つた時に、彼女は思はず、ハラ／＼と涙を疊の上に落した。

『いや、その心持は有難い、必ずやつて貰ひたい。わしはそれをお前に望む。が然し、わしはもう長くはない』病人が淋しげに云つた時下の方で、門を開ける音がして、やがて玄關のベルが鳴つた。

『きつと茂さんですわ』鈴子ははつと顔を上げて、赤くなつた眼のふちをそつと拭つた。

それは鈴子の豫想通り、茂が訪ねて來たのであつたのを、女中が彼等の所に知らせて來た。

『いますぐに行きますから、お座敷へお通ししてね』と女中に言ひつけてから『ではわたくし』

鈴子は一才父に會釋して起ち上つた。彼女の顔には、もう何か心に深く決した色が漲つてゐた。涙に濡れた顔を薄く化粧しなほして、座敷に出て來たときの鈴子の態度は、別人のように冷たく落着きはらつてゐた。

『昨晚はどうも本當に失禮を』と挨拶すると『いや、僕こそ』と茂はどきまぎした恰好で、固くらしく頭を下げたが、それつきりぐつと息詰つたように、ハンケチを取り出して、額の汗を拭いて見たり、膝をもぢくさせたりしてゐたが、やがて、

『昨夜あなたがお歸りになると間もなく父が歸つたので、すぐに話をしたのですが』と漸く口を切つた。

茂はひよつと間をおいて、

『それについて、色々お話をしたいと思つて伺つたのですが、こゝでもお差支へありませんかしら』とまの悪さうに座敷の中を見廻した。

『えゝ一向差支へございませんの、父は二階にふせつてをりますし、母はそれに附切りなので失禮致してゐるようなわけなのですから』

『あゝさうですか、それならなんです、實は父に話したところ、父の方もその何です、色々打撃を受けてゐて、いますぐに、お話の額だけお間に合せする事が出來ないと云ふのです。それで僕も、實際お頼みを受けておいて申譯ないと思つたものですから、今日場へ行つて、色々ほかの人間にも頼んだり相談もして見たのです。けれどもどうも、みんな今のこの株を引取つてもとも見込みはあるまいと云ふのです。僕も實際困つてしまつて、色々考へて見た揚句、ともかく現在一番大切なのは、あなたのお父さんの御養生をなさる事だし、御家庭に御心配のないようにしてこの難關さへ切りぬければ、また必ず復活をなさる機會も來るだらうと思つたのです。それの中には父の方も何とか融通のつく時機も來るでせうし、ともかくそれまで持ち堪へてさへ頂ければ、僕が必ず何とか出來ると考へたので、今日實は』と云ひながら、彼はまたもぢくとして洋服の隠しから金包みを取り出して、

『それで何です、ともかく當座のお父さまの御費用にもと思つて、僅かばかり、本當に失禮で恐縮ですが、僕の志としてこゝに少し金を持つて來ました。これでどうか、當分御養生をしてゐて頂ければ、その中に僕必ず何とかしますから、餘り失望なさつたり御心配をなさらないように

あなたから一つ、よろしく願ひ度いのですが』とおづ／＼と紙包みを鈴子の前に押しやつて、彼はまたほつと太い息をついた。

茂の態度にはうぶな誠實の色が明かに現はれてゐた。鈴子はそれを見てゐると、どこか心を引かれたが、その言葉の中には、何か隠せない偽りのひそんでゐるのも、彼女はすぐに直感した。自分の家はいま滅亡の淵にのぞみ、一步轉落したが最後、暗い汚辱が待ち受けてゐるばかりであるし、父は死に瀕してゐる。彼女の心には、茂のうぶな感情を受け入れるだけの餘裕がなかつた。いやそれよりもそのうぶらしい影に隠れて、自分の父の勝利をかくさうとする、煮え切らない態度に、いやな反感をさへ感じてゐた。鈴子の顔には隠し切れない不満と失望の色がありありと浮んだが、

『それはまあ、ほんとに色々御心配をかけて相済みませんでした。あんな事をお願ひに出で、さぞ生意氣な女と思召したかも知れませんが、父が毎日餘り苦しむ顔を見るに忍びませんものでしたから、お宅ならば株のことは何でも御存じと考へましたので、あんな事をお願ひに出で、あなたにまで飛んだ御心配をかけまして、わたくしほんとうに、お耻かしいと存じますわ』

強ていんぎんに禮を云つた。

『いや僕こそほんとうに申譯ないのです。お話を受けたゞけすぐに出来れば何でもなかつたのですが、どうも思つたように行かないので實際弱つてしまつたのです。それになんです、こんな事をして大變失敬で全く心苦しいのですが、たゞ僕の心持を汲んで頂いて、それだけはどうかお納めを願ひます』

茂は嘆願するような顔をした。鈴子はそのとき、膝の上に重ねた手を、堅くぎゆつと握りしめて、こみ上げて来るものを壓しこらえるような風であつた。彼女の肩は固くちぢまり、その顔は俄に赤く充血したが、しばらくすると物凄く白く醒めて行つて、それと同時に、燃えるような眼を上げて茂の顔をじつと見据えると、

『おほ／＼』と引つるような聲を上げて高く笑ひ出した。

『ほんとうに磯部さん、あなたはわたくしが、今度の株のことを何にも知らないと思召していらつしやつたんですか』俄かに様子の變つた鈴子の態度に、一層どきまぎしてゐる茂の顔を嘲るように眺めながら、鈴子はいきなり云ひ出した。

『わたくしもかうなれば、何も彼も本當の事を申し上げてしまひますわ。わたくし、あなたのお父さまが、今度どんなことをなさつたか、それからまた、どんな風にしてお金をお儲けになつたのか、みんな知つてをりますわ、父もまだわたくしがそんな事を知つてゐるとは思つてゐないよ。うですけれど、それはあなた、一家の浮沈に關する事でございますもの、況してあなた、わたくしの家のように、父はあゝして寢込んだきりでをりますし、これからの家の運命がどうなるものか判らないような場合に、わたくしのような人間でも、自然新聞をでも熱心に讀むようになりま。すもの、その位のこととはほんとうに判つてをりましたわ、ですからあなたのお話も、全部本當とは承はれませんの』と云つて、鈴子はまた引つるような聲で笑つた。茂はもうすつかり度膽を抜かれて、

『いやそんなことは、そんなことはないですよ』と強て言ひわけをしよとしたが、

『いゝえよござんすの、わたくし決してあなたをお恨みしようとは存じてをりません。あなたの意志もよく判つて居りますし、御厚意も嬉しく存じてをります。けれども茂さん、わたくしの家はもうほんとうに、破滅しかけてをりますの、あなたの御厚意で、これだけ拜借しましても、

家をこの苦しいところから救ひ出すことが出来ませんければ、却つてたゞ、餘計に心苦しい思ひを重ねなければなりませんもの、ほんとうに大變生意氣なことを申し上げるようで失禮ですけれど、わたくしのお願ひしましたのは、あなたのかう云ふ御厚意でなく、相場のことは何もかもよく御存じのお父さまに、商賣上の理解を持つて此苦境を救つて頂きたい事でございましたの。夫ならば却つて御迷惑をかけずに済むかとも存じたものですから』と云つて鈴子はまた寂しさうに、『ほゝ』と笑つた。

鈴子の話を聞いてゐる中に、茂は叩きつけられたような昏迷を感じて來た。彼は頭の心がすき／＼痛んで、煙でも一杯つまつたような苦しさを感したが、それでもその底から何かはつきりしたものを掴まうともがいてゐた。鈴子の言葉の中には明かに父に對する針のような敵意と、自分の甘い好意に對する侮蔑とがある。然しそれよりも茂が一番強く感じたのは、鈴子が急に氷のやうに冷たくなつた彼女自身の絶望の力だつた。この生若い女學生上りの女が、相場の取引をあれほどによく理解し、自分の父のした事まで、明かによく吞込んで、救ひの聲を上げたのも茂には驚異であつたが、それよりも、自分の甘い好意によつては救はれない、もつと冷たい事務的な理

解のある同情を求めてゐるのが彼には一層不思議だつた。——この女は今ももう、凡てか零か、と云ふ絶對絶命の窮地に立つてゐるのだ——茂はそれを考へた時、自分の生煮な、甘つたるい態度が堪らなく耻かしくなつて來た。

『いや、あなたのお心持はよく判りました。實際僕が生煮でダメだつたのです。然しこの金は決してそんな辯解的な氣持で持つて來たのではないのです。たゞ單に僕の氣持、いやそれもいけなさが、何とも思はないで納めて頂けませんか知ら』蒼ざめた顔をして、唇をぶる／＼震はせながら彼がやつと云つたとき『ほ、それこそかへつて變ですわ、それはいけませんわ』と鈴子は表情のない顔をして、聲ばかり高く笑つた。

『ほんとうに茂さん』病的な笑ひがしづまると、鈴子はまた言ひ出した。

『あなたがどうしてもこれを取れと仰有ると、わたくし終ひには、あなたをお恨みしなければならなくなりますわ、わたくしのお願ひしたのは、現にかうして破滅しかけてゐるわたくしの家を救つて頂きたいと云ふことだけでございましたの。それ以外には、何にもお願ひ致してはをりませんのに、あなたがどうしてもこれを取れと仰有ると、わたくし何だかもう、變に憐みを乞ふよ

うな、お金でさへあれば何でも好いような、自分が情けなくなつて口惜しくなつて參りますの。現に父はもうあゝして——それに家は』鈴子はそこ迄言ひかけると、ぱたりと口を切つて、唇をぴり／＼と慄はせたが、

『どうぞもうこの上侮辱しないでお待ち歸り下さいまし。父はもう、父はもう』と云ひながら慄える手先で、その紙包みを茂の前に押やつた。茂は全く面喰つてしまつてゐた。彼には鈴子が俄に變つてヒステリックな状態になつた事も、それからまた、その言葉の中に含まれてゐる、あらはな敵意を持つた原因も、明かには判らなかつたが、凡てが思ひがけない事ばかりなのに、彼はすつかり度を失つてしまつてゐた。

『さうですか、それでは持つて歸ります』子供のよう顔に赤めて、前にあつた紙包みを、間の悪さうに上着の隠しにそつとしまつた、鈴子はそれを、さも愉快らしく眺めてゐたが、

『あゝわたくしそれで氣持が晴れ晴れとしましたわ、房子さんにも何卒よろしくね。少時お目にかゝれないかも知れませんが、御心配をかけて済みませんでしたと仰有つて下さいまし』何事もなかつたように、けろりと落着いた態度で彼女は言つた。

『ぢや僕も失敬します。どうかお父さんを御大切になさいますように』と茂は立ち上りながら言つたが、鈴子はそれには答へなかつた。

玄關を出るときも、茂は何か腑に落ちないことがあるように、ふと小首を傾けて鈴子の顔をちらりと見たが、思ひ返したように、

『左様なら』と云ひ捨て、さつさと門の方へ行つてしまつた。

鈴子は茂の姿が闇の中に消えて行くのを、じつと見送つてゐた。やがて門の潜りの開く音がして、靴音がそとに消えると、彼女は急に堪らなくなつたように、はらくとこぼれて来る涙を袂でおさへて、少時そこに立ち盡してゐたが、廊下の方に女中の足音が聞えて来ると、明りに顔をそ向けながら、再び二階に上つて行つた。

『どうだつたかな鈴子、磯部の俵はもう歸つたのか』鈴子の姿を見ると、父親は力のない聲で訊ねた。

『はい』と言つたが鈴子は、それつきりあとの言葉も出て来ないので、黙つてじつと首垂れてゐた。

『ふむ駄目だつたか』父親は凡てを察したらしかつた。力なく開いた眼をまたじつと閉ぢたが、その顔には悲痛な色がさつと流れた。

『出来るだけの事はやつて見たのだ、どうかわしを悪く思はんでくれ』かすれた聲で父親が再び言つたとき、

『大丈夫ですわ。お父さま、わたくしきつと何をしても、池田の家を盛返してお目にかけます』

鈴子はきつぱりと言ひ切ると、そのとき初めて、思はず『わつ』と泣き伏した。

母親も下を向いて、袂で顔を押えてゐた。観念したらしく眼をとちた父の顔も、ぴりりと動いた。部屋の中は恐ろしく静かになつてしまつてゐた。

八

長く閉鎖されてゐた取引所に對する輿論の攻撃は、一日々々と昂まつて来た。公共の金融機關を停止させてゐることは、國家の經濟狀態を益々危機に導くものであることを世間は擧つて非難

した。爲政者の無能、取引所員の無力、取引所の組織の不完全、仲買人の不誠實、凡ゆる非難がこの一角に集まつて来た。仲買委員や取引所の理事は、政府に對して必死となつて救済方について奔走する。どの仲買も店員を激勵して客筋に向つて追敷の納入、株券の引取を峻烈に迫つて行く。取引が開かれないだけに、いつも賑かなこの町も表面は正月の休會の時と同じく静かであつたが、店の中、取引所の重役室、委員室には、嵐のやうな混亂が毎日絶えず繰返された。それは丁度上表の靜かな海面の底を、烈しい潮流が流れてゐるやうな危険な状態なのだつた。然し何よりも冷たい時の流れは、人々の憂ひにも喜びにも無關心に靜かに同じ歩調で進んで行つた。一時はいつ解決がつくとも知れないほど暗黒の底に陥つた紛擾も、一日々々と糸のほぐれるやうにほぐれて行つて、曲りなりに漸く開市の曙光が見えはじめたと云ふ噂が、この町の人々に福音をもたらして来た時だつた。

大多數の仲買店や、店員や客筋は、全く憂ひの底に沈んでゐた。そこへ行はれたみぢめな悲劇は、外交員達の口を通してあちこちに傳へられたが、磯部と栗田はそれ等のことは冷然と聞き流して、たゞ彼等自身の勝利の歡喜に酔ひながら、毎日ひそかに落合つては次の策戦を怠らさ

めぐらしてゐた。

市場開始の報知が彼等の耳に傳はつたとき、二人は相顧みて、會心の笑を洩らした。それは打倒した敵に愈止めを刺す時が来たのだから。

『漸く易が聞く事となりました』その日も深川亭の奥の川沿の一室で二人は落合つて、春の日にきらめく川面を眺めながら、栗田が云つたとき、

『左様、これでもかく一段落つく事になりました。何れあとは當分保合ふことになりませうが何かまた一つ面白い仕事をやりたいと思つてをりますが、その節はまた一つ御配慮を願ひたいもので』磯部は媚るやうな調子で云つた。

『左様々々、何しろ我々が當つたと云つても安達さんから比べたら、目糞みたいなものでござすからな、だん／＼聞くと何しろ三四千萬は確實だらうと云ふ話で』栗田は自分の背後にある、有力者を誇らしげに云ふのであつた。それを聞く度毎に、磯部は心の中で齒齧みをした。彼自身はその没落の深淵から救はれたのも、その安達の仕事の先棒を勤めたお蔭ではあるけれども、その代り自分は兜町の仲間からばかりでなく、多くの人から憎惡の的に目ざされてゐる。而も自分

の儲けた金は、安達の儲けに比べれば、實に物の數でもないのである。

『今に見ろ、俺だつて』磯部はその度毎に心で唸つた。

かうして長らく市場が閉ざされてゐる間に、憎悪、怨恨、嫉妬、没落、歡喜、あらゆる悲劇や喜劇があちらでもこちらでも行はれてゐたのであつたが、大きな齒車はそれ等のどれをも平然と運びながらゆる／＼と同轉して、漸く市場が開かれる日がやつて來た。

久し振で、取引所の中から、開市の鈴が朝の町に向つて鳴り渡つた。その日はどこの仲買店で、早くから店員が揃つて、この物凄い狂亂の行はれるのを、片唾をのんで待ち構へてゐた。長い間、暗く閉め切られてゐた取引所の構内には、その日も矢つ張り、朝方の長閑な光りが、硝子越に射し込んで、水を打つた夕、キの上も、清々しく輝いて、人待顔の姿であつたが、そこに入つて來る人々の顔には、一樣に凄惨の氣が溢れてゐた。いつもは冗談好きなこの町の人達も、その朝は笑ひ顔一つ見せるでもなく、黙々として立會場を指して急いで行く。小僧達も何かに氣壓されたように、口笛も吹かずに靜肅に立つてゐた。

場臺の上に並んだ、取引所の役員達も恐ろしく嚴肅な顔をしてゐた。參觀席の方を見ると、人

數はげつそり減つてゐた。或者はもう没落して、再び姿を見せる事が出來なくなつてしまつたのだらうし、或者はその凄惨な光景を見るに忍びなかつたのであらう。市場の中の立會前の光景は丁度裁判の宣告を待つ時のような有様だつた。

場臺の上で鈴が鳴つた。理事長がそこに姿を現したのである。理事長は立會前に、

——この度不時の事から立會停止するの餘儀なきに到つたことを述べ、それ以後全力を盡して市場開始の日の一日も速になるよう努力したが、不肖無力のために斯くも時日の遅れた事は申譯ない次第だ、と陳謝し、尙、今後の取引は出來るだけ靜穩にして貰ひたいと希望して、再び鈴を鳴らして退いた。

場臺の上で久々で柝が鳴つた。萬人の豫期した通り、相場は凄じく崩れて行つた。然もそれは山八が賣崩した時とは違つて、靜かに暗澹として崩落する。どの株もどの株も、立會の度毎に、凄じい勢ひで崩れて行く。それは確かに、買屋に對する、最後の恐ろしい宣告だつた。

たゞ然し、この宣告の與えられる日に、第一の動機を作つた山八の姿が立會場の中に見えなかつたのは、遺憾なようにも思はれるが、彼はその前日、自分の賣玉に對する利喰の方法は、仲間

うして鈴子さんは私達にも何か怒つてゐらつしやるんでせうか、ほんとうに、お見舞にも行かなくつてよくつて」自殺と云ふ言葉を聞いたとき茂は、
『えつ』と驚きの聲をあげたが、それつきり彼は最後まで黙つて聞いてゐた。房子の言葉が切れると、

『あゝさうか、好いよ好いよ、行かなくつても好いんだよ、そのわけはね、僕が歸つてからよく話をする。あゝ行かない方が却つて好いのだ』茂は自分も驚きの餘りふるえ勝になる聲を強てしづめようと努めながら、それだけ答へた。

『ほんとに好いの、あたしどうしたら好いんだかちつとも判らないんですものね、それでは兄さんなるだけ早く歸つて頂戴ね』と云つて房子は電話を切つた。

——とうとうやつてしまつたのだ——と茂は思はず心に叫んだ。鈴子の父親は、今朝まで苦痛を堪えて最後の宣告を聞かされるのを待つてゐたのだ。さうして、とても恢復の見込みのないこの相場を耳にして、かへつて心安く死んで行つたのかも知れないのだ。それにしても鈴子は、すぐにそれを房子を通じて知らせてよこす、その手段の冷酷さ皮肉さ、恐らく彼女は、滅れるも

のが岸にゐる人に向つて救ひの聲を上げたのに、冷然として見向きもしない爲に、恨みを呑んで激流に巻き込まれて行く人と同じい怨恨を、胸の底深く秘めてゐるにちがひない。茂はそんな風にも考へた。

電話が切れるとすぐにそのまゝ兩手で頭を深くかゝへて、デスクの上に突つ伏しながら、またいやな想念におそはれてゐる時に、

『茂、房子から電話がかゝつて來たのは何の用か』父の磯部が向ふの椅子に腰を下したまゝ、聲をかけた。

『電話ですか』茂は首を上げて四邊を一寸見廻したが、隣には帳場の服部が、その向ふには若い帳簿方が坐つてゐるので、彼は仕方なしに、ふら／＼と立上つて、父のそばまで歩いて行つた。そして前の机に手をつきながら顔をふせて、

『先達て、あなたにお頼みした池田さんのお父さんが、今朝自殺をしたつて知らせて來たのです』あたりに聞えないような低い聲でさゝやいた。

『ふゝんそんなことか、死ぬ奴は死ぬが好いさ、俺も負れば死なゝいとも限らなかつた』

磯部は葉巻の煙を吐きながら、依然として冷やかに言ひ放つた。

『然し救えるものなら救つた方がよかつたですね』と茂が言つたとき、

『鐘紡密附二百五十六え——ん』

と小僧の聲が店の中に勇ましく響いた、百五十圓に近い暴落である。それを聞くと磯部は、

『ふん』と笑つて『そんなことはもうどうでも好い、今日は俺には非常に大切な日なのだから』と云つて横を向いた。

『さうですか、あなたがお聞きになつたから』

茂は呪はしげな眼差して、父を睨んで自分の席に返つて行つた。

人々の恨みにも喜びにも關りなく、相場は午過ぎになつても凄じい暴落を續けて行つた。主力株の二百圓に近い崩落から、小さな雑株に到るまで二十圓三十圓と、雜倒すように崩れて行つた。買方はもう全く反抗する勇氣もなく、賣方の下煽りに煽るにまかせて投げ出すよりほかに道はなかつた。市場監督も、亂手を制御する力を持つてゐなかつた。場臺の中も參觀席もたゞ陰氣にしみつぽく、じつと慘落の成行を見つめてゐるばかりだつた。

夕方になつて漸く、買方に對する弔鐘は鳴りやんだ。斯うしてこの四五年間、世界大戦のもたらした好景氣に連れながら、徐々に高値に運んで來た株の値段は、僅か十日に足らない日數の中に、半値に近く叩き落されてしまつたのだ。仆れるべきものはかうして仆れ、僅かな幸運の人々が、勝を占めて、この凄惨な第一戦はけりがついた。もし人の眼で見る事の出來ない場の中の、無形の戦場の跡を見る事の出來るものがあつたら、そこにはどんなに無数の死屍が、横たはり、血は流れ、齒を喰ひしぼつて無念の形相をしたものゝ姿のそばに、哀れな遺族達の泣き叫んでゐる光景に顔を反けなければならなかつた事であらう。

晩春の夕暮もこゝばかりは凄じく暮れて行つて、取引所の鐵の扉は、冷やかに閉された。

多くの店が、濕つぽいいら／＼した空氣の底に沈んでゐる中に、磯部の店ばかりは、靜かな中にもどこか力のこもつた活氣が一杯に溢れてゐた。首に大きな蓋口をかけた才取は忙しさに注文取に出入する。電話の鈴は絶えず鳴つて今日の取引状態を聞き合せにかゝつて來る。勝つ者が正しく、敗れた者が悪いと云ふ、この町の露骨な原則が、明かな形となつて、ここにももう現れはじめてゐた。

磯部は自分の机によりかゝつて小さな覺え書の帳面と引き合せながら、今日の決戦の收穫を熱心に調べてゐる所へ、濱口老人が、ひよつくりと入つて來た。大柄な背の高い、子供のような顔をした人であつた。この老人はこの店へでも無遠慮に入つて行つて、無遠慮な口をきく。それは二十年ばかり前に、兜明でも米屋町でも、濱口將軍と謳はれたその前身に對して人々が、強ひて寛大な態度に出てるためでもあつたが、この老人にもまた無邪氣な人を引きつける何かあつた。磯部の店の者達もこの老人がやつて來ると、固苦しく引きしまつた店の空氣が幾分でも緩和されるので、いつも老人の來るのを歓迎した。

老人は店に入つてくるとすぐに、

『どうですな磯部さん、えらい相場をやりをつたではありませんか』と磯部のそばに近づいて云つた。

『やあ濱口さん』磯部も帳面から眼を離して『ひどい相場でしたが、あなたの方は如何です』と愛想笑ひをしながら訊ねた。

『如何ですにも何にも、肝腎の兵糧がないので手も足も出せなかつたお蔭でね、わしはまあ怪我

なしと云ふ所でした。然しいつまでもかうして遊んでもをられんから、近い中に一枚屋と云ふのを初めようと思ふてな』

『はゝあ、一枚屋』と磯部は解し難い顔をした。

『一枚屋と云ふのは、その何ぢや、つまり一圓から張らせるのぢや、證據金一圓、その中八十錢逆に引かされゝばわしのもの、一圓二十錢向ふに動けば取られる、と云ふような仕かけでな、小僧でも魚屋でも床屋でも八百屋でもお客にせうと思つてをりますのぢや、はゝゝ妙案でせう』老人の突拍子もない話に店の者がみんな笑ひ出したときに、茂はそつと立ち上つて、隅の方にゐた保阪を呼んで何か囁くと、保阪はすぐにうなづいて表てに出た。それに續いて、間もなく茂も店から姿を消した。

九

それから一時間ほどたつて、保阪と茂は、神樂坂の上の待合の一室で、卓子をはさんで向き合

つて坐つてゐた。その部屋からは、すぐ下の町々から、遠く飯田河岸の方まで見晴しの好い場所だつた。晩春の日はいま漸く暮れたばかりで、町の上にも、河岸べりの電柱にも、薄暗の中に電燈がうるんだ光りを放ちはじめた。然し茂はその部屋に入つて来たとき、珍しさうに四邊をひよつと見廻しただけで、どかりと腰を下すと、げつそりと首垂れてしまつてゐた。保阪はそれに引きかえて、浮々した顔をして、

『ほんとは、代地か濱町へでも行くと好いと思つたんですけれどね、また變なところで大將に出つくはすといけないと思つてこゝへ来たんです。今度は一つもつと洒落たところへ御案内しませう。然しこゝにも中々面白い女がゐますぜ』と笑ひながら布團の上に安坐をかくと、

『へえさうですかねえ、とうとう死にましたか、氣の毒つて云やア氣の毒みたいなんです、ただどみんなお互に獨木橋をどつこいどつこいしながら歩いてゐるような商賣だから、いつ誰がどうなるか判りませんや』仔細らしい顔をして、顚を突き出してにたりと笑つた。

『僕がバカだつたのさ。向ふで五萬圓なけりやどんな事になるか判らないつて云ふところへ、僅かばかりの金を持つてのこゝ出かけて行つたものだから、却て恨みを買つてしまつて、見舞に

も弔みにも来てくれなくつても好いなんて云はれてしまつた。つまらない話しさ』と茂は吐き出すような調子で云つたが『考へて見ると無理もないような氣もするし、判らないようなところもあるんだ。然し何しろ、どうせ親父の金を盗むなら、うんと盗んだつて同じだつたんだがな、結局僕がけち臭いのがいけなかつたんだ。それでなければ、いつそ金なんか持つて行かない方が好かつた』

『はゝゝそれだからいけないんですよ、お前さんなんか、まだ考へ方が甘いんですからね、その鈴子さんて女なんか、そりやきつと、中々もんですぜ、あつしなんか何しろ、餓鬼のときからあの島で叩き上げた人間ですからね、そんな事にやびくともしませんや』と保阪が話しかけたときに、女中が茶道具を持つて入つて来ると、

『そんなものはどうでも好いや、早くお酒を持つて来て、それから御馳走もうんと頼む。女中、女は飛切りつてえのを何でも構はないや、附けるで呼んで呉れ』と快活に笑つたが、

『あゝ、さう、これは家の若大將だ、大切にしてくれなけりやいけねえぜ』と茂を指した。
『あらさう、どうも失禮致しました』女中が改まつて挨拶したので、

『いや』と茂は顔を赤くしてもぢくしてゐるのを、保阪は構はずに、

『ねえ、ほんとですぜ茂さん、あつしなんか何でさ、お前さんの年頃にや、日本中を半分位股にかけて歩いてゐたもんでさ、最初はお前さん、十九の年に損てしまつて、抜き差しが出来ないよな足を出して、仕方がないから、信州松本へのつづけたんでさ。そこでお前さん、宿屋にうんと陣取つて、東京から来た仲買の出張員で、こんどこつちへ店を出すつもりだつて法螺を吹いてね、まづ最初は、當分宿屋を事務所にしてお客を受けるつて出掛けたもんです、ええそりや東京にも相棒があるから、電報で相場を通して来る奴を、どん／＼注文を受けたんです。大きな鞆を抱えこんでゐたけれど、それが何でさ、中はみんな、新聞紙を紙幣みたいに切つた奴が入つてゐるんでさ。面白うがしたぜ。何しろその時分の田舎は、今ほどすれてゐませんでしたからね』と云つて、彼はまた『あはゝ』と愉快らしく哄笑した。

女中の運んで来た酒を、自分もぐつと呻りながら、

『どうです、二三杯ぐつとおやんなさい、酒が廻つて来れば氣が晴れますよ、お前さんなんか、大體餘り固苦し過ぎるからこんな時に變てこに萎れてしまふんでさ、ねえ、本當ですぜ、いつで

もつまらない本ばかり讀んだり、ロクでもないへぼ書生を相手にして變な議論ばかりしてゐるから、そんなに氣が弱くなつてしまふんでさ。人間なんて、くよく／＼考へたつて何になるもんでさ、酒でも飲んで女でもこさへて、氣を大きくさへ持つてゐりや世の中だつてそんなに詰らないもんぢやありませんよ。現にあつしなんか、その時もお前さん、信州松本でさうやつて、空相場の注文を受けて、胴取りをやつてゐたけど、大體が資本がない所へ、こつちは毎晩そこいら中泳ぎ廻つてゐるものだから、その中にそこでもだん／＼足が出て、やり切れなくなつてから、靴をかついで、逃げ出したんでさ、それから今度は越後路へのして行つたんです。越後は越後の長岡でね、そこで宿屋へ泊り込んでる中に、とう／＼その後家さんと喰つついて、その女から三千兩ばかり絞り上げたんです。それでお前さん、土地の新聞記者を招待しましてね、そこでまた、東京の出張店を開くつてえことになつたんです。そりや一時は中々信用のあつたもんでしたぜ』保阪がやつと息をついて前の盃をぐつと乾したとき、

『その話はもう何度も聞いてよく知つてるよ』

茂は傍に銚子を持つて酌をしてゐる、女中の方をきまり悪げに顧みながら遮つた。

『ほんとに、保さんのお話はいつもね』女中も堪りかねたように笑ひ出したとき、

『はよこれあいけねえ、あつしは自分のことをべら／＼喋舌るのがいけない癖でね、おまけにそれが一つだつて好いことはないんでさ、だもんだから、いつかなんか女按摩に揉んで貰ひながらそばにゐた人に話をしてるとね、按摩さんとう／＼がた／＼慄え出しやがつて、あとで、あんな恐い人の療治はこり／＼だつて云つたさうですよ』保阪は自分でも堪らないように笑つたが『そいつはまだ好かつただけど、その次にや何ですよ、あつしに使つてくれつて言つて来た奴があつて、半月ばかりあつしの下に働いてゐたんですがね、あつしがこんな調子で一杯やるとはべら／＼喋舌つてゐた所が、そいつがお前さん、警視廳の刑事の廻しもんでね、一寸來いを喰つて行つて見ると、洗ひさらひ種が上つてゐたにや驚きましたね』と彼はまた一層大きな聲を上げて笑ひ出した。

『ほんとにこちらのお話はね、誰だつて初めの中は驚きますわ』女中は茂を顧みて取り做し顔に云つた。

『驚きたい人間は、驚いたら好いぢやないか』

保阪は『ふん』と笑つたが、

『だけど本當にあつしは、悪いことをするならうんと悪いことをしてやれとさう思つてゐるんです。兜町の人間なんか御覽なさい。どんなに智慧があつて利口だつて、曲つた日にや、鼻も引つかける奴はありませんや。その代り、馬鹿でもちよんでも當りさへすりや仲買の旦那でそつくり反つて歩いてるんでさ。そりや何も兜町に限つたことはないけど、随分悪いことをした奴が大きな面をして歩いてゐるぢやありませんか。だから相場は當り外れがあつて思ふようにいかにいけど、悪いことは自分の量見一つでいくらでも出来るんでさ。ねえさうでせう、せめてさうでも思はなきや癩にさわつて堪らないんでさ。下らねえ奴が、大將面して威張つて歩いてるのを見ると、何かやつて見たくなつて來るんです』

『そりや、あつしだつて、何にも知らない初心な人間を欺したり、變にいつ迄もどつかしらんにこびりついてゐるような悪い事をした事を思ひ出すと、濕っぽい氣持になることもありませあ、けれども、そんな事をいくら考へたつて何にもなりやしませんからね。だからまあ、酒でも飲んで女にでもからかつて忘れるつてえことにしてゐるんですけど、何でさ、手前も悪い事をしてゐ

る癖に、妙にえらさうな面をした奴をやつつけた時は、そりや本當に胸がすつとしまさ。どうせお前さん、相場をする人間なんて、お互に慾の皮が突つ張つてゐるんですからね」保阪が愉快さうに笑つたとき、茂はこの間の朝、父の部屋で保阪が大聲で怒鳴つてゐたことを、ふと思ひ出した。

「こんばんは、ねえさんこちら」若々しい聲が障子のそとに聞えると、

「あゝ桃吉さんね、こちらですよ」女中がすぐにそれに答へた。

「ごめんください」障子が靜かにすつと開くと、ぱつちりとした眼の品の好い十七八の女の顔がそこに現れて、両手をついてお辭儀をした。高島田に結つた髷の艶が、電燈の光を受けて青瑩の上に黒く光つた。

「いよう、お嬢さんの御入來だ」保阪がわざと頓狂な聲を上げると、

「あらいやだ」女は笑ひながらしとやかに、二人のそばに近づいて來た。

「さあ漸く少し息がぬけるぞ」保阪はまた愉快に笑つたが、それをきつかけにしたように八九人の若い女が、次ぎ次ぎにその部屋に流れ込んで來た。保阪一人で漸く陰氣な濕つぽさを防いでゐ

た部屋の中に、俄に甲高い艶いた聲が湧き上つて、陽氣に賑やかになつて來た。

さつきから呑めない酒を無理に四五杯乾した茂は、もう眼の前がぐる／＼廻る程酔つてゐた。

若い女の肌の香りがむつと彼の鼻を襲つた。とり／＼の強い色彩が、くら／＼とした眼の前に渦を巻いてゐる。彼の若い血はそれだけでも湧き立つのに充分であつたけれど、朦朧と酔つた頭の底を、時々意地悪く針の先で突くように、鈴子の顔がちらりと浮んだ。茂はその度毎に、はつとして我に返つた。今はあの一家の人々が、涙と憂ひの底に浸つて、嘆きに沈んでゐる時なのだ。冷たい色をたゝえた底に、怒りと恨みを深く隠してゐる鈴子の眼が、灼き付くように頭の上にはつきり浮んだ。漸く酔つて顔を上げた茂は、またげつそりと首垂れた。

「おい、隊長の婆さん」保阪は自分のそばに座つた、二十五六のメ吉と云ふ藝者を顧みた。

「あら、婆さんではないでせう、まだあなた」

とメ吉が笑ひかけると、

「好いやな婆さんで、廻りが年若で一番年寄りなら婆さんてことに決つてるんだ。何でも好いや今夜は君が總大將で一つうんと騒いでくれ、樂屋落の話だのこそ／＼話をした奴は皆な罰金と云

ふ事にしてな」と彼は眼玉を一つぐりりと動かした。メ吉は心得たと云ふ風にそれに答へた。
『茂さん、どうですうんとお酔ひなさいま、ほんとに酔つばらはなきや駄目ですぜ、何にも恐
え事はありませんや、さ、一つ献じませう』

茂の前に盃を突き出した。

『僕はもう苦しいんだ』茂は全く苦しうに答へたが、彼も自分を襲つてくる妄念を追拂ひたく
なつて来た。

『何でも好い、呑んだらきつと忘れられる』

ぼんやりした頭にそんな事を考へながら、さゝれた盃を苦しうにぐつと乾した。

メ吉が弾き始めた三味線の音につれて、五挺の撥は調子を揃へて座敷の中に高く響いた。お酌
も立つて踊りはじめた。長い袂が翻へり、裳が赤くひらめいた。

『さうだ、さうだ、しつかりやつてくれ』保阪は大声で景氣をつけてから、

『ねえ茂さん、お前さんもちつとお浮れなさい』と顔をよせて聲をひそめた。

然し茂の顔色はもう蒼ざめて、胸はむか／＼と苦しくなつてゐた。そればかりでなく、彼の頭

の中は、何かの機械で半分に断ち割られたように、判然と二つに分れてゐた。陽氣な三味線の音
も耳に響いた。奇麗なお酌が向ふに並んで、調子をそろへて踊つてゐるのも、美しく彼の眼に映
つて来た。けれどもそれは自分の世界とまるで別事であるように、音色と姿が傳はつて来るだけ
である。茂の頭の奥の方は、矢つ張り憂愁な物思ひにとざされてゐる。何と云つて形ははつきり
判らないが、恐ろしく重たい物が、頭の奥に塊まつてゐる。茂の心が向ふの方に引かれかゝる
と、その暗い塊まりは意地悪く後へぐつと引き戻す。茂はまだ、それを一つものに纏めるほど、
酒に酔える事知らなかつた。

どきん、と何か頭へ突き上げて来たと思ふと、茂はくらく／＼として、そこに倒れた。

『苦しいんですか茂さん』保阪の聲が耳元に聞えると、どこか遠くで、三味線の音につれて、お
酌が黄色い聲で何か云つたのが響いて来た。

彼はどうかして立ち上らうとものがきながら、

『歸らう、歸らう』と二度ほど叫んだ。

『大丈夫ですよ、ゆつくりしておいでなさい。第一こんなべろべろに酔つ拂つて歸つたらなほ

變でさ。それに何ですよ、今夜あ大將なんか、きつとどつかで凱旋祝ひをやつてゐまさ、家へなんか歸るもんですか。お嬢さんの方へはあつしがちやんと電話をかけとくから、安心して静かに休んでおいでなさい。今床を敷かせますから」保阪は低い聲でさゝやいた。

「は、親父、親父がなんだ」茂は自分の恐怖心に、打勝たうと努めるように低く叫んだ。

彼はそれつきり何も判らなくなつてしまつた。

翌朝、茂が起き出して保阪と顔を合せた時は、その顔色は蒼ざめて、ぶん／＼怒つた風をしてロクに口も利かなかつた。

『どうです、御飯でも喰へて行きませうか』

保阪は底の方に笑を湛えながら強て眞面目に茂に訊ねた。

『いやだ、胸が悪いもの』つゝけんどんにそれに答へた。——自分に三千圓も持つて行けば大丈夫だ——と云つたのもこの男だ。——どこかへ氣晴しに行かう——と云つたらこの待合に連れて來たのもこの男だ。

——さうして昨夜夜中に眼がさめたとき——

待合を出てから二人はわざと、朝風に吹かれながら、濠端をあるいてゐる時にも茂は考へてゐた。

派手な艶かしい布團の中に眠つてゐる自分を見出したとき、茂は驚いて四邊を見廻した。電燈には緑の覆ひがかけてあつて、部屋の中にはいやに官能をそゝるような香の匂が籠つてゐた。

『お目覚めになりましたの、お苦しいでせう』枕元に坐つてゐた、桃吉に聲をかけられたとき、茂は驚いて枕を上げた。茂も兜町で育つてゐただけに、経験はなくともさう云ふ智識は持つてゐた。

『有難う、もうよつほど好いが、いま何時ごろ』

『さあ、もう一時半頃になりましたらう』桃吉はあでやかに首をかしげて答へた。なるほどもう餘程遅いらしく、家の中は森閑と静まつてゐた。悔恨と恐怖に似た寂しい感じが、茂の胸を靜かにそゝつた。

『お苦しいんでせう。お手拭を替へませう。それからこれをあがるとおきによくなりますつて』と鏡劑を二つ取つて、コップを口に寄せてくれた。茂は黙つてそれを呑んだ。女は優しく、額に

あてた手拭を冷たくしてかへてくれた。早く死んだ母親に、子供のとき病気の世話をした貰った追憶が、茂の心を優しく撫でた。

『君はどうしてまだ歸らないの』茂はわざと女に訊いた。

『だつて』と云つて女は笑つて俯向いたが、顔色が少し赤くなつたように茂には思はれた。

それつきり二人はじつと黙つてゐた。然し茂は自分の胸の鼓動がだん／＼に高まつて行くのを自分にもはつきりと感じてゐた。それだけに彼は一層かたく唇を結んで眼をつぶつてゐた。

少時たつて女は、

『夜中になると、やつぱり随分冷えますわね』と肩をすぼめた。茂には何とも云ふ事が出来なかつた。

『ほんとに寒くなつて来ましたのね、失禮ですけど、おそばで少し』と云ひかけて『餘り遅くなつて歸るのも何だか變ですもの』と云ひわけのようにつけ足した。

茂は黙つてうなづいた。

部屋の隅で、女が帯を解く音がさやく／＼と聞えて來たとき、茂は一寸眼を開けてその方をちら

りと眺めた。

『ごめんください』靜かに女が搔卷を上げたとき、茂は思ひ切つて眼を開けた。緑の覆ひをした電氣の光が、女の顔を一層品よくあでやかに彼に見せた。女はきまり悪さうに、にこりと笑つて隅の方に横になつた。若い女の體温がいつとなく茂の身體に傳はつて、肌の匂が眠れない鼻をおそつた。

『あーあつ』少時たつて茂が苦しさうに息をついたとき、

『お苦しいんですか』女がまた靜かに訊いた。然しその聲は幾分か慄えを帯びてゐるように茂には思はれた。

彼は黙つて顔を横にふつた。それつきり二人は黙つてゐた。

濠端を歩きながら、茂はその時の事をまた新らしく思ひ出してゐた。自分に對する悔恨に似た感情が新らしく胸を突いた。

今朝起きてからも、女とは口もきかなかつた。

茂にはそれが何となく残り惜くも思はれた。

——みんな此奴が悪いのだ、鈴子さんを怒らせたのも、昨夜あんな事になつてしまつたのも——彼は自分のそばを如何にも呑氣らしい顔をして歩いてゐる、保阪の姿を睨めながら、強ひて憎むように考へだが、保阪は平然たる顔をして、

『どうでした、昨夜の女は、あれは何でもまだ生娘も同じだつて云ふ評判ですぜ、何しろあすこの藝妓屋の本當の娘なんですからね』

と云つて、『へ』と卑しい笑を顔に浮べた。

茂は苦しい顔をして黙つてゐた。

『大變黙つてゐますね、まだ氣持でも悪いんですか』少時たつと、保阪はまたなぶるような調子で訊ねた。

『黙つてくれればそれで好いんだ。僕は今朝、君みたいな人間と話なんかしたくないんだ。鈴子さんの家のことで、相談しようと思つたら、あんなところへ連れてつて、酔つばらはせたな君ぢやないか、最初のときだつて、あの女を妾にでもさせるような調子で考へたものだから、こんなことになつてしまつたんだ。僕は今朝は氣持が悪い』茂は強て自分の感情を誇張して云つたの

を自分でも知つてゐた。

『へ、まあよござんさ、あなたが金を持つてつたつて死ぬ奴は死ぬんでさ。昨夜のこつたつて、今に怒らないやうになりますよ』

保阪はけろりとした顔をしてそれに答へた。

+

茂が店に歸つたときは、店員もまだ出揃はないほど早かつた。彼は黙つて金庫の前に腰を下してぼんやりと四邊を見廻してゐた。店の中はもう奇麗に掃除が済んでゐる。堅氣の店とも會社とも違つた派手な空氣が、朝の中は殊に色濃くそこに漂つてゐた。向ふの椅子に腰を下して笑つてゐる、場立の顔にも、若い帳付にも手合取にも何か昨夜の思ひ出が漂つてゐるようだつた。どこかの隅つこをせゝつても、バクチと色氣でかためられてゐる場所である。それが今朝の茂の心を幾分か軽くゆるめてくれた。

骨の髄までしみ渡るような氣怠さに、強て反抗するでもなく、茂は机の上についた両手で顔を
押えて、甘酸い憂鬱な想ひに沈んでゐた。とそのとき、

『茂さん、出てますぞ』保阪の聲に手を放すと、彼は例の通りにやりと笑つて新聞を茂の前に押
しやつた。茂はそれを取り上げると、そこには、

『前××會社取締役の毒藥自殺』

と可なり大きな見出しがあつて、傍に『株式暴落の生んだ悲劇』

と云ふ小見出しがそへてあつた。

茂は食むように読み始めた。

前××會社の重役、池田忍氏は一二ヶ月以前から病床の人となつてゐたが、昨朝十時家人の
隙をうかゞつて、秘密に藏しおいたる砒素を仰いで自殺した。家人もその原因については深く知
らないと云つてゐるが、何でも今回の株式暴落の爲に大打撃を負ひ、數十萬の負債あるのみか、
裏面には、小切手詐欺、その他背任等の犯罪もあつたらしく傳へられてゐる。氏は會社在任中は
冷靜着實な紳士として相當の信望もあつた人であるのに、今に及んでこの事あるは、一に戦時中

より引續いて勃興した投機熱の生んだ一現象とも見られるし、また今回の株式暴落の生んだ犠
者として顯著なるものであらう——と云ふような事が、可なり巨細に書いてあつた。

茂は読み終ると、ほつと太息をついて首垂れた。

『どうです茂さん、矢張り五つ位ぢや間に合はなかつたのかも知れませんが』保阪は低い聲で云
つた。

『然し新聞の記事が必ず正確とも云へないぢやないか』茂は負惜みらしく云つた。

九時近くなると、父の磯部も店に來たが、保阪の豫想した通り、磯部も昨夜は家に歸らないら
しく、ちらりと茂の方を一瞥したまゝで奥の椅子に腰を下して新聞を讀んでゐた。店の者もその
記事は見てゐたらしかつたが、立會前の縁起を嫌つてか、誰もがそれにはふれなかつた。

やがて立會の鈴が鳴つた。大きな機關は、微細な犠牲者の有無などには頓着なく回轉される。
人々はまた涯しない慾望に驅られて、危険な深淵のふちをあえぎながら走り始めた。

九天の高さから、千仞の谷底に一氣に轉落した相場は、當然の反動を演出した。凡てが磯部の
豫想通りに行つたのだ。彼は昨日の安値を以て、客筋の玉は整理した報告を出させて了つた。そ

れはみんな、彼の懐に、一擧にして轉げ込んだ莫大な利得である。奥の椅子に冷然ともたれながら、池田の死も、客筋の損害もまるで彼にはかまはりはなく、彼はたゞ彼の腕一つで戦場にぞんでゐるように、冷やかに小さな帳面を絶えず繰り返して眺めてゐた。

茂は終日、頭の心がしくしく痛むのを、じつと堪へて、金庫の前に坐つてゐた。然し、幸ひにもその日は早く立會が進行した。相場は可なり烈しく動いたが、結局それは小さな揺り返しに過ぎなかつた。珍らしく三時頃に立會が終ると、店員も外交員も、店に歸つて自分の椅子にぐたりともたれて、太い息をほつとついた。それは丁度休戦の通知を受けた兵士たちが塹壕の中でこりと仰向けに轉がつたと云ふ風でもあつた。

その時分になつて池田の死は、漸く人の口の上つて來た。磯部の椅子の周囲にも濱口老人や黒田と云ふ生拔きの相場師が集まつて、今後の形勢について熱心に論じてゐたが、話が池田のことになると、

『どうせお前さん、損して死ぬような人間は生きてゐたつてしやうがありませんや』黒田は事もなげに言ひ放つた。

『は、死ぬ者貧乏と云つてな』磯部は茂から聞いた話などは忘れたように冷たく云つた。

『そりやどうせ、死ぬ者だつて出て來ませう。何しろこれだけの大相場でしたから』帳場の服部が仔細らしく口をはさんだ。

『全くさ、伊藤さんが殺されたのはわけが違はあね、どつち道、大勢に關係のある話ぢやないからな』外交員の鳥居が云つた。

『そりやさうだ、明日の相場に關係のある話ぢやない』齋藤は落付き拂つて金口の煙をぶつと吹いた。

自分の心をあれほどに惱ませて、今もなほ苦しんでゐる池田の死も、こゝでは相場の材料ほどにも話の種にさへならないのを考へると、茂の心は一層暗くなつて來た。あの家ではいまだどんなに苦しい悲歎に暮れ、鈴子も母親も没落の深淵の前でおのゝいてゐる事か、而かも自分は、それを慰める事さへ出來ないのだ。いやそれ所か、昨夜の自分は、——彼はそれを考へると、錐でさゝれるような痛みと、いやな矛盾を心に感じた。

場が早く退けたのを幸ひに、

『今日は一寸用がありますから』と父に断つて、ぶらりと先に店を出た。然し茂の足は中々早く電車の方へは進まなかつた。いつも歸る道を逆に取りつて、楓河岸の方へぶら／＼歩き出すと、

『茂さん、あなた、どちらへ歸るんです』黙つてあとをつけて來たらしい保阪が後から聲をかけた。茂はいやな顔をして後を振り向きながら、

『何だつてまた來たんだい、今日は一緒に來てくれつて頼みやしないぢやないか』つゝけんどんな調子で言つた。

『だつて何ですぜ、あつしが行かなきゃ、電話のバツが合はないぢやありませんか』保阪はにたりと笑つて言つた。

茂は仕方がなしに不機嫌な顔をして、先に立つて黙つて歩いた。京橋の通りまで出たときに、『ねえ茂さん、あすこのカフェーでビールを一杯飲んで行きましょう。餘り早く歸つたらかへつて變でさ』とさつさと先に立つて歩きはじめた。茂はもうそれに逆らう氣力もなくなつて、意氣地なくそのあとに従つた。

カフェーの中には夕陽の光が薄明るく射し込んでゐた。エプロンをかけた若い女が、向ふの方

に並んでゐた。

『あれだつて何ですぜ、話次第でどうにでもなるんです』保阪は女の置いたビールをぐつと仰ぎながら低い聲でさゝやいた。茂は黙つてそれには答へなかつたが、彼も少しづつ飲んだビールが身體に廻つて昨夜の酔を呼び出と、強て顔を背向けてゐた桃吉の面影が、意地悪く浮んで來た。

『早く行かう』茂はわざと怒つた風をしてそこを出た。そして自分の家に歸つたとき、玄關わきの應接室からたゞならない怒鳴り聲の聞えて來るのを聞いて、彼は思はず、そこにじつと立つた。

日はもう薄暗く暮れかけてゐた。いつも茂が歸る頃には、暗く閉されてゐる、玄關の左手の洋風の應接室に、今夜は珍らしく明りがついて、曇り硝子を通した淡い光が、前の植込の木々の葉を青々と照し出してゐた。

『誰だらう今時分』茂は自分の心に問ひながら、玄關に近づくと、その室からは何か罵り合ふような大聲が響いて來た。

『變だね』茂は保阪を顧みた。

『さあ、何かやつて來てるのかも知れませんが、裏口へ行きませう』保阪は先に立つて、小僧や女中の出入する裏口の方へ廻つて行つた。

茂の顔を見るとおしまはすぐに『若旦那さま、あのいま』とあはてゝ手を振りながら、奥へ房子を呼びに行つた。房子はすぐに顔色を變へて飛んで來た。

『あら兄さん、あゝよかつた。大變よ、いま變な人が來てね、あたしどうしやうかと思つてゐたの』

『變な人つてどんな人が』

『あのね、池田さんの親類だつて若い人が來てね、どうしてもお父さんに逢つて訊かなければならない事があるつて、いくら留守だつて斷つても、待つてるつて、どんとん上つて來るんですもの』

『ふうん、その人一人でかい』

『いゝえ、ほかにまだ二人、柄の悪い變な人がついてるの、それが何でも意地をつけるのよ、何だい、ゐないなつて待つてゐりや歸つて來るさ、なんてじろ〜睨めるんですもの、あたし

本當に恐くなつてしまつたわ』房子は唇の色まで變へて、おど〜と慄えてゐた。

『それでいまだうしてゐるんだ』

『あのね、さつき丁度杉中さんが、兄さんに逢ひたいつておいでになつたものだから、すぐ出て行つて下さつたの』

『よし、それならすぐに行かなくつちや』茂が玄關の方へ飛んで行かうとしたとき、

『お待ちなさい』と保阪が止めた。

『慌てる事はありませんよ、きつと何かぐづりにでも來やがつたんです。そうつと行つて覗いて見ませう』保阪は茂のあとについて、そつと玄關の方へ行つたときも、應接室の中から何か組打でもするような烈しい物音が起つて來た。

茂は馳け寄つて扉をさつと押しあけた。丁度一人の男が、卓子のわきに投倒されたところだつた。杉中は更に次の男と渡り合ふべく腰を据ゑて、猛然と飛び附かうとする瞬間だつた。

『おい待つてくれ』茂はすぐに聲をかけた。

倒れてゐた男はもう起上つて、黙つて茂に飛びつかうとした時に、

『よせ、豚謙』保阪は聲をかけながらその男の胸をついた。

思ひがけなく自分の名を呼ばれたので、その男がひるんだ際に、茂は、

『おい待つてくれ』と杉中の前に立ちふさがつて、相手の脛をきゅつと押えた。

『少し静かにしてくれ、家の者は誰れもゐないのに、君達は何しに來たんだか、僕がこゝの家の者だから、ちやんと話を聞かうぢやないか』さう云ひながら、茂はやつと四邊を見廻した。そのとき茂は向ふの隅に、まだ十七八位の青年が、蒼ざめた顔をして立つてゐるのを初めて見た。

『君ですか、池田さんの親戚の方と云ふのは』

彼が聲をかけたとき、

『えゝさうです。僕長森と云ふものですが』

と青年はふるふる聲でやつと答へた。

『ともかくどんな御用だか、僕がよく伺ひますから、あなたもそこへかけて下さい。君方もそんな亂暴なことをしないで、静かに話をしてくれ給へ』倒れた椅子のわきに佛頂面をして立つてゐる二人にも云つてから、

『遅くなつて、君に迷惑をかけて濟まなかつたね』と茂が杉中に挨拶した。

『いゝや、僕は別に』心持ち蒼ざめた顔はしてゐたが、杉中にはこりと笑つて後の椅子に腰を下した。

謙公と呼ばれた男は、保阪の方をちよろりと見て、間の悪さうににたりと笑つたが、倒れた椅子を引き起すと、呑氣らしく腰を下ろした。

人々が椅子につくと、誰もじつと顔を合せるのを避けるようにして、變に白ばつくれて黙つてゐた。

たゞ杉中と保阪ばかり、一人は悠々と煙草を吹かし、一人は茶目らしく四邊の光景を見廻してゐた。

『一體どう云ふ御用があつたのですか、またどんな理由でこんな騒ぎになつたんだか、僕は一應それを伺ひたいんですが』少時たつて茂がやつと口を切つた。

『えゝそれです。それに就て、僕はお話しなけりやならないんです』青年は思ひ切つたようにそれに答へた。『あゝお話しするのをまだ忘れてゐましたが、僕は池田の甥なんです。伯父があんな

ことになつた知らせがあつたので、驚いて駆けつけたのです。そして昨夜お通夜に集まつた人達に色々のことを聞きました。僕はまだ年が若いし何にも知らないからよくは判りませんが、みんなの話聞いてみると、何でも伯父が、こんどあんなことになつた原因を作つたのは、磯部さんだつて云ふんです。それで僕、口惜しくつて堪らなくなつてゐるのに、今日また伯母さんと姉さんの話を聞くと、姉さんはもう前に、どうか伯父さんの命を救つて下さいつて、あなたのところにお願ひに出たと云ふことでした。けれどもそれを背いて下さらなかつたばかりに、とうとうこんなことになつてしまつたと云つてゐました。僕はなほ口惜しくつて堪らなくなつて来て、どうかして一度磯部さんに逢つて、どうして僕の一人の伯父を自殺するような目に會はせたのか、聞きなくなつて来たんです。すると丁度その時、別の部屋に、この人達がゐて』と青年は、左右に坐つた二人の人を顧みた。二人の若い男は、するする眼をしばだゝいてふふんと笑つた。

『僕が這入つて行つたら、二人して、磯部の奴が、どうしても悪いのだ。あいつをやつゝけなければ駄目だ、駄目だつてしきりと云つてゐたんです。それで僕も非常に勇氣がついて僕の考へを話したところが、それなら自分達が磯部の家を知つてゐるから一緒に行つてやらうと云ふので、一

緒に来て貰つたのです』青年は何一つ隠すところもなく、無邪氣な態度で語りつゝけた。

『さうですか、それで父に逢つてどう云ふ事をお話しになるつもりだつたのです？』茂も優しく訊ね返した。

『だからです、だから僕はさつきも云つたように、僕の伯父が、それだけの金がなければ生きてゐられないような破目に陥つてゐるから助けてくれつて云つたとき、どうして助けてくれなかつたかそれを聞きに来たんです。一人の人間が死にさうだから救つてくれと云ふのにどうして助けられなかつたか、しかも伯父が失敗の原因は、磯部さんが作つたと云ふぢやありませんか。さうすれば、つまり人を河の中へ落しといて、溺れて行くのを平氣で見たのも同じです。それならそれで、僕にも相當の考へがあるのです』打沈んでゐた青年の眼の色は、その時になつて俄にきら／＼と輝き出した。

『だから、それが間違つてゐるつて、さつきから僕が説明したのだ』今まで眼をつぶつて何か考へてゐた杉中は、その時になつてはじめて口き出した。

『ねえ君、君の感情はちつとも汚れてゐない奇麗なものです。それからまた君の考へも全然間違

つてゐるとは僕は思はない。僕も同じような境遇にあつた事があるし、同じような事を考へた事がある。けれども長森君、君の伯父さんが失敗された原因を、磯部君のおとうさんが作つた、と云ふのは大部分間違ひだ。それはね、君にはまだ判らないかも知れないが、株式相場なんて云ふものは、磯部君のおとうさんが五人や十人かゝつたつて、どうにもかうにも出来るようなそんな小さなものぢやない。本當を云へば動くようにしか動かないものだ。けれども今度の相場でも、磯部さんや何かの背後に隠れて、奸策を弄して、自分の偉大な勢力を利用して、公共の機關を悪用したり何かして、崩落の速度を激しくして、首縊りの足を引つ張るやうな眞似をして、自分一人莫大な金を儲けた奴がある。然しそれは、磯部君のおとうさん位には出来ない事だ。磯部さんはたゞそのほんの一寸した前藝をつとめたゞけにしか過ぎないのだ。それは君の伯父さんに金を用立てなかつたのは悪いかも知れないが、然し、もしこの相場がもつと高くなつたら、或ひは地位が轉倒してゐたかも知れない。君には何だ、こんな車はまだ判らないかも知れないが、この連中にはよく判つてゐるわけだ。それを何だ、この若い善良な青年を煽てやがつて、はゝゝ俺の事を、雇壯士だの何だのと罵倒までしやがつて、怪しからん馬鹿者だ』杉中はまだ先刻の喧嘩の餘

憤をこらへかねたように二人を睨んだ。

『へゝ、何が怪しからねえんだバカ野郎、手前こそ頼まれもしねえのに、餘計な事をしやべりやがるから引つ込んでろつて言つたんだ。磯部が悪くねえ、ねえつて言ふけど、この相場を賣崩して、場を休ませやがつたな誰れなんだ。お蔭でこちとらはな、お客には足を出されるし、店はしくじるし上つたりだ。だから文句を云ひに来たつてえのが何が悪いんだ。バカ野郎めつ』長森の右側に坐つてゐた、小肥りに肉の締つた、鐵と云ふ男、杉中の顔を睨み返した。

『何つ、バカだ』杉中が再び立ち上ると、

『何だつ、俺のメリケンが喰ひてえのかつ』鐵も素早く立ち上つた。再び椅子はどつと倒れて、みんなは一時に立ち上つたが、保阪はすぐに鐵のそばへかけよつて、

『おいよせや、鐵公、野暮な眞似をしなくつたつて話は出来るぢやねえか』といきりたつてゐる鐵の腕を押へてから、

『杉中さん、お前さんも少し待つて下さ』
と杉中の方を顧みた。

『ほんとに君も待つてくれ、この人達の話は僕がするから』

と杉中をなだめながら、

『君達の話はちやんと判つてゐる。要するに商賣の邪魔をされて困つてゐるつて云ふんだろ、ねえ、それならそれで僕がいま話をつけるから静かにしてくれ給へ』と鐵に云つた。そして、彼はカクシを探つてゐたが、百圓紙幣を三枚出すとそれを保阪の手に渡して、

『これで歸つてくれつて云つてくれ給へ』と云つた。保阪はそれを一寸檢べると、

『こんなに何も』と思はず叫んだ。

『好いんだよ、今日は構はないんだ。その代り二度と来ないようによく云つてくれ給へ。事情がよく知つてゐるんだから来もしまいが』茂が平然と答へると、

『そんなこと、僕そんなことで来たんぢやないのです』と青年は顔色をかへて叫び出した。

『いや好いのです。好いんですよ、この人達が来たのはつまり君とは何にも關係のないことなんです。だからこの人達の用件と、君の話とは切り離しても差支へないと思つてしたんですけれどそれで好いでせう』

茂がそれを遮つたので、青年はやつと安心したらしく點頭いた。

『ぢやあおいこれを』保阪は茂から受け取つた金を、澁々鐵の手に渡して、

『ちやんとお禮を云つて歸んなよ、へ、うまくやりやがつたな』とせよら笑つた。

『さうか、濟まねえ』鐵は低い聲でつぶやくように言ひながら、保阪の顔をじろりと見て金を受け取つた。そして机の下でそつと數へてしまふと立ち上つて、

『どうも誠に濟みませんでした。あつしだつて何もこんなにお騒がせするつもりぢやなかつたんですけれど、どうもほんとうに』と茂に向つて頭を下げて、

『おい謙公、それぢや先へ御免蒙らう』とあごをしゃくつた。謙公は黙つてにや／＼笑ひながら立ち上つて、二つ三つ頭を下げると、さつさと扉を開けてそとに出た。

二人の姿が部屋から消えると、

『つまらねえ、バカ／＼しいこつた』保阪はまた、不平らしくつぶやいた。

『好いぢやないか、どつちしたつて同じこつた』茂がつまらなさうに答へると、

『だつてお前さん、あんな奴にあんなにやることはありませんや、まるで溝へ打捨つたようなも

んですぜ、それにあの鐵の野郎の恰好はどうです。まるで茶番の與三みたいだ。は、ぢやあお先へ御免蒙らうか、なんて、は、あつしやほんとに吹き出したくなつて來た位だ」保阪が大聲で笑ひ出すと、青年は顔を赤くして、

『全く濟みませんでしたね、僕、實際あゝ云ふ人と知らずに來たんですけれど、ほんとにどうも』と苦しうな表情をした。

『いやそれは構はないのです』茂がまたそれを遮つた。

『それで、君のお話もよく伺ひたいし、僕の考へもよくお話をしたいのですが、何しろ僕は今夜非常に疲れ切つてゐて、とてもその元氣がないのです。ですから大變勝手ですが二三日中にもう一度改めて來てくれませんか。委しくお話をすれば、君にもきつと何も彼もよく判ると思ふんですが、ねえ杉中君』茂は杉中を顧みた。

『それはそうさ。だからさつき僕も再三云つたのだが、何しろ皆んな非常に昂奮してゐるのでね、中々それがこの人にもよく判らなかつたのだ。全くこんどの事件と云ふものは、原因が實に複雑してゐるのだから、一朝一夕には判らないかも知れないが、決して單なる磯部とか、その

息子とかの力で起つたことではないことだけは、了解しておかないと、君が却つてあとで困りますよ』杉中も優しく云つた。

自分の周圍に起つた出來事が、餘り突然で思ひもかけないことばかりであつた爲か、青年はもうすつかりしよげてゐた。杉中の言葉を聞くと、

『えゝきつとさうに違ひありません。僕はまだ何しろ、何もよく判つてゐないんですから、考へ違ひをしてるかも知れないのです。磯部さんにも、あなたにも、色々御心配をかけて濟みませんでした。何れ近い中にまたお訪ねします』叮嚀に頭を下げて長森と云ふ青年は歸つて行つた。

『本當に君にはとんだ迷惑をかけて濟まなかつたね』長森を玄關まで送り出して歸つて來た茂はどつかりと椅子に腰を下しながら云つた。

『いや、僕はちつとも關はんさ。色々なことに會つた方が少くも退屈だけは免れるからね』杉中は快活に笑つたが、

『然し、あのさつきの二人はいやに圖々しく構へてゐたぞ、駄目なら駄目で、騒ぎ立てゝむしろ警察にでも引ッ張られた方が好いような態度だつた』と不思議らしく小首をかしげた。

『そりやきつと何ですよ、誰かに小遣ひでも貰つて來たに違ひありませんや。二人が警察へ引つ張られて、磯部の名前が新聞に出て、一層悪者にすれば、また一仕事出來ますからね』

保阪は凡てを呑み込んでゐるような顔をした。

『然しそれにしちやあの青年は純だつた』

『そりやお前さん、あんなのを玉に使ふんでは』

『どうでも好いちやないか』と茂はつまらなさうに口をはさんだ。

『何も彼も馬鹿げたことばかりなんだ。ねえ君、杉中君、親父が成金になつた爲に、倅がこんな苦しむなんて、こんなバカな話があるだらうか』と嘲るように笑つたが、

『まあ好い。こんな話はこれでよさう。さうして今夜はどつかへ行つて、君と大いに飲まうぢやないか、君は僕が酒を飲まないつて大いに残念がつてゐたが、今夜こそ飲んでみせる。僕はもう一夜にして酒飲みになり、一夜にして、なんだ、何も彼も知つてしまつた。僕は昨日の茂ぢやな

し』

『なに、飲みに行く』杉中は一寸驚いた顔をして、蒼白く疲れて歪んだ茂の顔をじつと眺めてゐ

たが、

『さうか、大抵、僕には判つたさ。然しそれは、何もそんなに大したことぢやない。少くも君が昂奮したり、悔恨したりするほどのことでもないだらう。要するに世間にありふれたことに過ぎない』と云ひ切つて、彼はまた快活な聲を立て、笑つた。

『何でも好いさ、君にはつまらないことに見えても、僕には重大な轉機を與えたことなんだ。然も、それがために今までどんなに苦しんだか知れなかつたことを、極めて簡単に片をつけてしまつたんだ、悔恨か歡喜か、何が何だか僕には判らない。然し、君はチエホフの書いたあの中學生が、初めて人妻と關係してすぐその翌朝自殺してしまつた小説を読んだことがあるかね』

『それがいけないのだ。君は何かと云ふと文學を引合に出してくる。さうしてその主人公と自分とを同じ配列におかうとするのだ。それが何だ、いつも君を禍ひしてる。僕はそんな小説なんか知らん。そんなことはどうでも好い。飲むと云ふなら大いに飲みに出かけやう』杉中は鼓舞するような調子でぐつと立ち上つた。

『よろしい、出掛けよう。ところで保阪、君は奥へ行つてね、房子里に今のこと、一寸そこまで

一緒に出掛けてくるからつて工合よく話して来てくれ給へ。今夜はすぐに歸つてくるからつて、あゝ、ほんとにすぐに歸つてくる。皆なして一寸一杯やつてくるだけだ。はゝ、僕の爲に、杉中君に祝つてもらはう。ぢやア保阪、房子の方を頼むよ、僕は自動車を呼びにやる』さつき飲んだビールの酔がまだ失せないのか、茂は勢よく扉のそとに出て行つた。

『どうしたんだ、バカに昂奮してようだが、君がまた何かしたんぢやないか』杉中は保阪の顔をじろりと見た。

『何でもありませんよ、屁でもないこつてすよ、茂さんだつてあゝやつて、だんく大人になるんでさ』保阪は鼻の先でふんと笑つて、奥にゐる房子の部屋の方へ出て行つた。

十一

嵐のあとには大氣が朗かに透き徹る。空は晴れて、太陽は風の雄叫びも波の氾濫も忘れたように燦爛として輝くものだ。が然しそれは自然の現象である。

兜町！ こゝは永久に闘ひの場所である。人間の慾と慾とがぶつかり合つて、火花を散らす時だけがその存在の最高の表現になるのである。買方は國家の隆運、會社の盛況を口に唱へ、賣屋の悲觀を國賊のように罵倒する。賣屋は人氣の逆上は却つて經濟界に悪影響を來たらすものとして、買屋を犯人扱ひにしてせゝら笑ふ。然し口實はどうでも好いのである。

成金！ 成金！ 一兵卒の歩が金になりさへすれば、それで彼等の望みは足りるのだ。人が死なうが、仆れようが、他人の事は自分に關係のない事である。仆すか、仆れるか、戦ひが白熱して來た時に、この町は一段と精彩を放つのだ。

然し今は恐ろしい嵐が過ぎたあとである。賣方も買方も、豫想外の大崩落を受けたあとでは迂濶に手出しも出來なくなつて來た。市場は日増しに閑散になつて來た。嵐の爲になぎ仆された人々の生臭い噂もだんくく消えて行つて、無風状態のような、沈滞した空氣に市場は覆はれた。

『まるで動かないぢやありませんか』

『これぢやまつたく上つたりです』

ものゝ一月とも経たない前に、あの物凄い激落の爲に、息もつけないほどの打撃を受けた人達

も、いまはまたこの保合を罵り初めた。

『何でも好い、動いてくれ』勝負好きな人々は、また血腥い争ひを心に願つた。

然し相場は無關心に、糊付けにしたように冷然として動かなかつた。

濱口老人は、この機會を利用して、愈その理想の一枚屋を開店することにしたのである。

『えらい保合になりをつたな』

店員も外交員も、閑散と無收入とをかこち顔に、ぼんやりとしてゐる、磯部の店に入つてくると、老人は愉快らしくげら／＼笑つた。

『これぢや仕様がありませんや、おまんまの喰ひ上げだ』外交員の山田は、いかにもしよげた顔をして恨めしさに云つた。

『まあ仕方がないこつちや、相場だつてお前、さうがた／＼動いてばかりをつたら疲れてしまふが、こゝらで一休一休みと云ふところやろ』老人はまた愉快らしく笑つたが、

『さてこれから、わしらが一つ働く番や、愈二三日中に一枚屋を初めようと思ふとるのや、なあ今が一番好い時機やろ、こない中のように、あゝ二十圓の三十圓のと動かれたら、金のないもの

は張ることも何も出来やへん、この保合が、わし等には受目なのや、どうだ。君等も一つ、わしが開業したらお客になつて何枚でも構はん張つとくれんか』老人は外交員に先づ説きはじめた。

『はゝ一枚屋ですか、一體どうして張るんです』年の若い鳥居が不思議らしい顔をした。

『同じことやが、一圓もつて來たら一圓だけ張るのや、そして上にも下にも八十銖逆に動いたらお前の損や、なあ口錢は二十錢やから、それで、自分の思つた方に一圓二十錢利が乗つたら二圓にして返してあげる。なあ、口錢は二十錢やから』

『はゝ、そいつは面白い。どつちへ動いてもあなたの方には二十錢の口錢つてえ得がある。こつちの方で口をきけば二十錢の損を見越してやらなきやならない』鳥居は呆れた顔をして笑ひ出した。

『そりや當り前のことやないか、定期を張つたかて直を張つたかて、客はちやんと口錢を拂ふとる。その口錢のお蔭で取引所かて仲買かて、君等かて、皆な贅澤な直似をして暮しとるのやないか。だから結局は張る者貧乏や、俺こそきつと金儲けしたろ、したろと思ふて亡者が皆な張りに來るるので、あの大けな取引所も、此兜町の仲間も立つとるのや、はゝ考へて見ると、張る奴

はみんな阿呆みたいなもんや」老人は無遠慮な聲を揚げて笑ひ飛ばした。

「濱口さんみたいなことを云つてゐたら、客なんかとれやしない、あなたは外交はまだ下手ですね」山田は高慢らしく横槍を入れて見たが、老人は一向驚く様子もなく、

「はい、こんなことを、どこへでも行つて云ふと思ふとるから君等はまだ若いのや、なあ君等に鹿瓜らしう、どうか御用を願ひます、と云ふたかて、背いてくれるような人間かいな、が然し、まあ相場師やの飛行機乗とか云ふものは、皆な自惚れが強いから、何もさう心配することはありまへんが、相場でもせうと思ふとる人間は、一圓持つても、十圓持つても、皆な千とか萬とか儲けることばかり考へてゐるによつてな、二十錢や三十錢の口錢のことは屁とも思ふてをりやへんが、飛行機乗が、俺だけは落やへん、と思ふて飛行機に乗ると同じ理窟や。またさう思はなんだら、間違ふたら金かて命かてなくなるのや。誰が相場を張つたり、飛行機に乗つたりする奴があるものか。みんな理窟は同じこつちや」

「はい、それで何でしよ、お前さんも始終負けてばかりゐながら、バクチばかり打つてゐるんでせう」今まで黙つてゐた保阪は、にやりと笑ひながら口を出した。

「餘計なことを云ふもんやありやへんが」老人は如何にも參つた様子で保阪をじろりと睨む眞似をした。

「はい、こりやよかつた」鳥居は手をたゝいておどり上ると、店の者はみんな一度にどつと笑ひ出した。老人は一寸でれた顔をしたが、皆の心がとけた隙を狙ふことは忘れなかつた。

「いやこれは參つた、保阪のお蔭で一本やられた」禿た頭を一寸掻いたが、「まあえゝわ、それでは何やな、明後日開業する時には、皆思つた方へ、五枚づゝは祝儀に張つてくれるやろ、なあ君達も帳場さんも皆して五枚づゝ位ならえゝやろ」老人は懐から帳面を引き出して、

「えゝと、保阪君が五枚、君は、さう／＼鳥居君やつたな、それから君はと」先方の返事も待たずにみんなの名前を書きつけた。

「いま店にをる人は九人か、五枚づゝで四十五枚、中々大した注文や、お蔭で注文取の幸先がよくなつて来たぞ、明後日の朝、わしが注文を取りにくると、見込み次第でどつちなと張つとくれんか、よう頼んだぜ」老人は一人で呑み込んでさつさと歸りかけた。店の者はみんな呆氣にとられた顔をしてゐたが、

『何ですか、お前さん一人でさう歩いてゐた日にや、こつちから注文に行くことが出来ないぢやありませんか。どつかに店でもあるんですか』保阪が引き留めて訊き直した。

『さう、それを云ふのを忘れとつた。店はなんや坂本町のミルクホール、あしこがわしの仲買店や』老人はすまして云つてのけた。店の者はまたぶつと笑ひ出したとき、

『それから帳場さんは何ぢや』と店の出口から顔を出して、

『は、こつちやに入つて、顔つなぎをしてくれと云ふのや、構はんが、入んなはれ、入んなはれ』と手まねきした。それと同時に顔に薄笑ひをたゝへながら杉中理一がのつそり入つて來た。

『やつ君か』最初に驚きの叫びを上げたのは茂だつた。

『何だ、杉中さんぢやありませんか、あなたが何ですか、一枚屋の帳場ですか』保阪は呆れた顔をして、杉中を一瞥した。

『は、磯部君も驚いたる、實は濱口さんが一枚屋を初めると云ふ話を聞いたものだから早速交渉して番頭に使つてもらふことにしたんだ。何しろこないだの狂人相場ですつかりやられてしまつたんでね、僕も手も足も出なくなつたんだ。と云つて客もなければ、資本もなしさ、止むを得

ないので一枚屋から一つ取りつかうつて云ふ考へなんだ。どうか一つ何分よろしくお引き立を願ひます』杉中は叮嚀に頭を下げて、さて快活に

『あは』と笑つた。

『結構ですとも、何しろ濱口さんと來た日にや、人のことなんかお構ひなしで強引に注文を取るんですからね、それであなたが帳場なら鬼に鐵棒でさ。ぢきに仲買の店位出せるようになりますよ』保阪はいつもの調子に似ず、しんみりした口調で云つた。

『いや有難う。そのつもりでしつかりやるさ。何しろ濱口さんと云ふ先達があるんだから、僕も安心してやれると云ふもんだ』杉中は老人を顧みた。

『そりやさうやが、仲買ぐらゐ朝飯前や、今もかうして四十五枚注文を取つたところや、これから歩いて十軒取れば、四百五十枚、すると口錢が九十圓入る。なあ、月にはそれ三九二千七百圓儲かるが、じつくり辛抱してをつたら、ぢつきに仲買の店位出せるようになるにきまつとる。さうしたら、店の印は何とするかな、は、まあそれはその時のこととして、注文取が大切ぢや。ではお願ひします』老人はさつさと出かけたので、杉中もあとについて店を出ると、

『おい杉中君待ち給へ』店のそとまで追つて来た茂が、後から呼びとめた。

『何か用か』杉中があとに戻ると、濱口老人は、

『わしはこれから得意廻りに歩いてくるでな、あんたはもう歸つてもよろしいが、一緒に歩いてかて面白い話でもなし、なあ茂さん』機嫌よく笑ひながら、向ふ側の店に入つてしまつた。

『は、元氣な爺さんだ』杉中は笑ひながら茂の方に振り向いた。珍らしくセルの單衣に角帯と云ふ和服姿で、茂は茫然と立つてゐたが、顔色は蒼ざめて、眼の中は赤く血走つてゐた。

『どうしたね、その後君は』いつか保阪と三人で、はじめて茂が苦しうに酒を呑むのを見せられてから逢はなかつた彼は、僅かの中に身體つきまで、いやにこなれて荒んで来た姿を見ながら憫れむよう、調子で訊ねた。

『いや僕よりか君がさ、急に、えらいことをはじめたね』茂も同情の籠つた聲で云つた。

『は、曲つたからつて、急に車力も出来ないし、月給をくれる奴もないからな、一枚屋でも好いちやないか。一枚だつて百枚だつて、相場の味に變りはないからな、ふ』

『そりやさうだらう、君のことだから、何か考へがあつてやりはじめたことだらうが、餘り奇抜

なので僕は驚いたのだ。それにしても君あのバクチ好きな老人と一緒にやつて大丈夫かね』

『奇抜なことはないさ、大阪の堂島にも現場張りつて、一枚からでも張らせるところがある。老人のことなんか、心配したつて仕方がない、儲かる時には儲かるし、損をする時には損をする、それだけのことさ、はつは』

と杉中は空を仰いだ。

二人は黙つて楓河岸の方へ歩いて行つたが、

『僕の方は一枚屋で、ともかく開店と云ふことになつたのだが、君の方の状態はその後どうだ。あの長森と云ふ青年は訪ねて来たかね』

少時たつて杉中が茂に訊いた。

『いゝや、あれつきり来ないんだ。夫で二三日前に、一寸、池田の家の様子を見せにやつたら、家はもう貸家になつて、どこへ越したか遺族の行方もまるで不明になつてしまつてゐるんだ。理窟から考へれば、こつちに大した責任のあることではないんだが、やつぱりどうも變に氣になつてね』茂は暗い顔をした。

『それで君は、不相變、苦しまぎれに飲んで歩いてゐるのかね、顔色が非常に悪いぜ』
 『仕方がないさ、苦しまぎれに憶えたことなんて、どうせロクなことぢやないのは判つてゐるけれど、ほかに君どうにも仕様がなないぢやないか』

『まあさうだらう。大人のハジカみたいなので、一度はみんなかゝるんだからね。然し親父さんの方は、それでも別段矢筈しいこともないかね』

『あゝ、親父はまるで知らん顔をしてゐる。保阪の話によると、本を讀んだり、書生の友人と交際をするのが一番いけないので、少し位遊ぶのは、商賣の勵みになつてかへつて好いと云ふのが親父の意見だと云ふことだ。はゝゝ有難いような有難くないやうな變な親父だ。當分僕はこの調子で續けて行く。だから少し位の金ならいつでも融通がつくのだからね、必要があつたら云つてくれ給へ。君に何かをする位が、僕に出来る幾分かの意義のある事だから』

『有難う。必要があつたら頼むかも知れないが、今の僕は、この無資本でやれる事が一番身に適した事だ。やれるだけやつて見るさ。勝つても負ても、僕は裸で相撲が取りたいからな。今度これでもやりそこなつたら、思ひ切つたことがして見たい。金はなくとも命がけなら何だつて出来る

だろ』杉中は何か心に決するらしく眉毛をびくりと動かした。

『君は元氣だから羨ましい。僕なんか全く駄目だ』

茂は力のない溜息をほつとついた。二人はいつの間にか、坂本公園の中に入つてゐた。夏近い樹々の葉は青々と茂つて、あたりには、保合相場に倦み果てたやうな人達が、ぶら／＼と歩いてゐた。

『しつかりし給へ、さうして君の親父さんのやうな根強い元氣を出し給へ。あの人は決して悪人ではないんだ。強情で我が強い。だから誰も彼も有頂天になつてあれまで買ひ上げた相場に反抗して賣通したんだ。さうして最後にそれが當つた。當然なことぢやないか。それを君が苦にやんで、くよく／＼するなんて愚劣なこつた。鈴子さんの親父さんが死んだのだつて、君に責任のあることぢやない。それまで君は苦にやんでどうするんだ。遊ぶのなら遊ぶで、うんと快活に、若い人間らしく遊びたまへ。なんだ君の顔は、まるで幽霊に取つかれた人間みたいだぜ。しつかりし給へ。僕なんか金もなければ家もないから一枚屋をやる。それでも前途に希望がある。うんと儲けてやる。儲かつたらすることは澤山ある。毎日そればかり考へてゐるんだ。先づ第一に、何

をして、と云ふ風にね。は、空想だ。然し空想も愉快だよ、駄目なら駄目で、またやる事は澤山ある。しつかりして元氣を出し給へ」杉中は踏む足にまで力を入れてゐた。

「駄目だよ僕、そんな元氣なんかとても出ない」がっかりした調子で云つたが、「どうだね君、これから一緒にどつかへ行かないか」と杉中を顧みた。

「今日は駄目だ。僕はまだ用がある。一枚屋を開店したら、愉快に吞んで君に元氣をつけてやらう。ぢやさよなら」杉中は急に思ひ出したように、さつさと公園のそとへ出て行つてしまつた。

濱口老人と杉中の、合名合資の一枚屋仲買店は、豫定通り六月三日に店を開いた。

坂本町の裏通りの、ミルクホールの隅の一脚の椅子と、前の卓子が二人の爲の店でもあり、帳場でもあつた。

老人は朝早くから出張して、磨きたての短靴を履いて、客筋を駆け廻つた。老人のお客は仲買や現物店の客や店員とばかりは限らない。近所の床屋の若い衆でも、八百屋でも魚屋でも、知る限りの人の顔さへ見れば、

「どうや、一圓から張れる相場を始めたのや、張つて見んか、一圓で一枚や、當りさへすれば幾

らでも儲かつて行く。一圓が二圓、二圓が四圓、四圓が八圓、乗せのせに行けば本相場の資本位すぐに取れるが、どうや張つて見んか」老人はその顔の廣いのを利用して、誰れにでも説き立てた。

兜町附近にゐるものとして、相場のやり方も知らなければ、相場に憧れを持たないよ、なものは尠かつた。況して敗れた人は、言もなく、どしどし姿を消して行く。いつもこの町に姿を見せるのは、勝つた者か、或ひは新進の人々である。暗い影は遠く去つて明るい光がこゝに残る。それはいつしかこの近くの人々の投機心を煽る原因になつてゐた。たゞ、彼等に不足なのは資金である。だから、十圓か二十圓の薄資本で出来るもぐり屋をはじめても、客は蟬集してくる所である。

老人の計畫と廣告は、豫想通りの中でした。

ミルクホールの硝子戸の影には色々な人の姿が出入りした。魚屋の小僧も飛び込んでくる。

「帳場さん相場はいまいくら」

「は、帳場さんか」杉中は苦笑して、

『二圓六カイセヤリだよ』

『ちや一枚買つとくれ、二圓七十錢だね』小僧は念を押して、一圓札をそつと出した。

『よし一枚だね。お前の名前は』

『吉つて云ふんだよ』

『魚吉か、一枚、二圓七十錢』と杉中はそれを小さな紙に書き留めた。

床屋の丁稚も、若い衆の小使ひ取りの使ひに來た。現物屋の小僧も、小さな投機心を満足させるべく三圓五圓と注文に來た。

寂れた、ミルクホールに出入する人の數はだん／＼に多くなつて來た。

前場が引けたとき老人は、

『いや今日はなか／＼忙しかつた、どの位注文が集まつたかね』と杉中に訊ねた。

『さあ』と彼は勘定したが、

『賣か二百に、買が二百五十、總計四百五十ですね』

『ほう、大したもんやな、毎日こんな工合にも行くまいが、まあ結構や』老人はほく／＼喜んで

で、上等の辨當を注文した。

意外の好成績が、杉中の心にも勇氣を與えた。

『よし、この調子で行けば、俺も一旗擧げる事が出来るのだ。せめて五百か千の資本が出來たらもう一度乗り出すのだ。それに俺はまだ若い。磯部の親父でも、あゝして一擧にして何百萬と儲けたのだ。俺にもそんな時機が早く來てくれ。一資本握つたら、あの安達の爺いの好策をあばき立て、父親の無念を晴らしてやる』彼は眼をつぶつて心に誓つた。老人がまた注文取に出てしまつて、寂れたミルクホールの中に、じつと靜かに坐つてゐると、生れた家や、父の經營してゐた銀行の建物やが眼の前にちらついて來る。銀行の黒い壁には、かつては杉中銀行と、白字で太く拔出してあつたのだが、夫も今は安達系の、吉野銀行の名に塗りかへられてしまつてゐる。

『よし、きつとやつて見せる』注文の客のときれとぎれに、杉中は幾度か心に繰り返した。

すべてが眼まぐるしく變化して行く中にも、麻布の磯部の本邸だけは、依然として静かな空気に閉ざれてゐた。玄關前の植込みも、庭の樹々も、出入りの植木屋が来て刈り込んで行つただけで、家の中の人々の顔觸れも、以前と違ふことはなかつた。

しかしこゝにもたゞ一つ、隠すことの出来ない變化が現れた。それは房子が著しく沈み勝ちな女になつた事である。

いまゞでは、子供の様に無邪氣に晴々と輝いてゐた房子の眼が、ともすればこの頃は伏目勝になることが多くなり、眉毛の間には何か陰鬱な氣が漂つてゐた。全く房子には、此一二ヶ月の僅の間に、彼女の周囲に起つた出来事が何も彼も判らなくなつて了つたのだ。漸く没落の底から息を吹き返して、大した金を儲けたと云ふ父は、此頃では家にもつく暇もないほど飛び歩いてゐる。時たま家にゐる時も、昔のように房子を相手に無邪氣に笑ふことも尠ければ、芝居や遊山に連れて行く事もなくなつた。さうしてたゞ、じつと眼を瞑つて何か深く考へ込むか、それでなければ獲物をあさる 獣 のように、がつくと、數字の書いた書類を調べてゐる。父が家にゐれば朝早くから來客がある。絶え間なく電話がかゝつてくる。狂人のように自動車をせき立て、飛び

出して行く。父の愛からも房子は可なり遠ざかつた。

いつか房子が、珍しく一緒に膳に坐つたとき、

『そんなにお父さんお働きたらなくなつたつて、もつと静かにして皆で面白く暮した方が好いちやありませんか』と云つて見た。

『バカを云ふな、お前なんか子供だからまだよく判らないのだ。わしのように、あんなに死ぬか生きるかの苦しみを通つて來て、此位のことでも満足が出来るものかな。父さんはこれからだ。大臣でも何でもあごで使へるようになって見せる。いつまでも栗田なんかに追ひ廻されてゐて堪まるものか。小池でも神田でも、みんな堂々たる實業家になつてゐる。わしも相場師では終らんつもりだ。もう少し待つてゐなさい。父さんは屹度やつて見せる。お前も淋しかつたら、友達を呼ぶなり、どこへでも遊びに行くなりしたが好いだらう』

父はまるで房子の言葉を受けつけなかつた。優しかつた兄の茂も、この頃では夜泊りまでするようになつてしまつた。そして房子の顔を見ると、何か、わざとらしい辯解のようなお世辭のようなことを云ふだけで、家にゐれば、自分の部屋でとろけたように睡り込んでゐるだけであ

る。

鈴子の父の死んだこと、その後行方が判らなくなつたこと、自分の家との間に起つたいやなきさつ、凡てが房子の心を暗くした。

三月ほど前までは父はいつも沈んでゐた。けれども房子には優しくかつた。さうしてもし自分の仕事は甘く行つたら、といつても希望を共にした。それはこんな淋しい冷い生活のことではなかつた。兄もいつも自分をいたはつた。もし父親がこのまゝに失敗しても、自分達はきつと力を合せて暮して行かう。兄はよくさう云つて自分を勵ました。

父の仕事は甘く行つた。出入の商人達までが、

『旦那さまは大層な御成功でいらつしやるさうで』口々に云ふほど世間にも知れ渡つた位お金を儲けた。

さうして自分の生活は、だんだん淋しく冷たくなつて行くのである。

房子は心に父の成功を呪ひたくなつて來た。

無邪氣でも内氣な房子は、それかと云つて勝手氣儘に飛び歩くほどの氣にもなれなかつた。

日蔭の花のような淋しい日が續くうち、いつか彼女はだん／＼陰氣な女になつてしまつた。夕飯が終つて、自分の部屋に引籠つて、たゞ茫然と鈴子のことや、兄の事を考へ込んでゐた時に、

『お嬢さま、杉中さんがお見えになりました』

とおしまが知らせて來た。

『え、杉中さんが』房子は思はず飛び上つた。

『若旦那さまがおるすなら歸らうかと云つていらつしやいますが』

『あら、好いのよ、あたしお目にかゝつて伺ひたいことがあるのだから、あたしが行くわ』

房子は矢ツ張り子供らしく、廊下を走つて玄関へ出て行つた。

『随分しばらくお出でになりませんでしたのね、兄は居りませんけれど、お上りになつてもよろしいでせう、あたしあの色々』と云ひかけたとき、房子ははじめて、自分の胸がどきりとして、顔が赤らむだのを自分で感じた。然し杉中はその事には氣附かないように、

『あゝさうですか、まだ歸りませんか、いやもう少し早いとよかつたのですがね、僕は今日から

商賣をはじめて忙しかつたので、店の方へ行つたらもう遅かつたのです、それで歸つてゐるかどうかと思つたが、こちらへも御無沙汰してゐるので、一寸お訪ねしようと思つてやつて來たのです」と快活な調子で云つた。

『あら御商賣を、ちつとも存じませんでした、あなたがまあ、どんな御商賣を』
おしまはそばから不審らしく口をはさんだ。

『いや商賣と云つてもね、實に不思議な商賣で、一寸説明が出来ないのだ、いや變なことになつたものでね、あは』杉中の快活な笑ひ聲を耳にすると、房子は久し振りで明るい世界に引き出されたような氣になつて、

『よろしいでせう、まあお上り下さいました』と引きとめた。

『ぢやあ、一寸失禮しませうか』杉中がやつと靴をぬぎかけると、

『さ、しまやよしにさう云つて、御座敷を早くちやんとしてね、ほんとにあたし今日は嬉しいわ』と自分も廊下をばた／＼と駆けて奥に入つた。

けれども座敷の中に二人向き合つて、

『どうしましたその後茂君は、いつかの晩、自動車で日本橋の方へ行つたとき、はじめて酒を飲むのを見たんですが、やつぱりやつてゐますか』と訊かれた時、房子はまたじつと下を向いてしまつたが、しばらくたつて顔をあげたとき、丸々とした眼の中が涙にきらりと光つてゐた。

『あたし、それをあなたに伺ひたいと思つてをりましたの、兄さんは、そりやあ此の頃は、急にまるで變つてしまつて、夜だつて遅くならなければ歸つて來ないし、時々は何よ、まるでわけもわからないほど酔つてくることがあるんですもの。そのたんびに、父さんに聞えないようにと思つてどんなに心配するか知れませんが、まあほんとに急にどうしてあんなになつてしまつたのでせう。それに父さんだつて、やつぱり夜は遅いし、滅多に家に落ついていらつしやることもないんでしょ、あたしほんとに淋しくつてつまらなくなつて心配ばかりしてるものだから瘦てしまひましたわ』房子は自分の腕首を握つて見せて寂しく笑つた。

『金が儲かつたからですよ』杉中は思はず、すばりと云ひ放つたが、それと同時に彼の顔には、自分の言ひ過ぎを悔るような色が現れた。しかし房子には、そんなことは判らないらしかつた。

『えゝほんとにさうですわ、全くさうよ、父だつて失敗した、失敗したと口癖にしてゐた時分に

は、もつと愛情もありましたし、兄だつてあんな風ではなかつたのですもの』
『然し、金がなくつてもいけないのです。鈴子さんのお父さんや、あすこの家の人達も、それが爲にあんな風になつてしまつたのぢやありませんか』

『それもさうですわねえ、なくつても困るし、無暗にあつてもいけないし』房子は呟くように云つて首をかしげてじつと考へ込んでゐたが、

『だから何ですわ、お金なんかいつそ世の中にない方が好いと思ひますわ。お金より大切なものが澤山あるんですもの、それをあの、お金があるからみんなめちやめちやになつてしまふんですもの』と云つたが、そのとき房子の眼の中は、生々として丸く輝いた。

『みんなそれで困つてゐるんですね、茂君なんかも、お父さんが儲けた爲に随分苦しんであんな風になつてしまつた。然し矢ッ張り儲けようと思つてゐます。金がいけないと云つても、ある中はなければ苦しむ、それにまた何も出来ない。だから儲けるのです。自分のしたい事をする爲に儲けるのです。いくら儲けたつて、金に征服さへされなければそれで好いのだ。ねえさうでせう、皆な金に征服されてるからいけないですよ。だから僕は儲けます』と云つて杉中はずこ

りと笑つた。

『だつて、あたしなんかまだそんなことは出来ませんもの』

『は、そりやさうですね、しかしいまにさういふ覺悟が必要になるでせう。茂君が歸つて來たらうんと云つておやんなさい。びくびくしなくてもつとしつかりしろつて杉中が云つてゐたつてね』と云つて杉中はまた愉快らしく笑つた。

庭の面はもう薄暗く暮れてゐた。初夏らしいさわやかな風が、座敷の中に靜かに流れ込んで來た。

『杉中さんは、あの御飯は如何でいらつしやいますの、まだでしたら、何もございませんが』とおしまが房子に訊きに來た。

『いや、僕はどうか心配しないで下さい。さつき夕飯代りのものをやつて來たばかりです。それにまだその何です、僕は』と、おしまの顔を振り返つて大聲をあげて笑つた。

『ほ、さうでございましたね、あなたはまだお楽しみがおありなのでせう。若旦那さまがいらつしやるとよろしいのでしたのに』とおしまも軽く笑つた。

『いや、ゐなくつても好いのです。實はね、今日一枚屋と云ふ、君方に説明しても判らない商賣をはじめたところが、開店早々非常な好成績だつたのです。それで茂君がゐたら一緒にどつかへと思つて来たのだけれど、ゐなければゐなくつて好いのです。自分一人で大いに楽しめばいいのだから、そろく失敬するとしませう』杉中が歸らうとする氣勢を見せると、

『あら、そんならもう少し御ゆつくりなさつてもよろしいでせう。その中に兄も歸るかも知れませんが、せんからね、しまや、何か冷たいものでも差し上げておくれ』とおしまに云ひつけて、

『ほんとに此頃は家は随分淋しいんですよ、父さんがゐないと店の者だつてロクに來ませんしね、だから一人で毎日くしゃくしゃ考へてばかりゐますの。もう芝居にも行きませんし、どこへも出ませんわ、お友達だつて、鈴子さんきりでしたもの』と云ひかけたが、

『あ、あの鈴子さんと云へばね、どつか四ツ谷の方にいらつしやるんですつて、こないだ保阪が云つてゐましたわ。何でも妙なところから聞いたんだつて、どうしても家は教へませんでしたけれど』

『え保阪が鈴子さんのところを』杉中は不審に堪へないらしく首をひねつたが、

『それで何ですか、茂君ももう知つてゐますか』

『いえ、兄さんはまだ存じませんようです』

『それにしても、保阪が知つてゐるのは不思議だな』杉中は獨言のやうにつぶやいて、

『それでどこに住んでゐるのか、どんな事をしてゐるのか教へませんか』

『え、それはどうしても教へませんの、たゞね、妙なところから聞いたんだ、つて云ふだけでそれから先はどうしても言ひません』

『よろしい、それでは僕が訊いて見ませう。然しいま鈴子さんの家が判つたからつて、急にどうなると云ふわけでもないですがね、たゞまあ、どこにどんなことをして暮してゐるか云ふのを知るだけに止まつた話ですな』

『それはさうかも知れませんが、兄も随分苦しんだ様でございますもの、もしお逢ひしてもとのようになれば、あたし本當にどんなに嬉しいかと思ひますわ』房子は心持ち顔を赧くした。

『それでは近い中に、保阪に僕が訊いてみます。然し茂君だつて、今はどんな風に考へてゐるんだか判らんでせう。まあともかく訊いてみます。ではこれで失敬しませう』杉中は軽く頭を下げ

て立ち上つた。

『ほんとに何もお構ひしませんで失禮しましたわね』房子は大人びた口調で云つたが、すぐに『だげどとき／＼遊びに来て下さいましね、あたし一人つきりで本當淋しいんですもの。杉中さんが来て下されば、兄さんだつてきつと家にゐますわ、今度は澤山御馳走しますから本當にと／＼来て下さいましね』と子供のように言ひながら、首をかき上げてにこりと笑つた。

『えゝやつて来ませう。僕も商賣がきまつたから、これからはちつとは身體にも餘裕が出来るからまた遊びに来ませう。然しあなたもそんなにくしやく／＼してゐないでもつと元氣を出さなければ駄目ですぜ、お父さんは成金だから、構はないでうんと元氣を出して飛んで歩いたら好いでせう』氣持よく笑ひながら、杉中はさつさと玄關の方へ出て行つた。おしまも玄關へ見送りに来て『今夜はほんとに失禮致しました。杉中さんの御好物も差し上げることが出来ませんで、こんどは若旦那さまと御一緒にお歸り下さいましよ、さうすれば、私が腕によりをかけて、澤山御馳走致しますから、おほゝ』と片手で口を押へて笑つた。

『あら、いやなしまや兄さんがいらつしやらなくつたつて、あたしが御馳走しますわ、今夜はお

話ばかりしてゐて、それで氣が附かなかつたの、だつて遅いんですもの、ねえ杉中さん、今度はいつ頃来て下さる』房子は杉中の帽子を渡しながら、顔をのぞくようにして訊ねた。

『いや、近い中に屹度來ます。茂君も引つ張つて歸つて來て、一つおしまさんの腕前を拜見しよう。なあおしまさん』

『えゝそりやあもう立派なものですわ、どうかお驚きにならないように』おしまがまた笑つたとき、

『ぢやあ、失敬』杉中は一寸頭を下げて、門の方へ出て行つてしまつた。

房子はじつと、杉中の姿が門のそとに消えるまでそこに立つてゐた。

『ほんとにいつも元氣な、男らしい方ですわ、いらつしやいますねえ』とおしまが云つたが、房子はそれにも答へないで、黙つてそこに立つてゐたが、やがて

『あゝ、あたし何だかつまらないわ』と云ふと同時に、ぱた／＼と廊下をかけて、自分の部屋に入つてしまつた。

房子と約束したことは、絶えず杉中の心にかゝつてゐたが、開業早々の商賣が忙しいのと、濱口老人の行動がまるで捕捉する事も出来ないように飄々としてゐる爲に、保阪に逢つて訊ねるひまも見出せなかつた。

老人は相場よりもバクチが好きであつた。一時は將軍と謳はれるほど莫大な金を儲けたのも、片つ張りのバクチ風の張り方が幸運に恵まれたのであつたし、それを一舉に失つたのも、矢つ張り儲けたのと同じ過程をたどつたに過ぎなかつた。老人の頭はその當時から至極簡單である。『當れば儲かるし、曲れば損をする』たゞそれだけの事である。世の中はもつと複雑になつてくるとし、株の賣買にもその裏面には、政府筋の行動、海外の氣運、會社筋の計畫など、知らなければならぬ事が生じて來ても、老人の信條は變らなかつた。

當れば儲かるし、曲れば損をする。老人はその調子で、いつもバクチ場へ出かけて行つたが、

そこで老人は、いつも曲つて損をする運命の方に従はなければならなかつた。損をしたときには八丁堀の裏長屋の奥の家に引つ込んで、布團の皮も質に置いて、縮ばかりになつた奴を引つかぶつて寝込んでゐる。米がなくなつても、味噌が切れても平然として寝込んでゐる。さう云ふ場合に困るのは細君である。京都の舞子を、若盛りの當りにまかせて根引きをして連れて來た女であるが、いまはもう、老人のバクチと借金に追ひ廻されて、昔の美しさを青くそつた眉毛のあと、口元に残してゐるばかりになつてしまつた。その細君が昔馴染の仲買の家へ出かけて行く。老人ならば、すぐにバクチのモトデになることを知つてゐる人達も、細君にだけは金を貸す。もつともそれは、老人の要求するほど大したものでもないからでもあるが、それで細君は米を買ひ、味噌を買つて、ほつと息をつくののである。

老人の寝てゐる期間は決して一定してゐない。二日で起きることもあるし、十日も一月にもわたる事がある。たゞその起き方だけがいつも同じことなのだ。いま、布團をかぶつて眼をつぶつてゐた老人が、いきなりぱつと、床をけつて起き上ると、『おるい、着物を出してんか』と怒鳴るのだ。

着物だけは、どんな場合にも質におく事を厳禁してあるのが老人の家の憲法である。

細君は黙つて着物を出す。老人も黙つてそれを着る。空の財布を持つてぶらりと家を出て行くのだ。それから先は、考人が寝てゐた間の頭の回轉の工合によつてどんな事にでもなつて行く。

仲通りの、知合の道具屋から、何かまやかし物を二つ三つ借り込んで兜町へ行く事もある。

老人の顔と押は、それを二三倍に賣りつける。翌日もまた道具を仕入れてくる。その翌日もまた仕入れる。然しそれは長くとも半月以上は續かないのだ。

『濱口さんは飽きつぽい』非難する人はさういふが、それは非難する方が無理なのだ。如何に兜町だと云つても、老人のまやかし物を義理の爲に倍も高く買ひ込む人は、そんなに澤山はゐないからである。が然し、それでまた老人は取りつくのだ。バクチを打つか相場を張るか、曲つて曲つて、布圖の皮のなくなるまでは續いて行く。やがて同じ事は繰り返される。神妙らしく、菓子箱をぶら下げて店から店へ賣り歩いてゐる事もあつた。然しそれも一月とは續かない。菓子が高いからである。

『濱口さん、お前さんバクチさへやめりや、あつしがきつと世話をしあけるけど』昔馴染の横

田と云ふ男が親切に云ひ出したとき、

『有難う。バクチもまた受ける時があるでな、わしもその中には一儲けして見せますが』老人は嘯いた。老人にはバクチが命たつたのである。

杉中は、老人のそのバクチ好きな性癖の爲に、開業早々から惱まされた。場が引けると同時に老人は、どこかに姿を消してしまふからである。それが爲に、一枚二枚と云ふ客筋との勘定を清算することも出来なければ、帳面の整理も出来ず、損益の決算もすることが出来ないのだ。恐らく老人は、仲買の店に集まつて、この閑散無聊な保合相場に苦しんでゐる人達と勝負を争ひに出かけてしまつたものであらう——一時間二時間と云ふ無爲な時間を、ミルクホールの片隅でぼんやりと待つてゐなければならなかつた。

勝つたのか負けたのか、聽て老人は例の通り飄然として杉中のところに歸つて来る。一日の清算が終るのは、六月の日もすでに暮れかゝる時分である。勘定を終ると老人はまた財布を懐に押し込んで、あたふたと出掛けてしまふ。杉中が漸く自分の身體に返つた時は、頑健な彼も可なり疲れて、もうどこへ出掛ける勇氣もなくなつてしまふのだつた。

行きつけの小料理屋で、二三本の酒を飲むと、もう陶然として、身體の心までけだるくなつてくる、それがこの頃の落寞とした彼の生活の唯一の楽しみだつたのだ。身體のどこかで、白熱するほど燃え上りたい情念をじつとこらへて、杉中は、龜島町の二階住居へ歸つて行く。そこには一脚の机と、五十燭の電燈と、積み重ねた書物が彼の歸りを待つてゐるだけなのだ。たゞ一人ぼつねんとして、机の前に座つてみると、堪まらない寂寥が彼を襲ふ。身體でもぶつけない焦燥の心が起る。然し杉中はじつとそれを堪へてゐた。

『今に見ろ、きつと俺も乗り出して見せてやる』彼は心につぶやいて、じつとざわ立つ心を鎮めるべく努力した。

房子との約束は、心にかゝつてゐながらも、彼はそんな風で保阪に逢ふ機會すら得られなかつた。杉中はそれを濟まなく思つて、自分で自分を責めてゐた。

四日目の午後だつた。例の通りミルクホールの一隅に腰を下して一枚二枚と云ふ注文を受けてゐたが、相場は釘づけにされて了つたので、注文も途絶えてしまつた。彼は茫然として、しみだらけな天井を仰いでゐた。

『一枚屋さんて云ふのはこゝですか』入口から大きな聲で怒鳴つて来るものがあつたので、ふと我に返つてそつちを見ると、磯部の家で會つた鐵公が、その時よりもこけ切つた、ぼろ／＼のなりをして一足店の中に踏み込んだところだつたが、杉中の顔を見ると、

『あつ、あなたですか』と弱り切つた顔をして首をすくめた。杉中はその姿が餘り滑稽なので、思はずくす／＼と笑ひながら、

『一枚屋は僕がやつてゐるが、何か用かね』と訊ねてみた。

『へ、そりやあ弱つた。あつしはまた、だれかもつとほかの人間がやつてるのかと思つて來たんですよ、あんたぢやね、どうも工合が悪い』鐵公は間が悪さうに頭を掻きながらにやりと笑つた。

『何も僕だつて差支はないだらう、それとも何か、また例の手でゆすりにでもやつて來たのか』

『そ、そんなことがあるのですか』杉中の態度が案外碎けてゐるのに安心したらしく、鐵公は前の椅子に腰を下して、

『そんなつもりで來たんぢやありませんよ、たゞ、二三枚張らせて貰はうと思つて來たんですけ